

東山古墳群

— 4・5次調査 —

1994

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

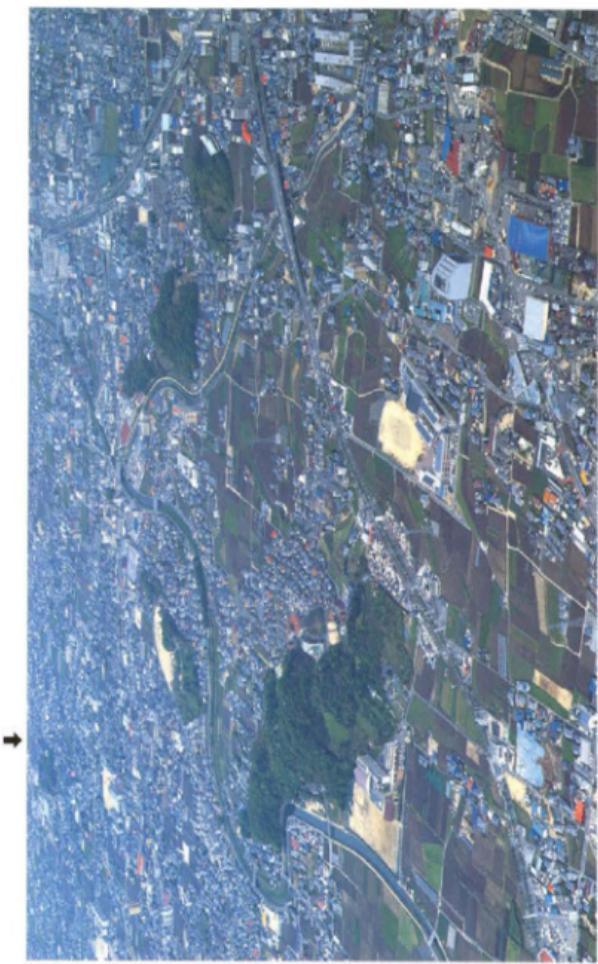
東山古墳群

—第4・5次調査—

1994

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

東山古墳遠景（南西より）





19号墳石室（北西より）



T 4 出土須恵器壺

序

この報告書は、松山市教育委員会文化教育課と財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが松山市都市整備部公園緑地課から委託を受け、平成2年度から発掘調査を実施し、その結果を埋蔵文化財センターがまとめたものです。

東山古墳群は、松山平野のほぼ中央に位置する独立丘陵で、『伊予國風土記』逸文に記されている「伊予三山」（天山・星ノ岡山・東山）のひとつとしてよく知られています。これまでの報告で、この周辺には縄文・弥生時代の遺跡をはじめとして古墳時代から中世にわたる数多くの遺跡が分布していることが判明しています。

昭和53年から54年にかけて調査された1・2次調査結果をまとめた『東山鷺が森古墳群調査報告書』（昭和56年刊）によれば、東山は、松山平野の中でも有数の古墳時代における群集墳であることを報告しています。

今回報告しますのは、その第2弾となるもので、4・5次調査を合わせると14基にも及ぶ古墳を検出し、完全な遺存状態ではなかったもののさまざまな古墳の形を確認することができ、松山平野全体の古墳形態を考える上で貴重な資料となっています。また、古墳の存在によって、当地域一帯には数多くの集落があったことが考えられ、「伊予三山」を取り巻く古代の集落を彷彿させてくれます。

こうした成果をあげることができましたのも、ひとえに埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力をたまわった関係各位のかたがたのお陰と心から感謝申し上げ、今後ともなお一層のご指導、ご助言をお願い申し上げる次第です。

なお、本書が、埋蔵文化財調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、教育文化の向上に寄与できることを願っております。

平成6年3月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財團
理事長 田中誠一

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会文化教育課と財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが平成2年12月から平成4年3月までの間、実施した松山市東石井町乙39-1他所在の松山市有地内における発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、松山市公園緑地課が公園整備事業に伴う事前調査として実施された。
3. 遺物の実測・製図、遺構の製図は、高尾和長、岩本　憲、山邊進也、志賀夏行、原田英則、仙波ミリ子、仙波千秋、金子育代、高尾久子が行った。
4. 遺物の実測図は、須恵器1／3、埴輪・弥生1／4、鉄器・鉄製品・石器・装身具1／2とすることを原則とした。なお、遺物実測図・遺構測量図のスケール下には縮分を付記した。
5. 遺構のうち表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例を参考にした。
SD = 清、SK = 土壙、SX = 性格不明遺構
6. 遺構の撮影は、大西朋子、田城武志、高尾和長が、また遺物の撮影は、大西朋子が行った。
7. 使用した方位は、すべて磁北である。
8. 本書にかかる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管している。
9. 本書の執筆・編集は、田城武志（遺構編ほか）、高尾和長（遺物編）が行った。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	2
第Ⅱ章 東山古墳群の位置と歴史的環境	
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	5
第Ⅲ章 東山古墳群4次調査	
1. 調査の経過	11
2. 調査の記録	12
(1) 調査の概要	12
(2) 9号墳	17
(3) 13号墳	29
(4) 15号墳	32
(5) 16号墳	38
(6) 17号墳	42
(7) 18号墳	45
(8) 溝状造構	48
(9) 土壙状造構	49
(10) 他の出土遺物	57
第Ⅳ章 東山古墳群5次調査	
1. 調査の経過	79
2. 調査の記録	80
(1) 調査の概要	80
(2) 19号墳	82
(3) 20号墳	92
(4) 21号墳	93
(5) 他の遺構と遺物	96
第Ⅴ章 調査の成果と課題	
1. 4次調査	124
2. 5次調査	125
第Ⅵ章 考察	
1. 東山古墳群出土初期須恵器の螢光X線分析	129
2. 松山平野における非陶邑系須恵器に関する一考察	132

挿 図 目 次

4次調査

第1図 調査地周辺地質図	4
第2図 調査地周辺主要遺跡分布図(1/25,000)	8
第3図 調査地位置図(1/1,000)	10
第4図 グリット設定図(1/500)	12
第5図 調査前地形実測図(1/300)	13
第6図 調査後墳丘実測図(1/300)	14
第7図 4次調査検出遺構全測図(1/400)	15
第8図 調査区南壁土層断面図(1/40)	16
第9図 9号墳全測図(1/150)	17
第10図 9号墳墳丘西壁・北壁土層断面図(1/100)	18
第11図 9号墳石室平面及び断面図(1/30)	19
第12図 9号墳周溝内出土遺物実測図〔1〕(1/3)	21
第13図 9号墳周溝内出土遺物実測図〔2〕(1/3)	22
第14図 9号墳周溝内出土遺物実測図〔3〕(1/3)	23
第15図 9号墳周溝内出土遺物実測図〔4〕(1/3)	24
第16図 9号墳周溝内出土遺物実測図〔5〕(1/3)	25
第17図 9号墳周溝内出土遺物実測図〔6〕(1/3)	26
第18図 9号墳周溝内出土遺物実測図〔7〕(1/3)	27
第19図 13号墳周溝内出土遺物実測図(1/3)	31
第20図 15号墳周溝内出土遺物実測図〔1〕(1/3)	33
第21図 15号墳周溝内出土遺物実測図〔2〕(1/3)	34
第22図 15号墳周溝内出土遺物実測図〔3〕(1/3)	35
第23図 15号墳周溝内出土遺物実測図〔4〕(1/3・1/2)	36
第24図 16号墳周溝実測図(1/100)	38
第25図 16号墳周溝内出土遺物実測図(1/3)	39
第26図 16号墳土層断面図(1/40)	40
第27図 17号墳周溝内出土遺物実測図(1/3)	42
第28図 17号墳南壁土層断面図(1/40)	43
第29図 17号墳東壁土層断面図(1/40)	44
第30図 18号墳周溝内出土遺物実測図(1/3・1/2)	47
第31図 S D 1 出土遺物実測図(1/3)	48

第32図	S K 1 平面及び土層断面図 (1/40)	49
第33図	S K 2 平面及び土層断面図 (1/40)	50
第34図	S K 4 平面及び展開図 (1/20)	51
第35図	S K 5 平面及び土層断面図 (1/20)	52
第36図	S K 6 平面及び上層断面図 (1/40)	53
第37図	S K 6 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	54
第38図	S K 7・S D 1 平面及び土層断面図 (1/40)	55
第39図	S K 8 平面及び土層断面図 (1/40)	56
第40図	S K 9 平面及び土層断面図 (1/40)	56
第41図	S K 11 平面及び土層断面図 (1/40)	57
第42図	9号墳出土弥生土器実測図〔1〕(1/4)	58
第43図	9号墳出土弥生土器実測図〔2〕(1/4)	59
第44図	9号墳出土弥生土器実測図〔3〕(1/4)	60
第45図	15号墳出土弥生土器実測図 (1/4)	61
第46図	18号墳出土弥生土器実測図 (1/4)	62
第47図	9号墳周溝内出土石器実測図 (2/3)	64

5 次調査

第48図	調査地位置図 (1/1,000)	81
第49図	19号墳石室平面及び断面図 (1/40)	83
第50図	19号墳石室平面図 (1/20)	84
第51図	19号墳石室平面及び展開図 (1/40)	85
第52図	19号墳石室及びT 5 土層断面図 (1/40)	87
第53図	19号墳石室内遺物出土状況図	89
第54図	19号墳石室内出土遺物実測図〔1〕(1/3)	90
第55図	19号墳石室内出土遺物実測図〔2〕(1/2)	91
第56図	20号墳石室平面及び展開図 (1/20)	92
第57図	21号墳石室平面及び断面図〔1〕(1/20)	94
第58図	21号墳石室平面及び断面図〔2〕(1/20)	95
第59図	T 1 平面図 (1/100)	96
第60図	T 1 土層断面図 (1/40)	97
第61図	T 2 平面図 (1/200)	99
第62図	T 3 平面図 (1/200)	100
第63図	T 2 土層断面図 (1/40)	101

第64図	T 3 土層断面図 (1/40)	103
第65図	S D 3 平面及び遺物出土状況図 (1/20)	105
第66図	T 3 出土遺物実測図〔1〕(1/4)	106
第67図	T 3 出土遺物実測図〔2〕(1/2・1/3)	107
第68図	T 4 平面図 (1/200)	108
第69図	T 4 遺物出土状況及び上層断面図〔1〕(1/20)	109
第70図	T 4 出土遺物実測図〔1〕(1/3)	110
第71図	T 4 出土遺物実測図〔2〕(1/2)	111
第72図	T 4 土層断面図〔2〕(1/40)	112
第73図	T 4 土層断面図〔3〕(1/40)	113
第74図	T 4 土層断面図〔4〕(1/40)	115
第75図	T 5 平面図 (1/200)	117
第76図	T 6 平面図 (1/200)	118
第77図	T 2, 3, 6 出土遺物実測図 (1/2・1/4)	119

考 察

第78図	東山古墳群出土初期須恵器のR b - S r 分布図	131
第79図	非陶邑系須恵器出土の主要遺跡とその周辺 (1/180,000)	133
第80図	東山古墳群5次調査T 4 山土遺物 (1/3)	135
第81図	東野お茶屋台古墳9号墳出土遺物 (1/3)	136
第82図	出作遺跡S X 0 2 出土遺物 (1/3)	137
第83図	非陶邑系壺に伴出する遺物	138
第84図	酷似する壺 (1/4)	140
第85図	東山古墳・出作遺跡出土遺物	143
第86図	東野お茶屋台古墳出土遺物	144

写真図版目次

4次調査

- 図版1. 1 9号墳調査前（南西より）
2 9号墳周溝検出状況（北より）
- 図版2. 1 9号・13号墳周溝検出状況（南より）
2 9号N E区周溝内遺物出土状況（南西より）
- 図版3. 1 9号墳周溝内遺物出土状況（南より）
2 9号墳主体部・SK3〔左上〕・SK4〔中央下〕（北より）
- 図版4. 1 9号墳主体部・SK3〔中央下〕・SK4〔右上〕（東より）
2 9号墳周溝〔下〕（南より）
- 図版5. 1 15号墳S E区遺物出土状況（西より）
2 9号墳周溝〔左上〕・13号墳周溝〔下〕・15号墳周溝〔右〕（南西より）
- 図版6. 1 16号墳N W区遺物出土状況（北東より）
2 16号墳N W区遺物出土状況（南より）
- 図版7. 1 16号墳主体部・周溝（南より）
2 16号・18号墳周溝（東より）
- 図版8. 1 SK3（東より）
2 SK4（東より）
- 図版9. 1 SK6遺物出土状況（西より）
2 SK6遺物出土状況（東より）
- 図版10. 1 SD1遺物出土状況（南より）
2 SD1遺物出土状況（南より）
- 図版11. 1 9号墳周溝内出土遺物①
- 図版12. 1 9号墳周溝内出土遺物②
- 図版13. 1 9号墳周溝内出土遺物③
- 図版14. 1 9号墳周溝内出土遺物④
- 図版15. 1 13号・16号墳周溝内出土遺物

図版16. 1 16号墳周溝内出土遺物

図版17. 1 15号墳周溝内出土遺物①

図版18. 1 15号墳周溝内出土遺物②

図版19. 1 18号墳周溝内・S D 1・S K 6 出土遺物

図版20. 1 9号墳丘内出土遺物

図版21. 1 9号・11号・15号・16号・18号墳丘内出土遺物

5次調査

図版22. 1 19号墳調査前（北東より）

2 19号墳石室内落ち込み石①（南より）

図版23. 1 19号墳石室内落ち込み石②（北より）

図版24. 1 19号墳石室内礫床面状況①（南より）

図版25. 1 19号墳遺物出土状況①（東より）

2 19号墳遺物出土状況②（南より）

3 19号墳遺物出土状況③（南より）

図版26. 1 19号墳石室内礫床面状況②（南より）

図版27. 1 19号墳遺物出土状況（北より）

2 19号墳奥壁（南より）

図版28. 1 19号墳完掘状況①（南より）

図版29. 1 19号墳完掘状況②（東より）

2 19号墳完掘状況③（北西より）

図版30. 1 19号墳奥壁完掘状況④（南より）

2 19号墳周溝内遺物出土状況（南より）

図版31. 1 19号墳周溝完掘状況（東より）

図版32. 1 T 4 調査前（北より）

2 T 4 完掘状況（北より）

図版33. 1 T 4 遺物出土状況（南より）

2 T 4 鉄鎌出土状況（南より）

図版34. 1 T 4 西壁版築検出状況（東より）

図版35. 1 T 4 東壁版築検出状況（西より）

図版36. 1 T 1 調査前（南東より）

2 T 1 完掘状況①（南東より）

図版37. 1 T 1 完掘状況②（北西より）

図版38. 1 T 2 調査前（北西より）

2 T 2 完掘状況（北西より）

図版39. 1 T 3 調査前①（東より）

2 T 3 調査前②（西より）

図版40. 1 20号墳完掘状況（南より）

2 S D 2 遺物出土状況（西より）

図版41. 1 21号墳床面検出状況（西より）

図版42. 1 T 6 完掘状況①（南より）

2 T 6 完掘状況②（南より）

図版43. 1 T 6 完掘状況③（北より）

図版44. 1 19号墳石室内出土遺物

図版45. 1 T 4 出土遺物

図版46. 1 T 1・T 3・T 6 出土遺物

図版47. 1 T 2・T 3・S D 1・S D 3 出土遺物

表 目 次

4次調査	65
表1.	9号墳出土遺物観察表〔1〕	
表2.	9号墳出土遺物観察表〔2〕	
表3.	9号墳出土遺物観察表〔3〕	
表4.	13号墳出土遺物観察表	
表5.	15号墳出土遺物観察表〔1〕	
表6.	15号墳出土遺物観察表〔2〕	
表7.	15号墳出土遺物観察表〔3〕	
表8.	16号墳出土遺物観察表〔1〕	
表9.	16号墳出土遺物観察表〔2〕	
表10.	17号墳出土遺物観察表	
表11.	18号墳出土遺物観察表	
表12.	S D 1 出土遺物観察表	
表13.	S K 6 出土遺物観察表	
表14.	9号墳出土遺物観察表（弥生土器）〔1〕	
表15.	9号墳出土遺物観察表（弥生土器）〔2〕	
表16.	9号墳出土遺物観察表（弥生土器）〔3〕	
表17.	11号墳出土遺物観察表（弥生土器）	
表18.	13号墳出土遺物観察表（弥生土器）	
表19.	15号墳出土遺物観察表（弥生土器）	
表20.	16号墳出土遺物観察表（弥生土器）	
表21.	17号墳出土遺物観察表（弥生土器）	
表22.	18号墳出土遺物観察表（弥生土器）	
5次調査	120
表23.	19号墳出土遺物観察表	
表24.	T 4 出土遺物観察表	
表25.	T 1 出土遺物観察表	
表26.	T 3 出土遺物観察表	
表27.	T 6 出土遺物観察表	
表28.	T 2 出土遺物観察表（弥生土器）	
表29.	T 3 出土遺物観察表（弥生土器）	
表30.	T 6 出土遺物観察表（弥生土器）	

表31. S D 1 出土遺物観察表（弥生土器）

表32. S D 3 出土遺物観察表（弥生土器）

考 察

表33. 東山古墳群出土初期須恵器の分析値 130

表34. 產地推定の結果 131

表35. 非陶邑系壺の計測値 133

報告書抄録

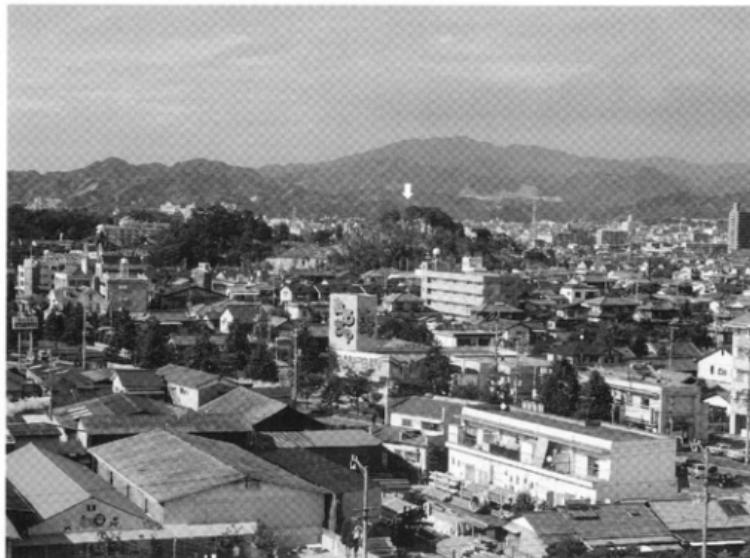
第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経緯

東山古墳群は、松山市教育委員会が昭和40年代に行なった分布調査によって「東山編文・弥生遺物包含地 東山古墳群」として認知され、その後、昭和53年に民間業者による宅地造成等による開発計画に伴い、3度におよび調査が実施されている。その結果によれば、1基の未盜掘古墳を含む8基の石室を検出し、後期古墳の存在が確認されており、またその後の踏査による調査によっても、当古墳群が30基以上からなる群集墳であることが周知されている遺跡である。

平成2・3年度の2度に渡り松山市公園緑地課から文化教育課に対し、松山市東石井町乙39-1他に所在する星ヶ岡公園（通称東山）の整備事業に伴う埋蔵文化財の事前調査の申請が成された。文化教育課では、これを受けて現地踏査を実施したが、公園緑地課との事前協議において、古墳が遺存していると認められる箇所については出来得る限り園路新設計画を部分的に変更し、埋蔵文化財の保護に努める旨の快諾を得ることができた。

園路新設計画は、平成2年度に延長200m、幅5m、同3年度に延長250m、幅2.5mの丘陵地を開発するもので、公園整備事業計画の一環として行なわれるものである。



東山古墳遠景（南より）

2. 調査組織

平成3年10月1日、財団法人松山市生涯学者振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）が発足したことにより、平成2年度は松山市文化教育課が、同3年度は埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。

〔平成2年度調査組織〕

調査主体／松山市教育委員会 教育長 池田 尚郷

参事 古本 克

教育次長 井上 量公

教育次長 一色 正士

調査総括／松山市教育委員会 文化教育課 課長 渡部 忠平

松山市立埋蔵文化財センター 所長 森脇 將

調査係長 西尾 幸則

調査主任 田城 武志

調査主事 栗田 正芳

〔平成3年度調査組織〕

◎（平成3年4月1日～同年9月30日）

調査主体／松山市教育委員会 教育長 池田 尚郷

参事 古本 克（～5月19日）

参事 池田 秀雄（5月20日～）

教育次長 西森 寛彦

教育次長 一色 正士（～5月19日）

教育次長 渡部 泰輔（5月20日～）

教育次長 日野 正寛（5月20日～）

調査総括／松山市教育委員会 文化教育課 課長 渡部 忠平（～5月19日）

課長 岩本 一夫（5月20日～）

松山市立埋蔵文化財センター 所長 和田祐三郎

次長 田所 延行

調査係長 西尾 幸則

調査主任 田城 武志

調査主事 栗田 正芳

◎（平成3年10月1日～同4年3月31日）

調査主体／財団法人松山市生涯学習振興財団

理事長 田中 誠一

事務局長 池田 秀雄

埋蔵文化財センター 所長 和田祐三郎

次長 田所 延行

調査係長 西尾 幸則

調査主任 田城 武志

調査主事 栗田 正芳（文化教育課職員）

〔平成4年度調査組織〕

調査主体／財団法人松山市生涯学習振興財団

理事長 田中 誠一

事務局長 渡辺 和彦

事務次長 鶴井 茂忠

埋蔵文化財センター 所長 和田祐三郎

次長 田所 延行

調査係長 西尾 幸則

調査主任 田城 武志

調査主事 栗田 正芳（文化教育課職員）

〔平成5年度調査・刊行組織〕

刊行主体／財団法人松山市生涯学習振興財団

理事長 田中 誠一

事務局長 渡辺 和彦

事務次長 一色 正士

埋蔵文化財センター 所長 河口 雄三

次長 田所 延行

調査係長 田城 武志

調査主任 栗田 正芳（文化教育課職員）

第II章 東山古墳群の位置と歴史的環境

1. 地理的環境

高龜半島南西隅に位置する松山平野は、愛媛県内最大の面積を持ち、西は瀬戸内海の伊予灘・斎灘に面し、南東部は西日本最高峰石鎚山系、北部は高龜山塊に挟まれた細長い三角州状の沖積低地帯である。平野中央部を東から西へ流れる一級河川石手川とその数多くの支流によって形成された扇状地や氾濫原および三角州性堆植物や海岸部の海浜堆植物で構成されている。

地質学的に言えば、高龜山塊は大部分を中生代の領家花崗岩類の松山型粗粒花崗閃綠岩によって構成される独立丘陵であるが、その南部を東西に走る白亜紀後期和泉層群の含礫粗粒砂岩の卓越層、砂岩がちの砂岩泥岩互層、泥岩がちの砂岩泥岩互層、砂岩泥岩互層がそれぞれ松山平野南東面に突出している。それら4層は、第四紀沖積層の平野部で途切れ、重信川南方2~4kmの地点において姿を現し、上灌方面へ延びている。即ち松山平野は、南部・南東部において砂岩泥岩互層、北部においては松山型粗粒花崗閃綠岩に囲まれたクサビ状台地である。

本遺跡は、小屋峠（海拔500m）に源を発する小野川が、重信川と石手川の形成する三角形の中州のほぼ中央において、南北に蛇行しながら芝ヶ崎山麓に源を発する川附川と合流するあたりに位置している。この東山から小野川を挟んで400m東方に星岡山があり、小野川・川附川を挟んで500m北方には天山、更にはその北東200mの地点には土糞山があり、四つの独立した丘陵が沖積平野の中央に立地している。地質学的には、東西に走る和泉層群の砂岩がちの砂岩泥岩互層が延びる延長線上の沖積低地帯にあり、丘陵北斜面に開発によって露出した和泉砂岩を見ることができる。（「愛媛県地質図」愛媛地学会発行 1980）



第1図 調査地周辺地質図（松山市地学会編著「松山市付近の地質図」より）

G : 礫砂泥（洪積世）

F : 礫砂泥（沖積世）

K : 礫岩・砂岩・頁岩（和泉層群、後期白亜紀）

2. 歴史的環境

松山平野南東部において西流する小野川、その下流S字に蛇行した左岸に低い分離独立丘陵「東山」がある。小野川を挟んだ東側対岸に星岡丘陵、南側対岸には天山丘陵が所在し、この3つの丘陵を古来より「伊予三山」「天山連山」と呼称している。

伊予国で総述された現存する最古の文書資料である『伊予国風土記』逸文には、伊予の温泉の由来、天皇の行幸、齊明天皇御歌などの説話が記され、その中に天山の名の由来についての記述がある。それによれば大和國の天香其山が天から降ってきたとき、途中でふたつに分かれ、そのうちのひとつが伊予国天山になったというものである。

東山をはじめとする三山の丘陵上は、縄文・弥生・古墳時代の遺跡の宝庫であり、松山市内でも有数の遺跡分布地域である。

以下、東山古墳群の周辺に分布する各時代ごとの遺跡について紹介し、当地域に所在する遺跡の性格について考えてみたい。

[1] 旧石器時代

当地域における旧石器時代の遺物は、昭和53年に調査した東山薦ヶ森遺跡から、出土状況は不明であるがサヌカイト製の断面が三角形を呈するナイフ形石器1点を検出したほか、昭和48年調査の笠ノ口遺跡からは後期旧石器時代終末期と推測される赤色チャート製ナイフ形石器と尖頭器各1点、昭和50年調査による天山天王ヶ森遺跡から玻璃質安山岩製のやや長身のナイフ形石器1点を検出しているが、いずれも縄文・弥生時代の遺構・遺物に混在して出土しているため、詳細は判然とはしない。

[2] 縄文時代

縄文時代の遺跡は、現在までのところ後期・晚期に限定されるようであるが、ただ近年の調査で、古期扇状地や河岸段丘上に立地する久米窪川IV遺跡や平井山田池遺跡より前半期と推定される押型文土器などが出土したことは、当地域において数少ないこの時期の資料として貴重なものである。東山丘陵及びその麓周辺からもいくつかの土器などを採取してはいるが、いずれも表採であるため遺構の確認までにはいたっておらず、今後丘陵部や頂上部の調査に期待したい。

[3] 弥生時代

この時期の遺跡は、笠ノ口遺跡、石井東小学校構内遺跡、浮穴遺跡、西石井荒神堂遺跡、東本II・III遺跡、桑原高井遺跡、天山天王ヶ森遺跡、今在家遺跡など、縄文期に比較して多くの遺構を確認している。東山より北北東約1kmの地点にある笠ノ口からは、後期前半か

ら中葉にかけての円形プランを持つ住居跡群、弥生土器の製作、焼成が行われたことを示す遺構が、南南東900mにある石井東小学校からは前期に位置付けられる長方形の土墳墓と大型の壺棺を有する壺棺墓や貝殻及びヘラによる木葉文を施文する土器などがそれぞれ検出された。特に、壺棺墓はそれまでの墓制をかえるものであり、墓制形態を考える上で好資料となるものである。後期の遺構としては、やはり壺棺墓であるが浮穴・西石井荒神堂から出土しており、土師式土器の初頭に比定される終末期のものも確認されている。住居跡としては、東本II・IIIより後期の竪穴住居址を検出しており、中でも直径10mもある大型住居址はT字状の炉跡を持ち特異な形態を呈している。これらのことから、弥生時代全般にわたって生活、生産、祭祀に伴う遺構が検出されており、この周辺における長期にわたる集落の存在が自ずから推測される。

[4] 古 墓 時 代

伊予三山をはじめとする当地域に散在する独立丘陵上には、数多くの古墳が分布しており東山周辺における当時の隆盛ぶりを窺うことができる。

東山古墳群の200m北側に所在する天山古墳群中の天山北神社古墳からは、半円方形帶神獸鏡や鉄劍などを出土し、また天山天王ヶ森遺跡では6世紀中葉から後期に位置づけられる1号墳より銘文が刻まれた三角縁神獸鏡を検出している。昭和50年代に実施した分布調査の結果では、三山の丘陵地上には30数基の古墳の存在が確認されており、今後の調査によって更に増えるものと考えられる。丘陵地周辺の平野部では、弥生時代後期終末から古墳時代初期にかけての壺棺墓を含む土墳墓群を検出した西石井荒神堂遺跡や浮穴遺跡があり、また弥生時代前期の合わせ壺棺墓や円形周溝墓2基を確認した石井東小学校遺跡など、弥生から古墳時代にかけての墓制形態を探るうえで貴重な資料が発見されている。

[5] 古 代・中 世

平安時代中期に成立した分類体漢和辞典「和名類聚抄」によれば、天山周辺は「久米郡」に属していたと記述されている。7世紀後半、久米地区を支配した久米氏と深い係わりを持つ国指定史跡の来住庵寺跡からは、一辺100mを越える方形の回廊状遺構や僧房的建物跡などが確認され、またその周囲からは官街に関する遺構・遺物が多数出土している。特に、「久米評」と縦刻された須恵器片の出土地点より100m東方において、一辺42.8mのはば正方形と推測される柵列によって区画され、内部に数棟の施設を持つ遺構が近年の調査によって確認された。

中世にあっては、忽那文書、三島文書などに現われる南北朝時代の「星岡合戦」記に、東山において合戦のあったことが記されている。それによると、元弘3(1333)年長門周防探題上野前司時直が伊予国における反幕勢力を一掃するため軍勢を率いて上陸、それを迎え撃

つ反幕軍は河野家支族土居・得能・忽那家などであった。時直軍が星岡山に城郭を構えたのに対し、反幕軍は石井郷一帯に布陣して合戦を繰り広げたことを記している。東山についての記述は為されていないが、恐らくは星岡山の西100mに隣接しているため直軍の砦が築かれ、南軍・北軍の戦いの場となったものと思われる。ただ、このことについては考古学的見地から実証されておらず、今後の課題である。

[参考文献]

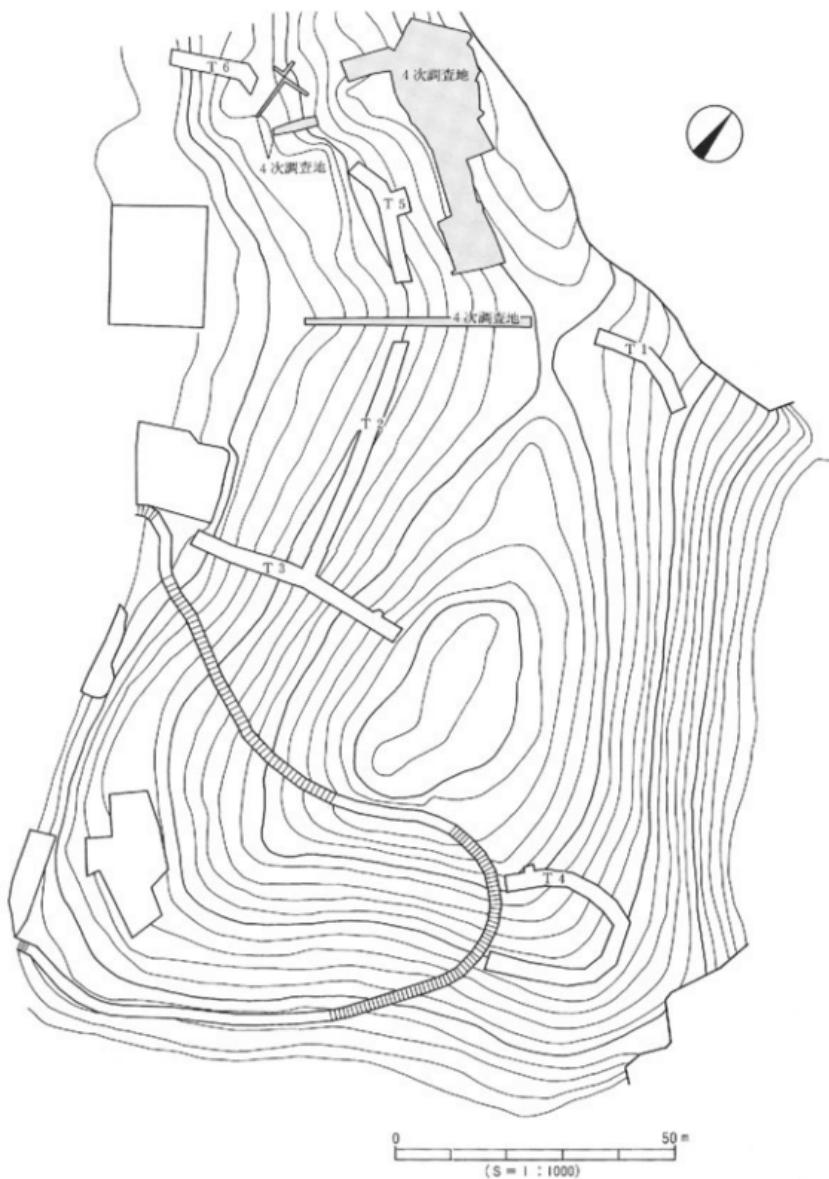
- 森 光晴 1986 「波賀部神社古墳」「二ツ塚古墳」「播磨塚古墳」『愛媛県史 資料編 考古』 愛媛県史編纂委員会
- 阪本安光・小林一郎 1981 「久米窪田Ⅳ・V遺跡」「一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」 愛媛県教育委員会・跡愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 吉本 扱・阪本安光 1981 「来住Ⅴ遺跡 久米窪田Ⅰ・II・III遺跡」「一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」 愛媛県教育委員会・跡愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 長井数秋 1986 「先土器時代 松山平野の遺跡」「愛媛県史 資料編 考古」 愛媛県史編纂委員会
- 西尾幸則 1981 「東山窓が森古墳群」 松山市教育委員会
- 森 光晴 1980 「浮穴・西石井荒神堂・東木II・III・桑原高井遺跡」 松山市教育委員会
- 長井数秋・森 光晴 1973 「天山・櫻谷遺跡発掘報告書」 松山市教育委員会
- 松原弘宣 1992 「熱田津と古代伊予国」 創風社出版
- 角川書店 1981 「角川日本地名大辞典38 愛媛県」 角川日本地名大辞典編纂委員会
- 名古屋市博物館 1992 「名古屋市博物館資料叢書二 和名類聚抄」 名古屋市博物館



第2図 調査地周辺主要遺跡分布図 (S = 1 : 25000)

東山古墳群

—4次調査—



第3図 調査地位置図

第三章 東山古墳群4次調査

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1990(平成2)年7月12日、松山市都市整備部公園緑地課より松山市東石井町乙39番地1他における星が岡公園整備事業にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『118 東山繩文・弥生遺物包含地 東山古墳群』内に所在しており、このことを受けて当該地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認するため、1990(平成2)年6月に文化教育課は踏査による調査を実施した。その結果、石室に使用されたと思われる石材が地表面に数個点在する直径約18mと10mの円墳2基、須恵器片数点を確認した。特に、円墳の前者は石室内部を覗ける状態であったが、この2基の古墳については協議の上、未調査のまま保存することとなった。この結果を受け、文化教育課と松山市都市整備部公園緑地課の二者は、遺跡の取り扱いについての協議を行い、星が岡公園整備事業に伴って失われる遺構について記録保存のため発掘調査を発掘することとなった。発掘調査は、文化教育課の指導のもと、松山市立埋蔵文化財センターが主体となり、公園緑地課の協力のもと1990年12月23日に開始した。

(2) 調査組織

調査地	松山市東石井町乙39番地1他
遺跡名	東山古墳群4次調査
調査期間	屋外調査 1990(平成2)年12月23日~1991年3月31日
調査面積	700m ²
調査委託	松山市都市整備部公園緑地課
調査担当	調査主任 田城 武志
調査員	高尾 和長
調査員補	真木 潔
調査員補	大森 一成
調査作業員	山邊 進也・高市 英治・福田 宏志・相原 忠重・佐古 恒・ 甲斐 尚典・西坂 康司・工藤 晃・山内 通好・仙波ミリ子・ 仙波 千秋・金子 育代・高尾 久子・田頭 まき・白井あさ子・ 猪森しげ子・池内カヨ子・乃万富美子 ほか

2. 調査の記録

[1] 調査の概要

本調査は、公園整備事業の一環として東山古墳群の丘陵地内に園路新設工事の事前調査として実施した。踏査による調査の時点で、埋蔵文化財保護の観点から古墳が遺存している箇所をできる限り避けて新設道路敷設計画を進めることについての協議を公園緑地課を行い、園路幅5m、延長200mの調査区を設定した。

調査は、調査区及び墳丘周辺の樹木の伐採、現況地形測量、調査区周辺の古墳遺存状況、古墳主軸の設定、墳丘トレンチ掘削（第10図）、主体部石室の検出、周溝・祭祀遺構・土壇墓などの検出、写真撮影・実測作業などを順次行った。

伐採作業から表土掘削作業の時点において、9号墳の墳丘と周溝を検出し、切り合い関係にある周辺に遺存する数基の古墳の周溝を確認できた。そこで、9号墳と12号墳・13号墳、15号墳と16号墳・18号墳、16号墳と17号墳、それぞれの築造時期の前後関係を把握するために任意のトレンチを設定し、土層断面を確認した。

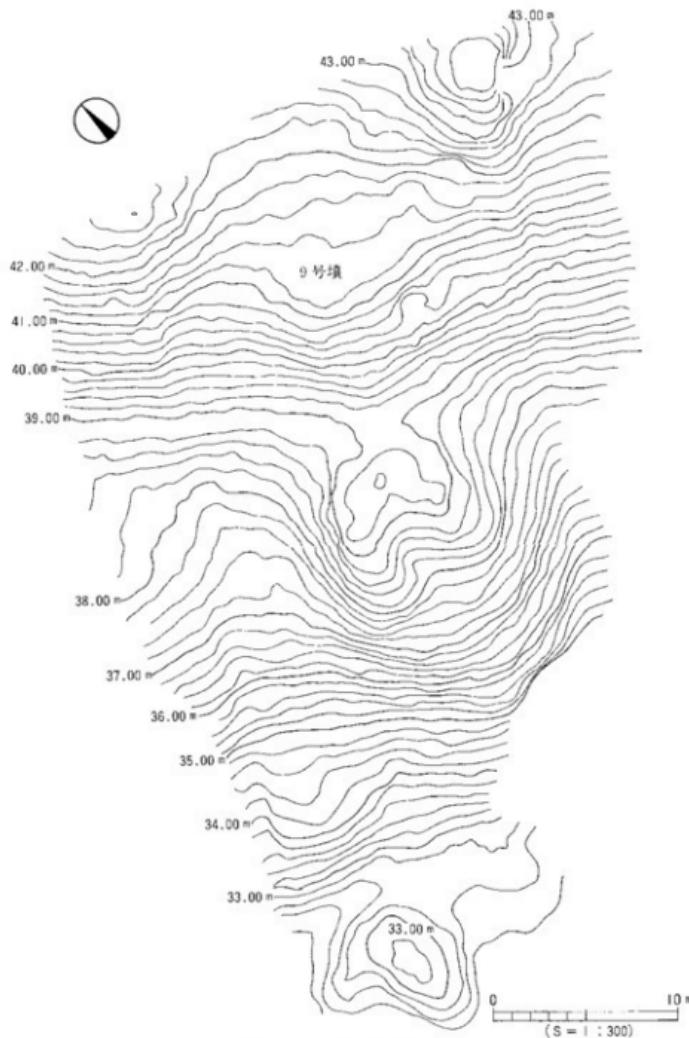
なお、10号墳については踏査による調査によって呼称していたが、トレンチ調査の結果から近現代における人の為的な盛土で遺構・遺物とも確認されなかったため「10号墳」の名称を削除した。

現況地形測量と地山成形面測量においては、墳丘の遺存状況と旧地形の把握を主目的として、調査区全域にわたって20cm毎の等高線を測り、微地形の復元に努めた。また、9号墳における墳丘盛土の堆積状況を観察するためのトレンチは、石室主軸（東西）方向とそれに直交する南北軸を主体部中心で設定し、北東部をN E区、北西部をN W区、南東部をS E区、南西部をS W区とグリッド名を付し、土層断面図を作成した（第4・8図）。

調査区は、櫻、桜、桜の木などの巨木の根幹などによって石室をはじめとする遺構は大きく破壊されていたことを付記しておく。

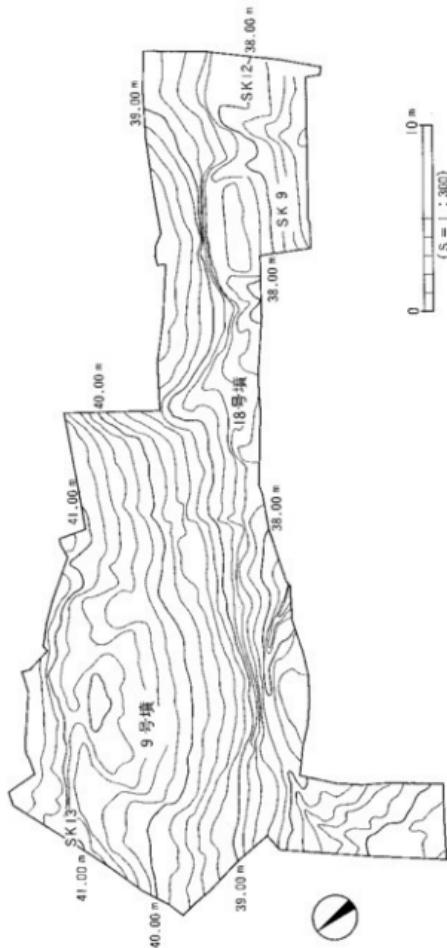


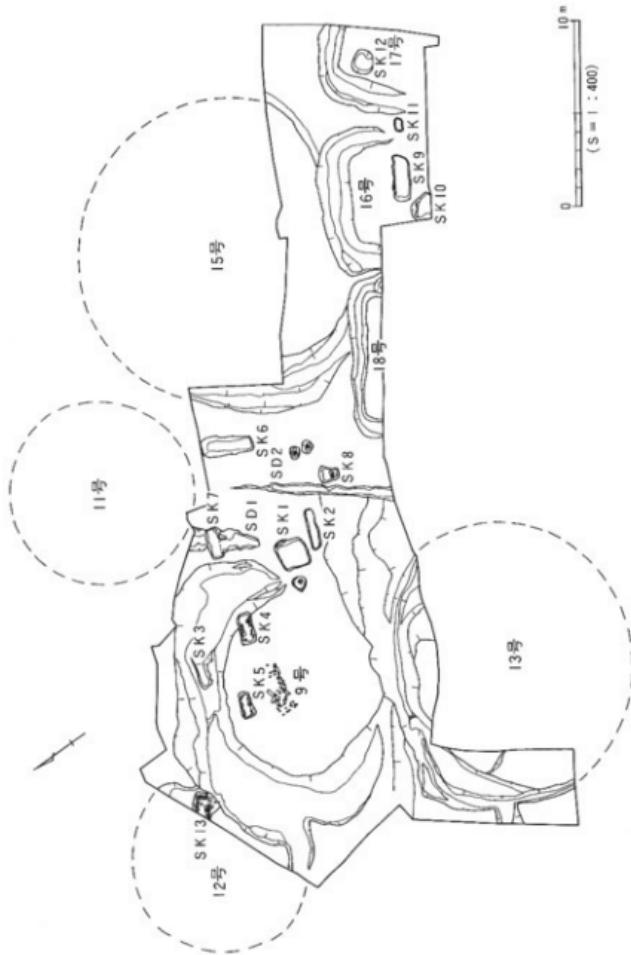
第4図 グリッド設定図



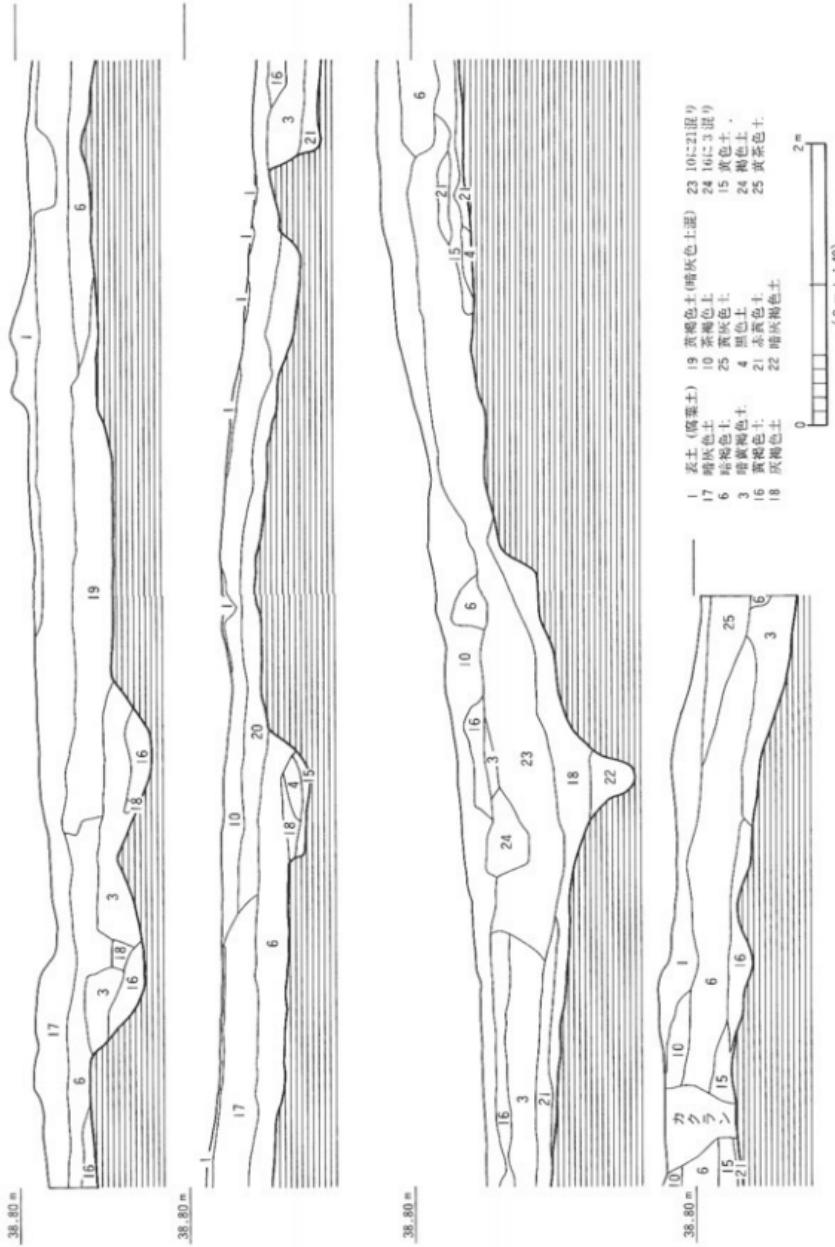
第5図 調査前地形実測図

第6图 桶盖后填丘实测图





第7图 4次调查测出遗物全图



第8圖 蘭臺區瘠性土層斷面圖

[2] 9号墳

1) 墳丘 (第5・6図)

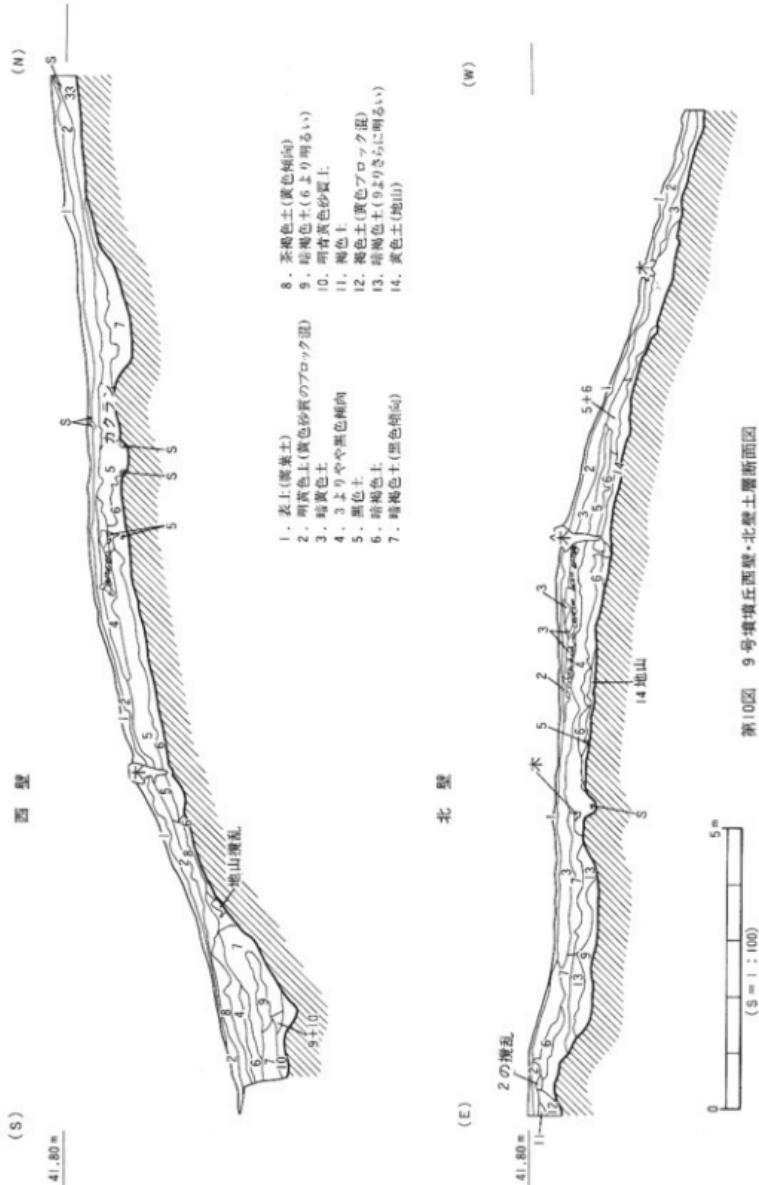
9号墳は、東山古墳群のほぼ中央に位置し、周囲を11・12・13号墳に囲まれた標高41.6mを測る丘陵部の緩傾斜面上に立地する。トレンチ調査で検出された主体部の集石は、ほとんどがその床面付近の部分であり、遺存状況は極めて悪く、かなりの規模で削平が行われていた。従って、墳丘盛土は失われ、地山面も激しくカットされ、地山整形の痕跡を確認することはできなかったが、ただ墳形を整えるための盛土が行われたことが、部分的にはあるが版築を遺存していることから推測された。墳丘の平面形は、南側が削平を受けているため不明瞭だが、円形を呈し、直径は約10~12mを測るものと思われる。

2) 石室 (第11図)

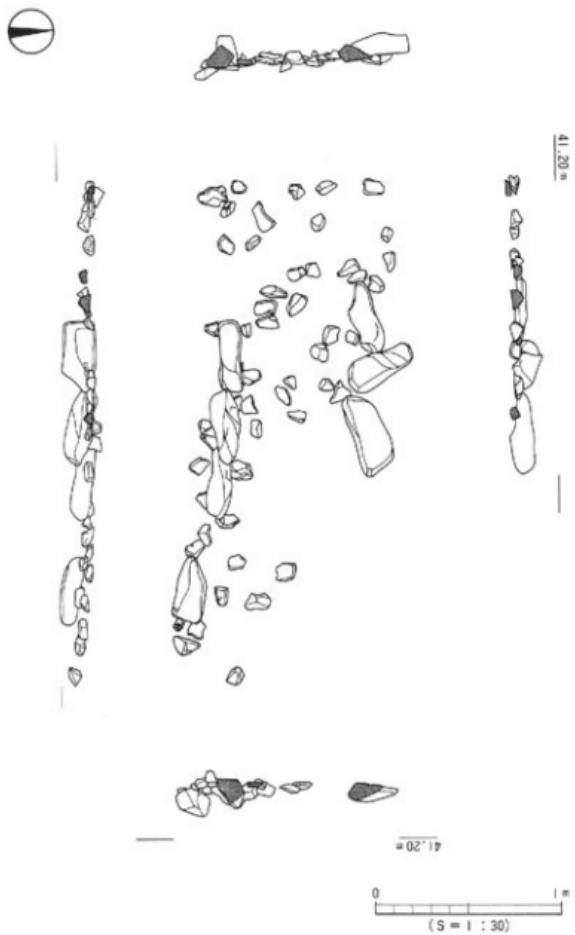
本墳の埋葬施設は、ほぼ全壙の状態で検出された。10~40cm大の河原石が東西3m、南北



第9図 9号墳全測図



第10図 9号塙堆丘西壁・北壁土壌断面図



第II図 9号墳石室平面及び断面図

1.5mの範囲に散乱し、原形をとどめておらず、僅かに腰石と思われる3個の石だけが原位置を保っていると推測できた。その40cm×10cm×15cm大の3個の石材が、原位置を保っていると仮定するならば、埋葬施設の主軸はN77°30'Wをとっていたと考えられる。石室は、旧地形の岩盤を削平して構築する周辺石室の方法とは異なり、弥生土器を包含する第V層黒色土上面に立地している。

その他、玄室の規模をはじめとする、羨道部、閉塞状況、墓道などの施設については、削平のために検出されなかった。

遺物については、主体部からは全く出土していない。

3) 周溝（第9図）

周溝は、北西部において12号墳の周溝と、南西部においては13号墳の周溝と交錯し、その関係は12号墳を9号墳が、9号墳を13号墳がそれぞれ切っている。遺存状況は、あまり良好でなく北側半分が馬蹄型に残るだけで、南側は他の遺構によって削平され判然としない。規模は、西部と北部で幅2m、深さ30~50cm、東部で幅2.5m、深さ50cmであった。主に黒色土、暗褐色土を覆土としている。北部周溝内からは、弥生土器片や埴丘祭祀に供された須恵器片が多数二次堆積で出土している。

4) 出土遺物（第12~18図）

出土状況　開発行為などによって削平を受けているために石室内部からの遺物はなく、すべて周溝内からの出土遺物である。周溝内からは、刀子1個体分、須恵器壺身片2片、壺蓋片2片、高壺片26片、壺片5片、大型短頭壺片2片、その他脚付き壺、环、横瓶、甕片などを出土している。また、弥生土器も多く、甕、鉢、高壺、支脚なども検出されている。周溝北西部出土の須恵器については、12号墳に関連すると思われるものも認められるが、主体部が未調査であるため明確な把握はできなかった。遺物は、いずれも原位置を留めておらず、盗掘などにより二次的に堆積したものと考えられる。

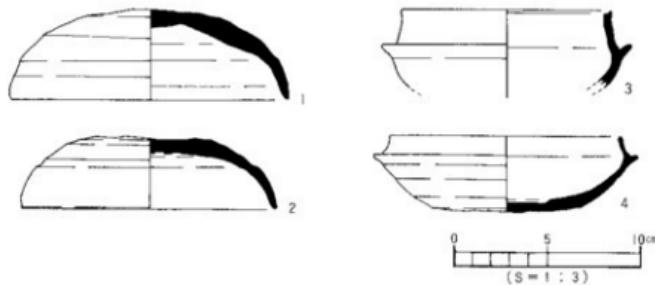
周溝内出土遺物

須恵器

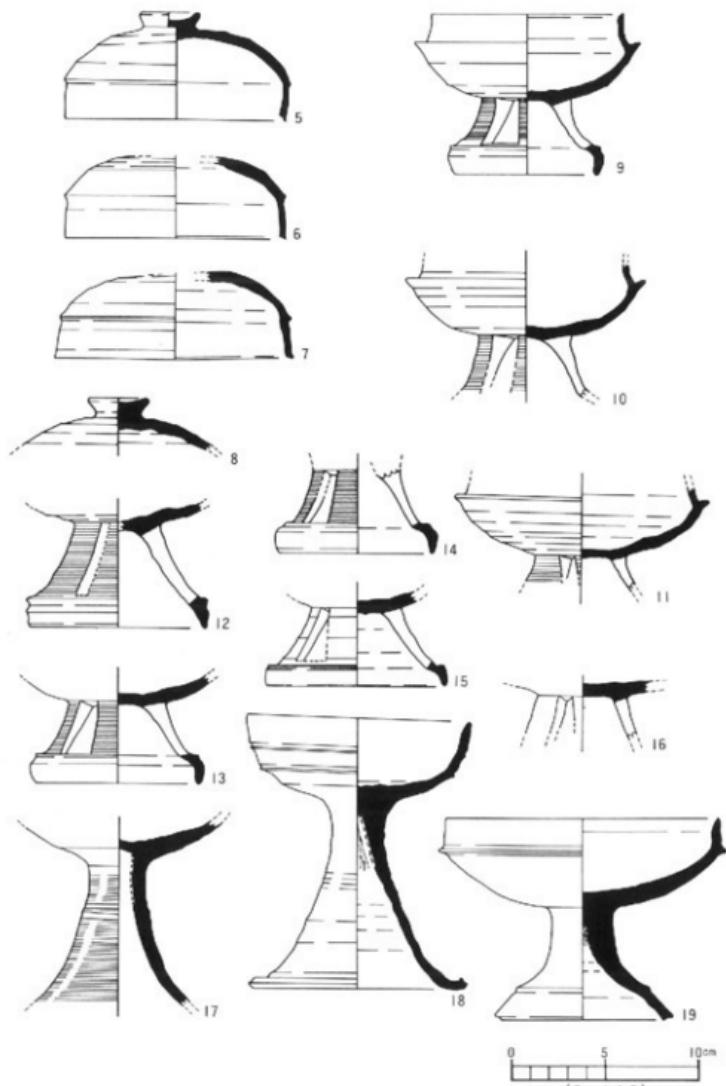
蓋坏（第12図—1～4） 1、2は坏蓋である。1は口径14.8cm、器高4.8cm、2は口径13.6cm、器高3.7cm両者ともに口端部を一部欠失しているがほぼ完形品である。1の大井部は丸く回転ヘラ削りが1/2施されている。他の部位は内外面ともに回転ナデ調整で口端部は尖り気味に丸く仕上げられている。2の天井部は回転ヘラ切りが行なわれ、未調整のために扁平である。口端部は丸味を持ち、外面にかすかに段を持つ。内外面の調整はナデで輪轆回転は1か時計回りで、2は逆時計回りである。3、4、は坏身4は口縁端部を一部欠失している。3は口縁から受部に掛けての小片である。3のたちあがりは内傾した後直立し、たちあがり高は2.0cmと高いたちあがりである。端部は、尖り気味で内傾する端面に中凹の面を持ち、受部はやや外上方に伸びる受部基部に沈線が巡る。4は扁平な平底風の底部で回転ヘラ削りを1/3に施す。受部は短く水平に伸び、端部は丸味を持ち、たちあがりは内傾し端部は、尖り気味に丸く仕上げられている。

高坏（第13図 5～19）

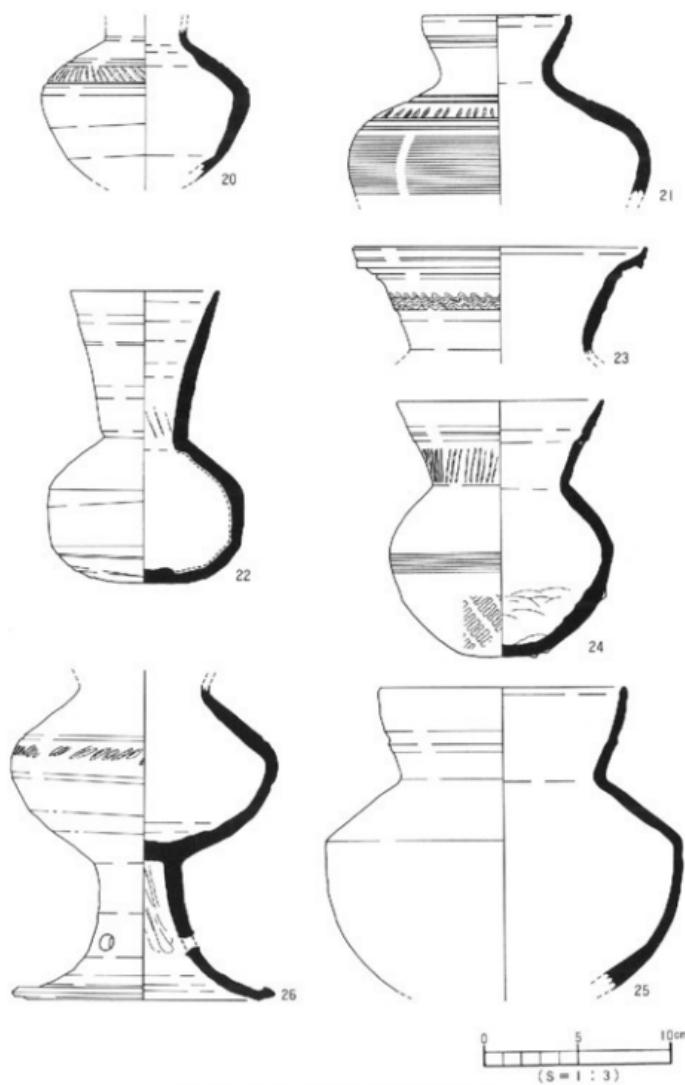
有蓋高环の蓋（5～8） 5は口径11.6cm、器高5.6cmの完形品である。大井部は丸味を持ち、中凹の摘みが中心よりずれた位置に付いている。天井部と口縁部を分ける境に断面三角形の稜をもち、口縁端部は中凹の面を有する。内外面の調整は天井部1/2に回転ヘラ削り、その他の部位は回転ナデ調整である。6は1/3片である。天井部と口縁を分ける稜は5に比べやや鈍く口端部は内傾する中凹の面を有す。天井部に摘み部の剥離面が一部見られる。7は摘み部を欠失している。天井部1/2に回転ヘラ削り、その他の部位は回転ナデ調整である。6と同



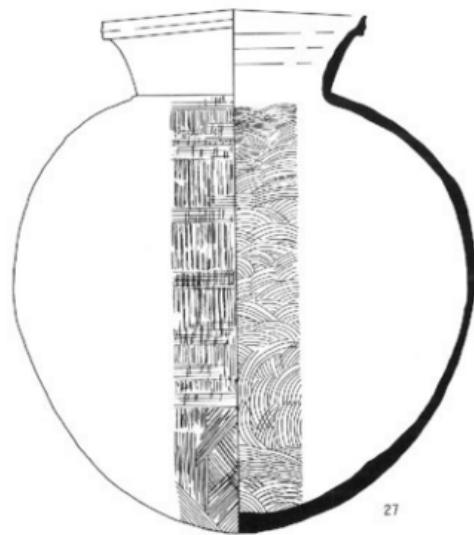
第12図 9号墳周溝内出土遺物実測図(1)



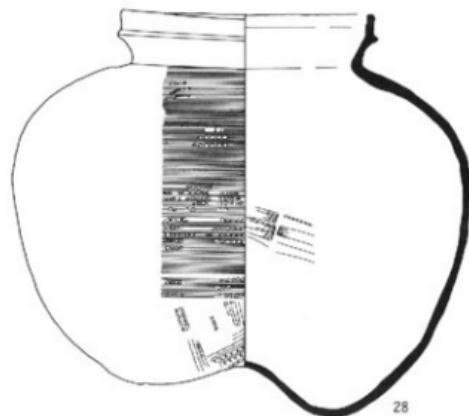
第13図 9号填周溝内出土遺物実測図(2)



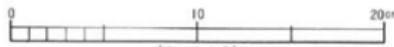
第14图 9号填土内出土遗物实测图(3)



27



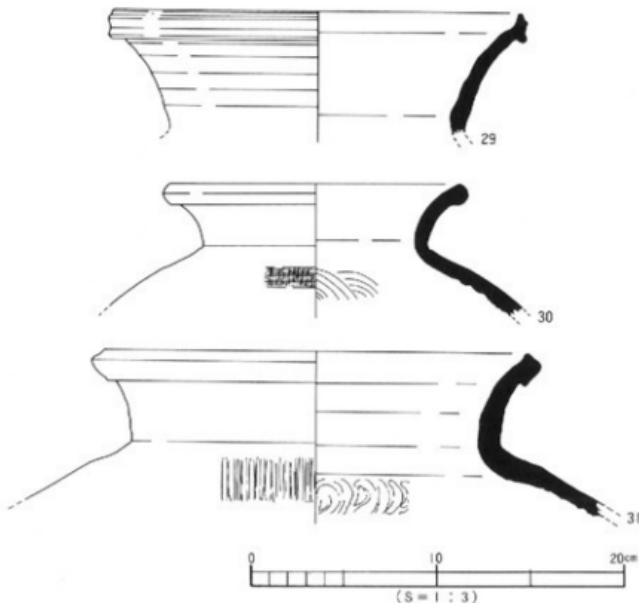
28



第15図 9号填周溝内出土遺物実測図(4)

様に天井部と口縁部とを分ける稜は鈍く、口縁部も内傾する中凹の面を有する。8は摘み部天井部を残す小片。摘み部は浅く凹み天井部は回転ヘラ削り、摘み部と内面は回転ナデ調整である。

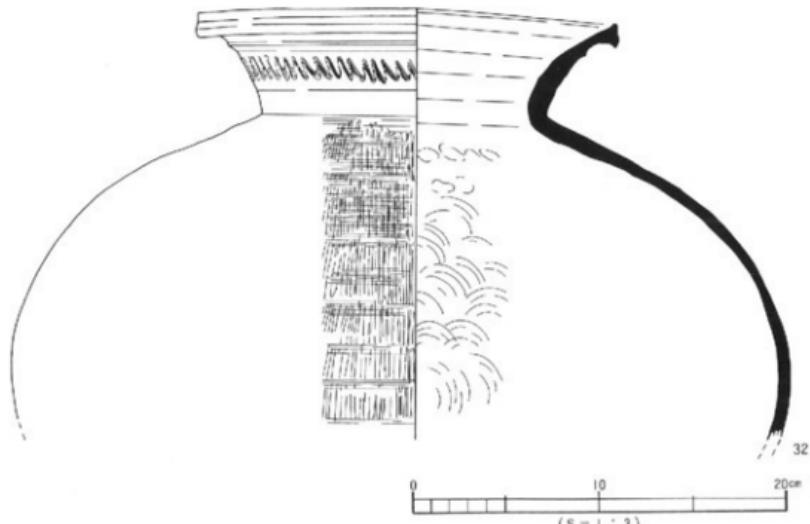
高坏(9~19) 9は口径10.2cm、器高8.5cmの小型の有蓋高坏である。たちあがりは内傾した後直立し、尖り気味に内傾する段を有し、端面は中凹の面を持つ。受部はやや外上方に伸び、端部は尖り気味である。脚部はハの字形に外反し端部付近で段をなし、極部は内傾する。脚体部に台形状の透かし窓が三方向に見られる。10、11は受部から脚部にかけての残存である。10は短く内傾するたちあがりと受部を持ち、ハの字形に外反する脚部に台形状に切り取られた透かし窓が三方向に見られる。11は9、10より大きめの口径を呈し、受部は短く水平に伸び端部は丸く、脚部に三方向の透かし窓が有り坏底部1/3に回転ヘラ削り、脚部外面に回転カキ目、その他はナデ調整である。



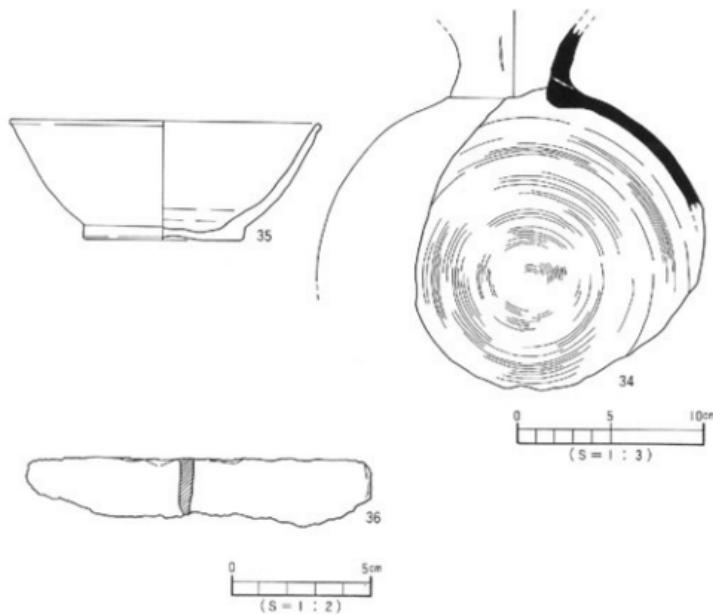
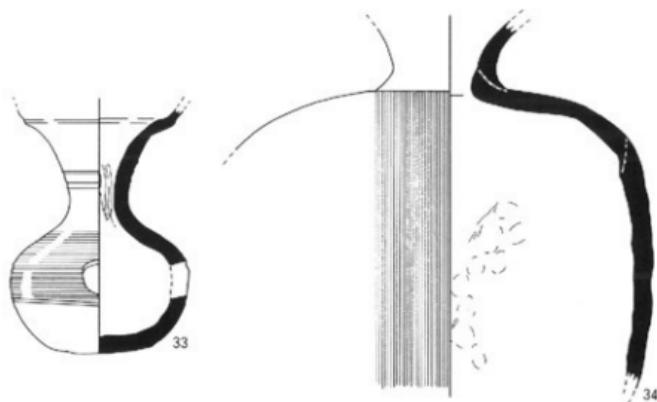
第16図 9号墳周溝内出土遺物実測図(5)

12～16は脚部片である八の字形に外反し、端部付近で段をなし裾部は内傾する。それぞれに台形状の透かし窓が3方向に見られ、13～15は回転カキ目、15、16は回転ナデ調整が施されている。17は环底部から脚部にかけての残存である。長い脚の中位に2条の凹線、脚外面と环底部に回転カキ目、环、脚の内面は回転ナデ調整である。18は細い基部より緩やかに内済し、直立気味に立ち上がる环部、緩やかに外反する脚部の、それぞれの中位に凹線を2条施し調整は外面ともに回転ナデ、环部に焼け重みを生じている。19は口径14.6cm、底径8.6cm、器高10.6cmを測る。环部は口縁部手前に1条の凸帶状を巡らし、口縁端部は直立し尖り気味に丸い、环部底部にわずかにタタキ痕を看取する脚部は八字状に開き、裾部手前で段をなし端面に凹面を有する。

壺（第14図—20・21） 20は口縁部と底部を欠失している。直立気味に立ち上がる頸部より、胴部中位や上方で肩を張り最大径を割り底部につづく、肩部に1条の凹線その上方に右上がりの櫛齒状工具による刺突列点文、上部に2条の凹線が巡らされている。底部から肩部にかけて回転ヘラ削りが見られ、内面はナデ調整である。21、口径7.8cm胴部最大径15.9cmで口縁部から胴部にかけての残存である。口縁部は内済気味に開きながらたちあがり、中位に2条の凹線が巡り、大きく広がる肩部と頸部下にも2条づつの凹線が巡る。凹線間に幅広の櫛齒状工具による縱方向の刺突列点文が施され、肩部下には回転カキ目が見られ、口縁内面と外面の一部に薄く自然釉が掛かる。



第17図 9号墳周溝内出土遺物実測図(6)



第18図 9号墳周溝内出土遺物実測図(7)

長頸壺（第14図—22） 口径7.8cm、口径部長7.8cm、胴部最大径10.3cm、器高15.5cmを測る完形品である。口縁部は外上方に直線的に開き口端部は尖り気味に丸い、体部は頭部よりハの字形に開き、肩部より直線的に下がり内湾しながら半たい底部につづく、底部に回転ヘラ削りが頸著に見られ、他の部位は内外面ともに回転ナデ調整が施されている。

広口壺（第14図—23～25） 23、直線的に外上方に伸びながら口縁部手前で外反する。口端部は短く立ち上げ丸く仕上げている。口頭部中位に凹線その上部に波状文、肩曲部と口縁部外面に凹線が施されている。24、球形の体部より外上方に直線的にたちあがり口径10.9cmと体部とほぼ同等の口縁部を持ち、口縁中位の外面に段をなし、外面は2条の凹線、凹線下に幅広のヘラ状工具による右上がりの刺突列点文を施す。底部外面に格子目叩き、内面に工具痕口縁部から底部にかけて自然釉が見られる。25、口径12.8cm、胴部最大径18.8cm、残高16.1cmで底部を欠失している。胴部中位上方で肩を張り直線的に下り、緩やかな曲線をとる体部より、内湾気味に外上方に開く口縁部は丸くおさめられ、口縁中位にナデによるつまみ出しの凸線を1条施されている。

脚付壺（第14図—26） 26は口頭部を欠失している。半球形の体部より鈍く屈曲する肩部に橢円状工具による右上がりの刺突列点文、列点文上下に凹線を施す。脚部は直立気味の柱部と大きくラッパ状に開く裾部からなる。柱部中位下に3方向の円孔を穿ち、裾部端部手前で段をなす。

大形短頸壺（第15図—27、28） 27は口径18.7cm、胴部最大径32.9cm、器高37.0cm、を測る。球形の体部よりハの字形に外上方に開き、口縁部に2条の凹線が巡り、内面で緩やかな段をなし口端部は尖り気味丸い、外面胴部に縱方向の平行叩きが見られ、叩きの上に部分的に弱いカキ目が施され、底部には不定方向の平行叩き、内面胴部には同心円文が見られる。口縁部と胴部に重みを生じている。28は口径17.9cm、胴部最大径32.5cm、器高28.8cm、を測る。外反して直立気味に立ち上がる短い口縁部中位に有段を持ち、口端部は水平な面を持つ角の取れた作りである。外面に格子叩きを施し、基部より胴下部にかけてカキ目調整により格子叩きをカキ消している。内面は施文がなくナデ仕上げであり一部にハケ目が見られる。口縁部は内外面ともにヨコナデによる調整が施されている。

甕（第16・17図—29～32） 29は口径21.6cm、の口頭部片である。外反しながら開く頭部、口端部は上下に肥厚させ丸くおさめられ、口縁外面に肥厚による凸面が見られる。内外面ともにヨコナデ調整である。30、八字状に広がる体部より、短く外反する口頭部は丸く下方に肥厚されている。体部外面に平行叩きから回転カキ目調整を施し、内面には同心円文が見られる。焼成不良で明灰色を呈し口縁部は焼け歪みを生じる。31はハの字形に開く体部より直

立氣味に外反する口頸部に、断面三角形の突堤状を卷いている。体部の叩きは頭部基部のやや下まで行なわれ、内面は同心円文の上をナデによって調整されている。32は口縁部から胴部にかけての大型窓である。外反しながら開く口縁部中位に波状文、頭部基部下から体部全体に平行叩き、その上にカキ目を施す。内面頭部下は指頭圧痕とヨコナデ、それより下部は同心円文を消すナデが行なわれている。

龍（第18図-33） 口端部を欠失しているがほぼ完形品である。外反する口縁部は段をなし頭部中位に2条の凹線、胴部中位上下に一条ずつの凹線、頭部下より胴部中位にかけてカキ目が見られる。

横瓶（第18図-34） 頭部から体部にかけての残存である。外反する口頸部の基部よりやや水平に伸び、緩やかな曲線を描く俵型の形態を呈する。外面の口頸部にナデ、体部にカキ目調整、内面にナデ調整と接合時の指頭圧痕が見られる。

土師器

坏（第18図-35） 口径16.1cm、底径8.4cm、器高6.3cmを測る。台付の底部よりやや内湾しながらたちあがり、口端部手前で強いナデが行なわれ、外方向に開くように見える端部は丸く仕上げられている。内外面の調整はヨコナデ、底部にヘラ切りが行なわれている。

鉄製品

刀子（第18図-36） 36は錫化が著しく残存長12.2cm、幅2.4cm、厚さ0.7cmを測る

〔3〕13号墳

1) 墳丘（第6図）

13号墳は、東山占墳群のはば中央に位置し、現地表面の墳丘頂上部で標高39.8mを測る丘陵部の緩傾斜面上に立地する。墳丘は、9号墳の南南西に隣接し、9号墳墳丘の南端を13号墳の周溝が削平している。主体部は調査区域外にあるため確認できず、墳丘の北部と西部の裾部を部分的に検出するにとどまった。南面・西面に残された土層断面によれば、本墳も9号墳と同様に遺存状況は悪く、根幹・開渠行為などの痕跡を見ることができる。墳丘盛土は確認されず、地山面も検出された部分だけでは明確な判断はできなかった。9号墳で確認された主体部直下の弥生時代の包含層である黒色土は、本墳にあっては墳丘中腹部においてカットされ、主体部墓壙構築によって切り込まれていることが推測できる。墳丘の平面形は、部分的な調査のため不明瞭だが、円形を呈しているものと思われる、直徑は約12~14mを測るものと考えられる。

2) 周溝（第7図）

周溝は、墳丘の北部と西部において検出した。北部において、9号墳の墳丘裾部を切り込み、幅2m、深さ50~70cmの規模を持つすり鉢状の溝である。主に黒色土、暗褐色土を覆土としている。北部の周溝内からは、墳丘祭祀に供されたと思われる須恵器高环、坏身、長頭轆などが二次的な堆積状態で出土している。

3) 出土遺物（第19図）

出土状況　主体部が、調査区外にあるため周溝内から出土した遺物に限られる。周溝内からは、須恵器坏身3片、高环2片、壺片3片などを出土している。ただ、位置的に9号墳の裾部に当たるため、流れ込みの可能性も指摘されるが、13号墳主体部を調査解明できない以上、その詳細は不明とせざるを得ない。

周溝内出土遺物

須恵器

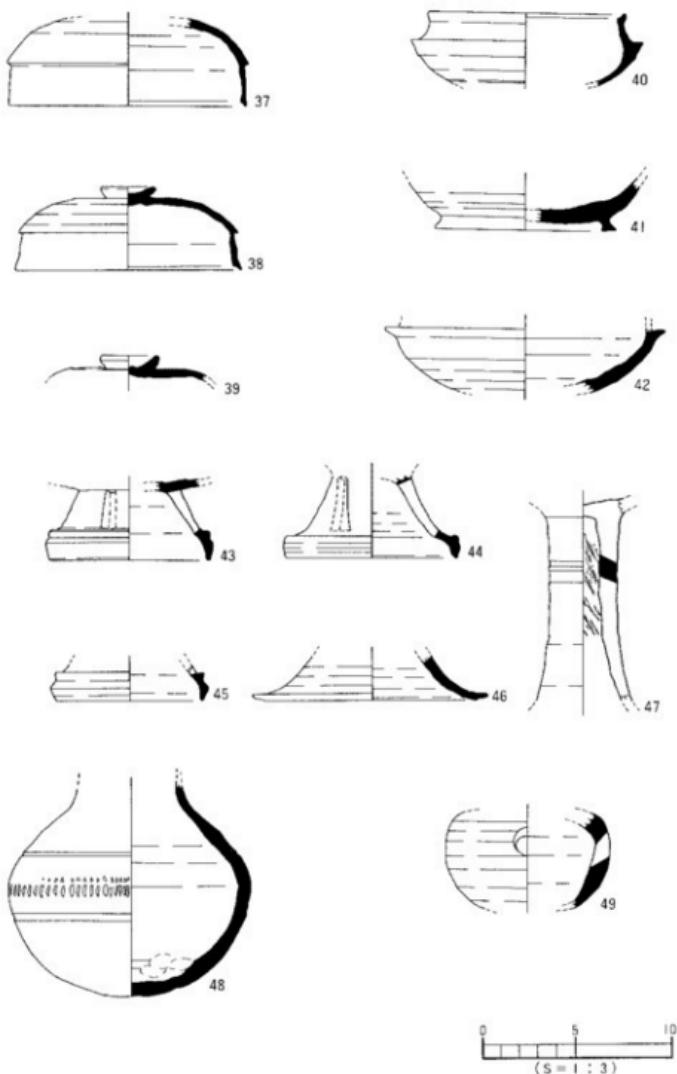
蓋（第19図-37~39） 37は口縁部から天井部にかけての小片である。天井部と口縁部を分ける稜は断面三角形でやや鈍く、口縁部は直下に下がり、端部内面は内傾する段をなし凹面を有する。38は中窪みの摘みをもち断面三角形状の稜は鋭く、口縁部は外反し端部は凹面を有する。39はつまみ部と天井部の小片で、摘み部は中窪みである。

坏身（第19図-40、41） 40は水平に伸びる受部よりやや内傾し、端部手前で段をなし端部は尖り気味に丸く、内面は内傾する凹面を有する。41は八の字状に短く開き、水平に接地する高台をもつ坏身片である。

高环（第19図-42~47） 42、短く水平に伸びる受部端部は丸く、たち上がりは消失している。環底部にヘラ削りその他にナデ調整が施され、底部に透かし窓を切り取るとときに生じたと思われるハの字状の線が見られる。43~45は脚部片である。ハの字形に外反し脚端部付近で段をなし、裾部は甘く内傾する。端部は丸くおさめられ、透かし窓が三方向に付くと思われる。46、大きく広がる裾端部内面に凹面が見られる。47は脚部中位上方に2本の凹線が見られ、その上下に透かし窓が2方向に見られる。

壺（第19図-48） 球形な体部中位で最大径(12.6cm)を測る所に櫛歯状工具による縱方向の刺突列点文を施し、やや間隔をおく上下に一条づつの凹線が見られる。

延（第19図-49） 刷部片である。底部より胴部中位にかけてヘラ削り、その他の内外面



第19図 13号墳周溝内出土遺物実測図

はナデ調整が施され、色調は焼成が甘く乳白色を呈している。

[4] 15号墳

1) 墳丘(第6図)

15号墳は、東山古墳群の中央よりやや東部に位置し、現地表面の墳丘頂上部で標高42.2mを測る丘陵部の緩傾斜面上に立地する。墳丘は、9号墳の東8mに位置し、16号墳と18号墳の廣溝と交錯している。主体部は調査区城外にあるため確認できず、墳丘の南部の裾部を部分的に検出するにとどまった。北面に残された土層断面によれば、本墳も9号墳と同様に遺存状況はあまり良くなく、根幹、開墾行為などの痕跡を見ることができる。墳丘盛土は確認されず、地山成形も検出された部分だけでは明確に判断はできなかった。墳丘の平面形は、部分的な調査のため不明瞭だが、円形を呈しているものと思われ、直径は約12~14mを測るものと考えられる。

2) 周溝(第7図)

周溝は、墳丘の南部において検出した。南部において、16・18号墳の周溝によって墳丘裾部をカットされており、幅3m、深さ20~30cmの規模を持つすり鉢状の溝である。主に暗褐色土を覆土としている。周溝内からは、弥生土器の複合口縁、高坏、甕や須恵器では高坏、环身、环蓋、長頸瓶など多数が二次堆積で出土している。

3) 出土遺物(第20~23図)

出土状況 主体部が、調査区外にあるため周溝内から出土した遺物に限られる。

周溝内からは、弥生土器の複合口縁2片、高坏7片、楕3片、壺片10数片や須恵器では环身3片、高坏12片、环蓋2片、壺片8片などを出土している。緩傾斜地の上部にある主体部ないしはその周辺部の祭祀遺構からの流れ込みと考えられるが、他の古墳に比較して出土遺物の多いことが注目される。ただ、15号墳にあっても、主体部が調査解明できない以上、その詳細は不明とせざるを得ない。

周溝内出土遺物

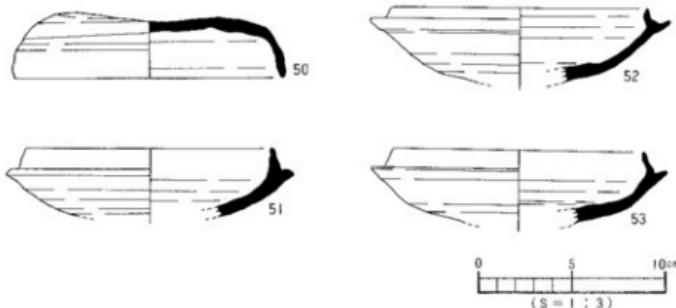
須恵器

环蓋(第20図-50~53) 50は口径14、2cm、器高3.5cm、の环蓋である。天井部は焼け歪み生じたと思われる歪んでいた。口縁部は丸い。天井部内面に不定方向のナデが見られる。51~

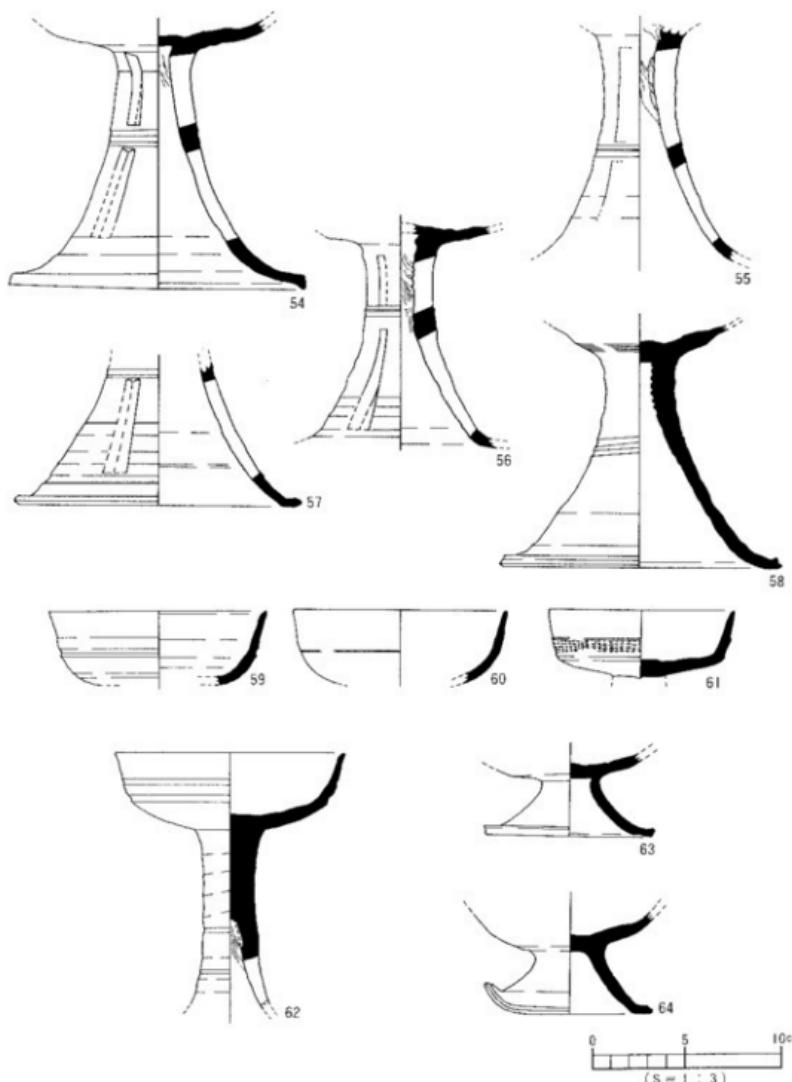
53は壺身片である。51は水平に伸びる受部は丸く、たちあがりも直立気味で端部は丸い。52の受部は外上方に伸び、たちあがりは内傾し直立気味に冠かく、端部は尖り気味に丸い。54はやや外上方に伸びる短かい受部に内傾するたちあがりをもつ。

高环（第21図—54～64） 54は大きくラッパ状に開く脚部である。脚部手前の内面に内傾する面を持つ、柱部に長方形の透かし窓が2段に2方向に切り取られ、透かし窓上下間に2条の凹線が巡る。55、56は脚部で端部を欠失している。ともに3方向の透かし窓を2段に切り取られ、54と同様に透かし窓上下間に凹線が2条巡っている。内外面ともに回転ナデ調整、しばり痕が見られる。57、八の字状に開く脚部と水平に伸びる脚部は、丸くおさめられ薄い凹線が巡る、透かし窓が3方向、上部に凹線が施される。58、壺部を欠失している。大きく開く脚部は凹面を有し、脚部中位や上方に2条の凹線を巡らしている。59、60、61、は無蓋高环の壺部である。59は、壺中位に段をなし凹線が巡る。60も壺中位に凹線が見られ口縁部は焼け歪んでいる。61は壺中位に櫛歯状工具による刺突列点文を施し、その上下に段が見られる。脚部に透かし窓があったと思われ、壺底部に3方向の切り取り痕が見られる。62は無蓋高环の口縁部から脚部にかけての残存である。緩やかに外傾して口端部手前でわずかに外反する、端部は尖り気味に丸い、柱部に一条づつの凹線が2ヵ所に巡る。63、64短い高环の脚部。63は八の字状に広がり脚端部は内傾する面を持つ。64はハの字状に開き端部手前で水平に折り曲げ、端面に凹線をめぐらす。端部が歪んでいる。

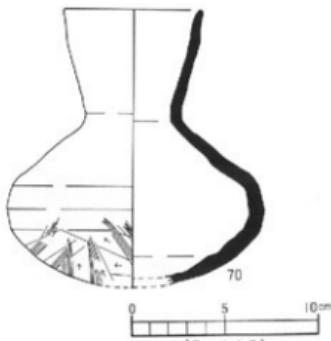
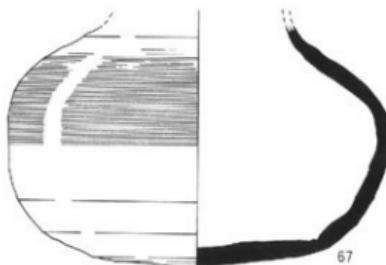
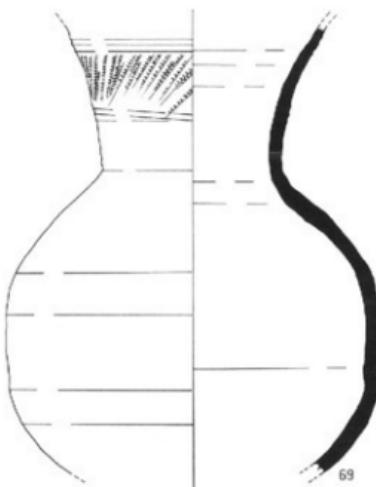
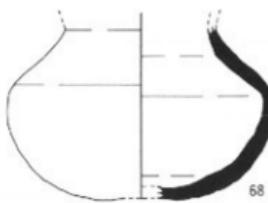
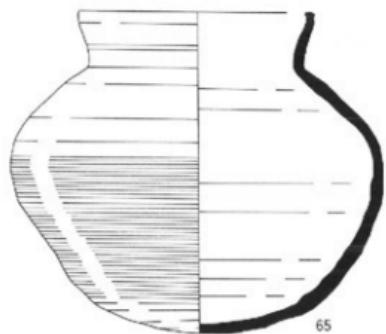
短頸壺（第22図—65～68） 65は脚部を欠失している。口縁部は緩やかに外傾して、口端部手前で内傾し端部に凹面が見られ、頸部中位に凹線が1条巡る。底部から胴部の外面にカキ目、その他の部位にはナデ調整が施されている。66は球形の体部より外反する口縁部は、肥厚され逆「く」の字状の断面を呈し、底部より胴部にかけての外面にヘラ削りが施されてい



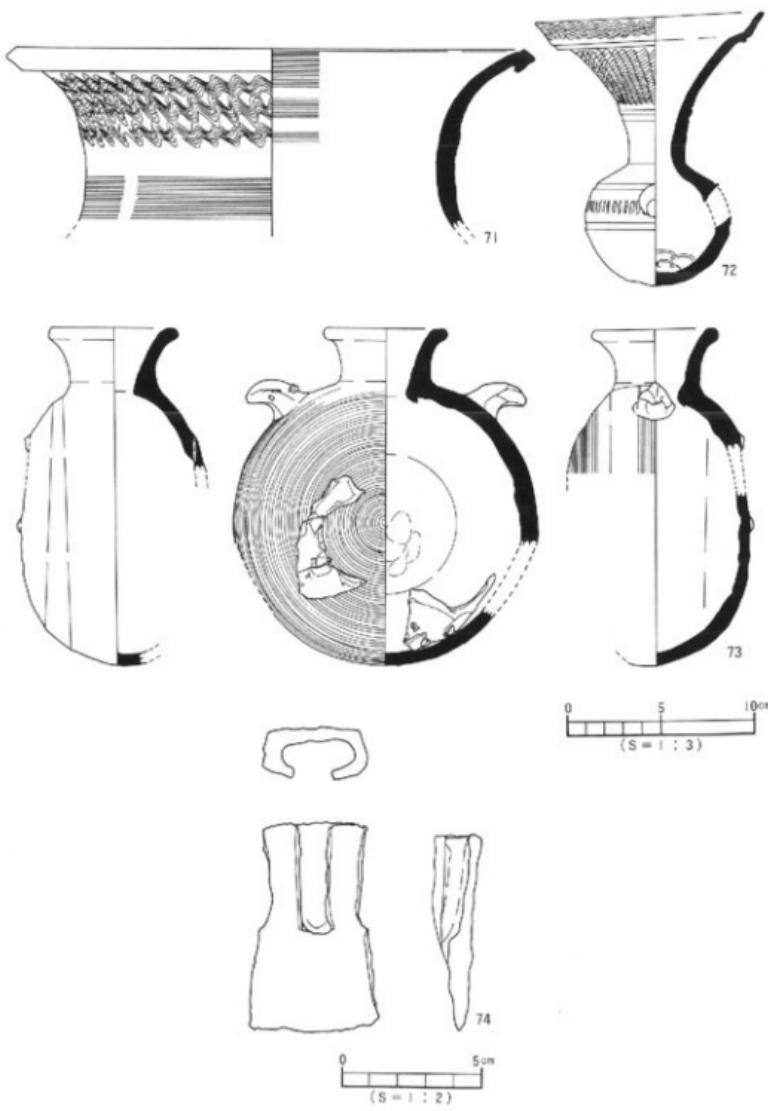
第20図 15号墳周溝内出土遺物実測図(1)



第21図 15号墳周溝内出土遺物実測図(2)



第22図 15号墳周溝内出土遺物実測図(3)



第23图 15号墳周溝内出土遺物実測図〔4〕

る。67は胴部最大径20.3cmを測る。底部は平底ふうヘラ削り、胴部にカキ目調整が施され口縁部は欠失している。68、半球形の体部より八字状に頸部につづく、底部はヘラ削りその他は内外面ともにカキメ調整である。

広口壺（第22図-69） 69は頸部径9.5cm、胴部最大径19.8cmを測る。底部、口縁端部を欠失している。胴長の体部より外上方に外反しながら聞く口縁部に、2条づつの凹線が2ヵ所にめぐらされ、凹線間に幅広の櫛歯状工具による右上がりの刺突列点文を施す。

長頸壺（第22図-70） 口径7.3cm、頸部径5.0cm、胴部最大径13.4cmを測る長頸壺である。頸部より外上方に伸び、口縁部手前でやや直立気味にたちあがり、口端部は丸く仕上げている。底部より胴部中位にかけてヘラ削り、その他はナデ調整が施されている。口縁部から胴部にかけて自然釉の付着が見られる。

甕（第23図-71） 71は口径26.6cmを測る口縁部片である。やや内傾したのちに大きく外反する口端部は、下方に肥厚させ上下に面をもつ、外面中位やや下に浅い凹線が2条巡り凹線上部に櫛引き波状文を3条施し、凹線下部にカキメが見られる。内面はナデによる調整である。

甕（第23図-72） 口径12.0cm、頸部径2.9cm、胴部最大径7.7cm、器高14.5cmを測り口縁端部を一部欠失しているがほぼ完形である。テニスボール程の体部と、よくしまった細い頸部より大きくラッパ状に聞く口縁部をもち、口縁部手前で段をなす。頸部中位に浅い2条の凹線、口縁手前で段をなし、その上部に一条の深い凹線を巡らす。頸部中位の凹線上部より口縁部にかけて細かい櫛引き波状文を施し、口端部は尖り気味に丸い。体部中位やや上部に櫛歯状工具による縱方向の刺突列点文その上下に一条づつの凹線を施す。底部より胴部中位にかけてヘラ削りが見られ、底部内面には円形の工具痕が見られる。

提瓶（第23図-73） 73は口径6.6cm、頸部径4.5cm、胴部最大径15.9cm、器高17.8cmを測る。頸部より外上方に短く伸び端部は、水平に肥厚され丸く治められている。鍵状の把手が付き外面にカキメ、窓内での他の遺物との付着が見られる。

鉄製品

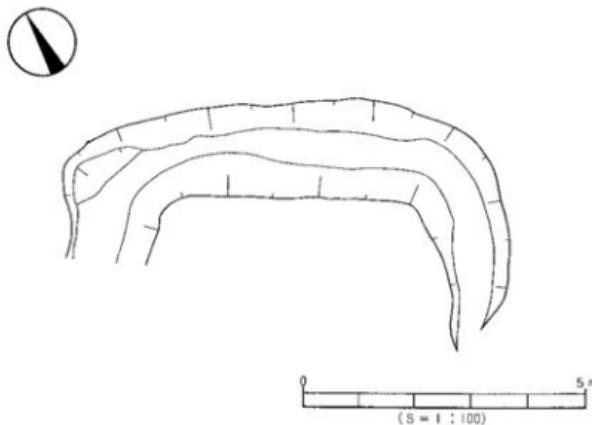
鉄斧（第23図-74） 全長7.5cm、を測る小型品である。有肩で袋状の着柄部を持つ。

[5] 16号墳

1) 墳丘及び周溝（第24・26図）

16号墳は、東山古墳群の中央よりやや東部に位置し、標高38.2mを測る丘陵部の緩傾斜面上に立地する。墳丘は、他の古墳同様削壁などの行為によって削平され、全墳に等しい状態となっていたが、周溝を検出するに至って方墳であることが明確となった。

周溝は、北部に隣接する15号墳墳丘裾部をカットして形成されている。形状は、北側の一辺と南北に延びる東西の2辺の一部、即ち「匁」字形に確認できたのみで南半分以上が調査区外へと続いている。周溝の規模は、東西に延びる北辺の外側で7m、内側で5mを検出でき、溝の幅は、1.2~2.1mを測った。緩傾斜地であるため、南側の周溝については、すでに削平され遺存していないものと思われるが、少なくとも一辺7m前後の方墳であったことが推察できる。また、墳丘の主軸については、北辺によりN32°30'Eを指している。なお、主体部については、墳丘内中央よりやや南東部に主体部と思われる土壙墓（SK9）を検出したが、前述のとおり周辺の削平・攪乱のため判然とせず、後述する「土壙」の項に譲るものとする。



第24図 16号墳周溝実測図



75



79



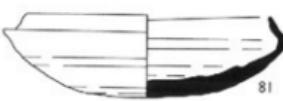
76



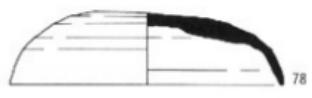
80



77



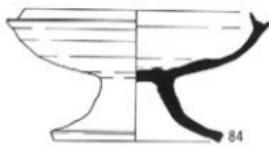
81



78



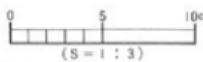
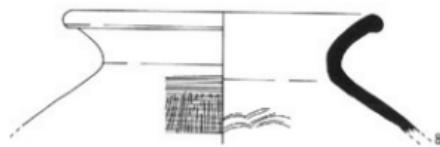
82



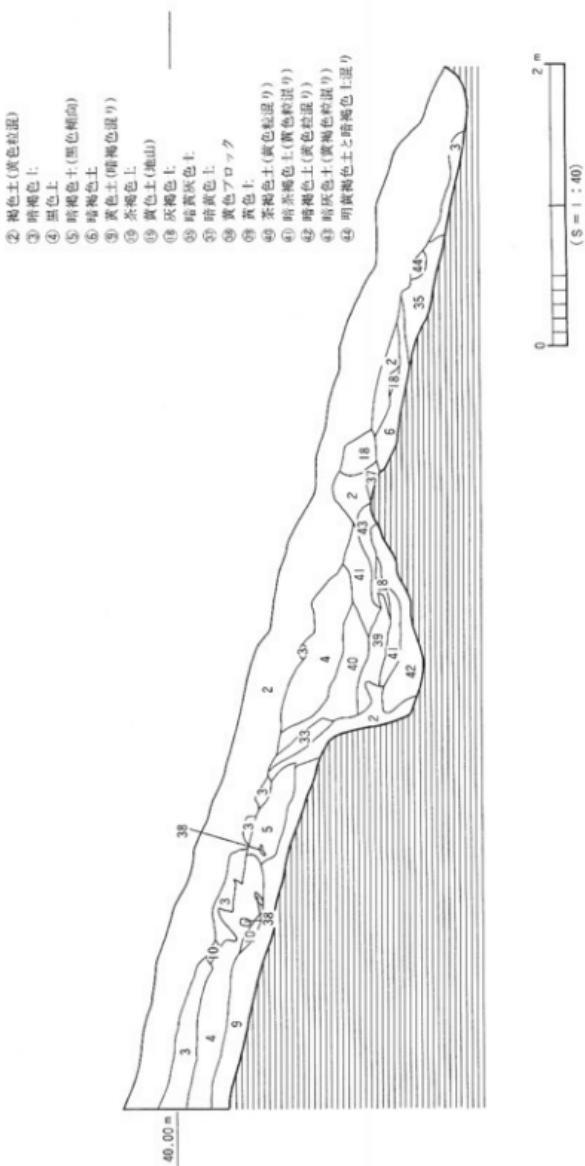
84



83



第25図 16号墳周溝内出土遺物実測図



第26図 16号填土層断面図

2) 出土遺物(第25図)

出土状況 主体部が、不明のため周溝内から出土した遺物に限られる。周溝内からは、須恵器の壺身5片、高環2片、壺蓋4片、壺片2片などを出土している。緩傾斜地の上部にある15号墳や周辺部の祭祀遺構との関係も考慮しながら、検出作業を行ったが、明確な土層を確認するまでは至らなかった。ただ、地山面より5~10cm上面、即ち黄褐色粘質土中で須恵器を出土した検出状況から推して、二次堆積の可能性も考えられる。

周溝内出土遺物

須恵器

壺蓋(第25図—75~78) 75は口径13.9cm、器高4.6cmを測る。丸い天井部より直立気味に下がる口縁部は丸く仕上げられ、口縁部外面と内面全体にナデ、天井部1/2に回転ヘラ削りを施す、天井部の中心線上に長さ10cmの線が見られヘラ記号と思われる。76~78は口径14.5cm~14.7cm、器高3.8cm~4.4cmを測る。75に比べやや平坦な天井部より緩やかなカーブを描き口縁部につづく、口端部は、76は丸く、77、78はやや尖り気味に丸い。天井部1/2に回転ヘラ削り、その他はヨコナデ調整で、76、77、78の天井部内面に直線ナデが見られる。

壺身(第25図—79~83) 79は口径12.2cm、器高4.3cmを測る。水平気味にやや外上方に伸びる受部に、内傾する短いたち上がりをもつ。受部端部は丸く、たち上がりは尖り気味である。底部に75と同様にヘラ記号が見られる。80は口径13.0cm、器高4.1cmやや平たい底部である。受部は水平気味に伸び端部は丸く仕上げられ、たち上がりは内傾し、直立気味に立ち上がる鐘部は、丸くおさめられ焼成は良好で青灰色を呈している。81は少し焼け歪みを生じているが、口径12.8cm、器高4.4cmになるものと思われる。短い受部に内傾するたち上がりをもち、受部、たち上がり、ともに端部は丸くおさめられている。82、口径12.3cm、器高3.9cmを測る。口縁部を一部欠失し底部に焼け歪みが見られる、受部は水平気味に短く伸び内傾する立ち上がり端部は、尖り気味に丸く仕上げられている。79~82の底部に回転ヘラ削りが施され、それぞれ1/3~2/3のヘラ削りであるが、82は受部近くまでヘラ削りが行なわれている。また、79~82のそれぞれの底部内面に直線ナデが見受けられる。83は、口径11.3cm、器高4.6cm、扁平な底部より短く水平に伸びる受部に、直立する長いたち上がりをもつ口縁端部は内傾する面を有する。底部2/3に回転ヘラ削りその他の部位にはナデによる調整が施されている。

高環(第25図—84) 口径14.0cm、脚底径9.1cm、器高6.9cmを測る有蓋高環である。受部は短く外上方に伸び丸くたち上がりは内傾し端部は尖り気味に仕上げられている脚部は短く八の字状に開き、脚端部で内傾する凹面をもつ。

壺（第25図—85） 短く外反する口縁部は端部で下方向に肥厚され、丸くおさめられている。外面に平行叩きからカキ目調整が施され、内面には同心円文が見られる。

[6] 17 号 墳

1) 墳丘及び周溝（第28・29図）

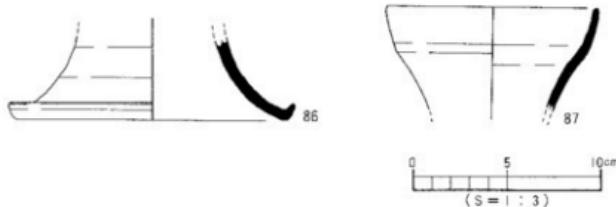
17号墳は、標高37.8mを測る丘陵部の緩傾斜面上に立地する。16号墳の東側に隣接し、調査区の東端において「L」字状の周溝を検出したが、全容は、調査区外へと続いているため未確認である。墳丘は、他の古墳同様開墾などの行為によって削平され、全壇に等しい状態となっていた。層序は、上層より腐葉土を含む耕作土、次に暗灰色粘質土、黄褐色粘質土、暗黄褐色粘質土、和泉砂岩質の黄色土（地山層）と続いている。黄褐色粘質土を除去した段階で、暗黄褐色粘質土に覆われた周溝を検出した。

周溝は、北部に隣接する15号墳墳丘裾部を切り込んだ状態で検出している。形状は、北西コーナー付近と西辺や北辺の一部が「L」字形に確認できたのみで、大部分は調査区外へと続いている。周溝の規模は、東西に延びる北辺の外側で3.5m、内側で2mを、西辺の外側で5m、内側で4.5mを検出し、溝幅は、1~1.6m前後を測ったが、全貌は不明である。また、墳丘の主軸については、南北辺によりN52°30'Eを指している。

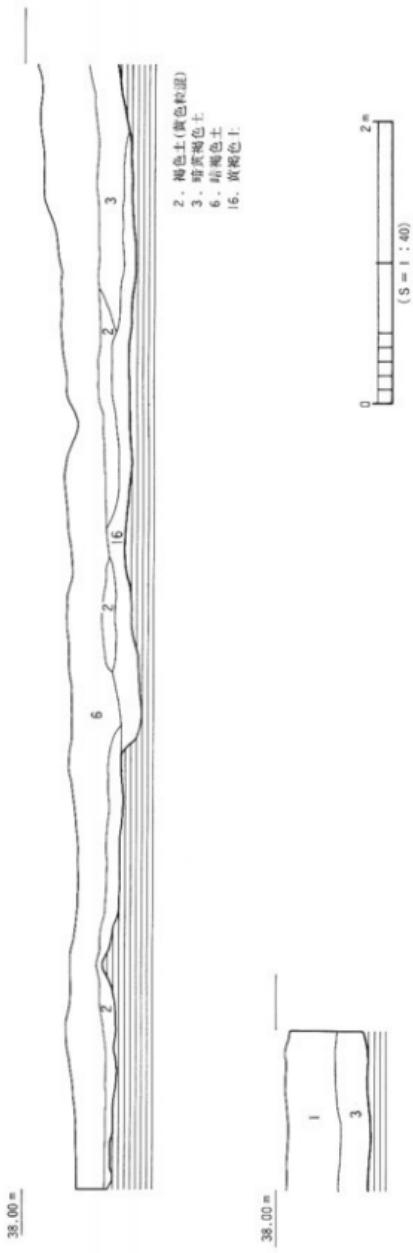
なお、主体部については、墳丘内より土壙墓（SK12）を検出したが、削平・攪乱のため判然とせず、後述する「土壙」の項に譲るものとする。

2) 出土遺物（第27図）

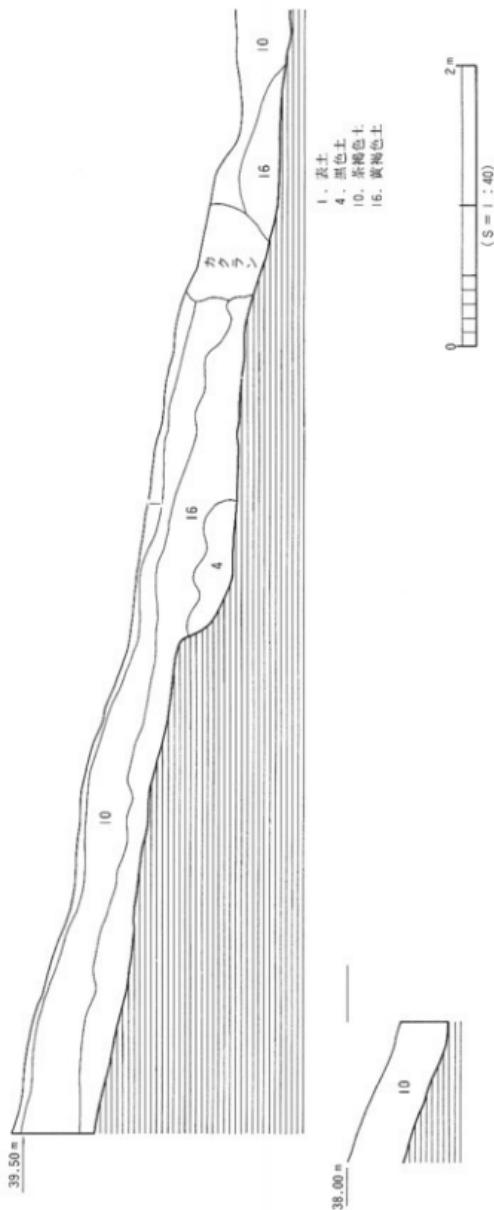
出土状況 主体部が、未確認のため周溝内から出土した遺物に限られる。周溝内からは、須恵器の高环1片、長頸瓶2片、壺片1片などを出土している。周溝地山面より5~10cm上面、即ち黄褐色粘質土上面で須恵器を出土した状況から、緩傾斜地の上部にある15号墳や周辺部の祭祀遺構からの流れ込んだ遺物とも考えられる。



第27図 17号墳周溝内出土遺物実測図



第28图 17号堆前壁土剖面图



第25圖 17號填東壁土層斷面圖

周溝内出土遺物

須恵器

高环（第27図—86） 86は脚部片である。八字状に広がる脚部は端部で上方に伸び、端面に浅い凹線が巡る。内外面の調整はナデである。

壺（第27図—87） やや外上方に開いた後に直立気味に立ち上がる口縁部片である。端部は丸く仕上げられ、内外面はナデ調整が施されている。

[7] 18号墳

1) 墳丘及び周溝

18号墳は、標高38.6mを測る丘陵部の緩傾斜面上に立地する。16号墳の西側に隣接し、調査区の東端において「コ」の字状の彫溝を検出したが、南側半分以上が調査区外へと続いているため未確認である。墳丘は、他の古墳同様開墾などの行為によって削平されているものと思われるが不明である。層序は、上層より腐葉土を含む耕作土、次に暗灰色粘質土、黄褐色粘質土（暗灰色粘質土混）、暗黃褐色粘質土、黄褐色土、和泉砂岩質の黄色土（地山層）と続いている。黄褐色粘質土を除去した段階で、暗黃褐色粘質土に覆われた周溝を検出した。

周溝は、北部に隣接する15号墳墳丘裾部を切り込んだ状態で検出している。形状は、北西と北東コーナー付近、北辺の一辺が「コ」の字形に確認できたのみで、大部分は調査区外へと続いている。周溝の規模は、東西に延びる北辺の外側で8.2m、内側で6.4mを測り、西辺・東辺は1mを検出したのみであった。溝幅は、0.8~1m前後を測った。また、墳丘の主軸については、北辺によりN37°30'Eを指している。

2) 出土遺物（第30図）

出土状況 本墳においても主体部が、未確認のため周溝内から出土した遺物に限られる。周溝内からは、須恵器の高环2片、長頸壺2片、鉄器1片などを出土している。周溝地山面より10~20cm上面、即ち黄褐色粘質土上面で須恵器を出土した状況から、緩傾斜地の上部にある15号墳や祭祀遺構からの流れ込んだ遺物とも考えられる。

周溝内出土遺物

須恵器

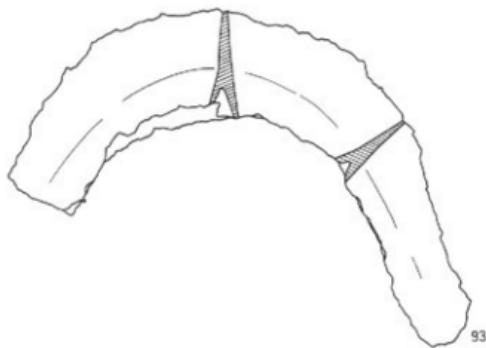
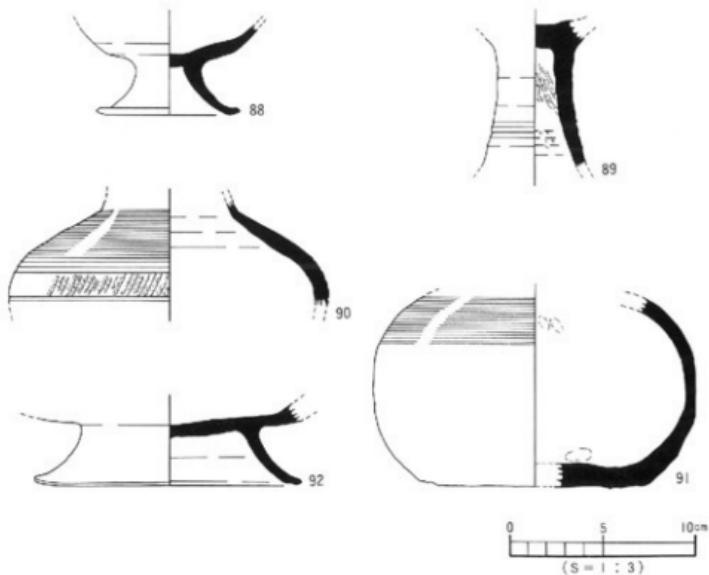
高环（第30図—88・89） 88は脚部径7.5cmを測る。短く八字状に開く脚端部は尖り気味に仕上げられている。内外面ともに焼成不良で乳白色を呈しており、調整も不明である。89、脚部片である。脚部外面に2条の凹線が施され、内面にしづら痕が見られ、その他の部位は

ナデ調整である。

壺（第30図—90～92） 90は八字状に広がる胴部片である。肩部に櫛歯状工具による右上がりの刺突列点文を施し、その上部に2条の凹線、下部に1条の凹線が巡る。内面にはナデによる調整が施されている。91は胴部最大径17.0cmを測る底部から胴部にかけての残存である。平底ふうの底部より緩やかに曲線をとり、胴部中位で最大径を測り頭部につづく、外面上部に回転カキ目、底部にヘラ削り、底部内面に指頭痕、その他の部位にはナデ調整が施されている。92は脚付壺の脚部片と思われる。脚部径14.1cm、脚高3.0cmと低い脚部である。八字状に聞く脚部の端部は、丸く内面にナデによる浅い凹線が見られ、調整はナデが施され、焼け歪みを生じている。

鉄製品

鋤先（第30図—93） 端部を一部欠失している。幅4.1cmを測るU字状鋤先である。



第30図 18号墳周溝内出土遺物実測図

[8] 溝状遺構

1) SD 1

標高41.50~40.35mを測る緩傾斜面上に立地する。西側を9号墳、北側を11号墳に接する南北に延びる溝である。南端は後世の擾乱によって削平され、北部は調査区外のため検出には至らなかった。溝内部には土壤状遺構SK7があり、SK7が溝を切る状態で検出された。平面形は南北に延び、丘陵裾部の南方に尖った槍先形を呈している。埋土は暗黄灰色土を主とし、その中に灰色土、黃灰色土をブロック状に混入している。規模は最大幅1.3m、深さ15~20cmを測る。

出土遺物は須恵器の脚付き広口壺（完形品）を検出したが、丘陵上部にある11号墳乃至は他の祭祀遺構から二次的に混入したとも考えられる。なお、SK6との関係について今後検討を要すると思われる。

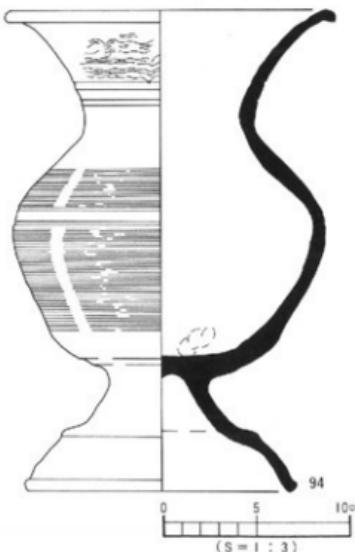
出土遺物

須恵器

脚付広口壺（第31図-94）94は口径17.6cm、器高20.6cm、体部最大径16.7cm、脚高6.2cmを測る。平坦な体底部から外上方に立ち上がった体部は、その中位よりもやや上で最大径を測り内湾しながら頸部に至る。ラッパ状に外上方に開いた頸部は口縁部に至ってさらに大きく開き、端部を下方に肥厚させ丸くおさめる。口縁部は中位よりやや下に2条の凹線を巡らせ、この凹線よりも上部の口縁部にかけて粗雑な櫛描き波状文を施し、体部最大径を測る肩部やや上に2条の凹線を巡る。脚部は外下方に一旦外反して広がった後、段状の棱を界して内湾気味に広がり端部に至って僅かに外反する。底部を除く体部にカキ目による調整が行なわれ、底部にはヘラ削りが施されている。

2) SD 2

標高41.25~38.80mを測る緩傾斜



第31図 SD1出土遺物実測図

面上に立地する。西側を9・13号墳、北側を11号墳、東側を18号墳に接する南北に直線状に延びる溝である。北端は後世の擾乱によって削平され、南部は調査区外のため検出には至らなかった。平面形は南北に延び、丘陵上部の北方に尖った形を呈している。埋土は暗褐色土を主とし、その中に黄色土がブロック状に混入している。規模は最大幅65cm、深さ10~12cmを測る。

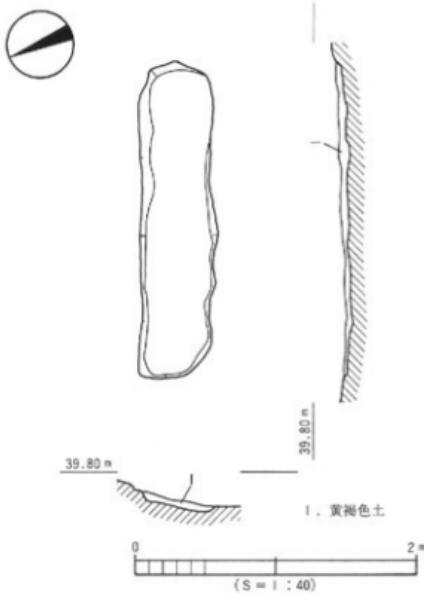
出土遺物は須恵器の小片が二次的に混入しており、図示しうるものはなかった。

〔9〕 土 墓 状 遺 構

1) SK 1 (第32図)

標高39.75mを測る丘陵部と丘陵部の中間の緩傾斜面上に立地する。9号墳南東部の周溝内部にあり、また13号墳東部4mの地点に位置する。9号墳周溝内にあり、土壌上部は周溝によって削平されている。平面形は隅丸の東西を長軸とする方位N69°15'Wをとる長方形を呈している。埋土は周溝内下層部に堆積する黄褐色土と同じである。東西主軸長2.24m、南北幅0.56m、深さ8cmを測る。

出土遺物は須恵器の小片が二次的に混入しており、図示しうるものはなかった。

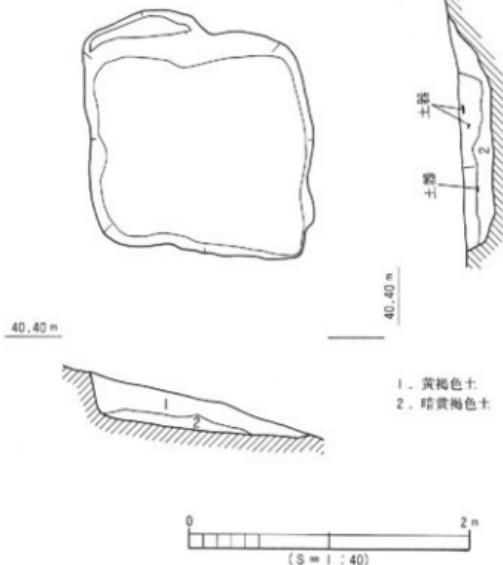


2) SK 2 (第33図)

標高40.2mを測るSK 1の北方に隣接し、緩傾斜面上に立地する。9号墳の周溝内部にあり、また13号墳東部5mの地点に位置する。9号墳周溝内にあり、土壌上部は周溝によって削平されている。平面形はほぼ正方形を呈し、南北を軸とするならば方位N79°50'Wをとる。埋土は周溝内下層部に堆積する黄褐色土とその下層に暗黄褐色土が堆積する。東西軸長1.5m、南北幅1.6m、深さ30cmを測る。

出土遺物は全く出土していない。

第32図 SK 1 平面及び土層断面図



第33図 SK 2 平面及び土層断面図

標高40.8mを測る。平面形は隅丸の東西を主軸とする方位N $69^{\circ}30'W$ をとる長方形を呈している。土壌内には和泉砂岩質の割石が南北の壁面に約20個遺存しており、その大きさは10~25cm程度である。また埋土は9号墳主体部の直下層にある黒色の弥生土器包含層によって占められていたが、ただ土壌内からは弥生土器小片数点を出土したのみであった。規模は東西主軸長1.62m、南北幅0.77m、深さ30cmを測る。

出土遺物は弥生土器の小片を検出したが、図示し得るものはなかった。

3) SK 3

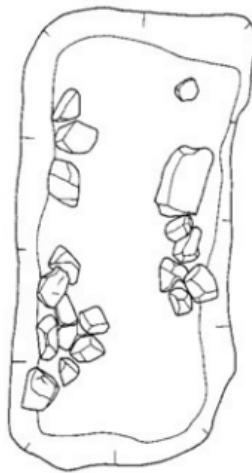
標高39.9mを測り、9号墳の北部周溝内にあり、土壌上部は周溝によって削平されている。平面形は隅丸の東西を長軸とする方位N $72^{\circ}W$ をとる長方形を呈しているが、東部コーナーについては削平のため確認されなかつた。埋土は周溝内下層部に堆積する黄褐色土と同じである。東西主軸長1.3m以上、南北幅0.6m、深さ10~15cmを測る。

出土遺物は全く出土していない。

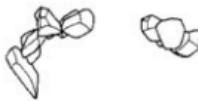
4) SK 4 (第34図)

9号墳墳丘裾部の緩傾斜面上に立地し、

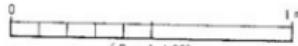
41.00 m



41.00 m

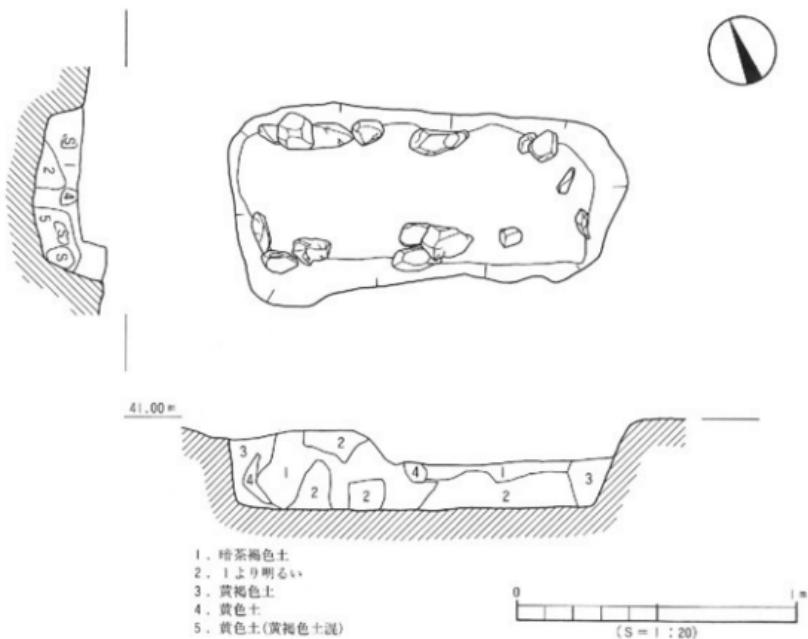


41.00 m



第34図 SK 4 平面及び展開図

5) SK 5 (第35図)

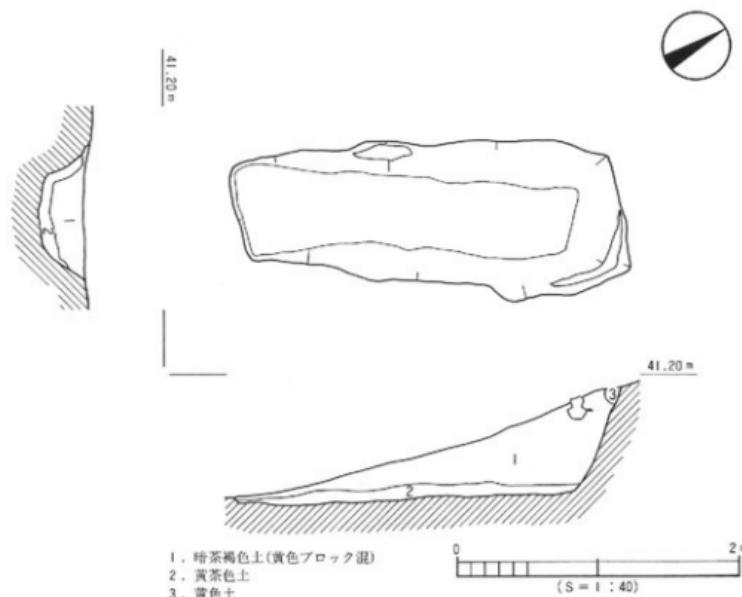


第35図 SK 5 平面及び土層断面図

9号墳墳丘上にあり、9号墳主体部北方1mの地点の緩傾斜面上に立地し、標高40.9mを測る。平面形は隅丸の東西を主軸とする方位N69°30'Wをとる長方形を呈している。土壌内には和泉砂岩質の割石が南北の壁面に約30個遺存しており、その大きさは10~30cm程度である。また埋土は黒色土の下に暗茶褐色土があり、その中にそれよりやや明るい褐色土がブロック状に混入していた。土壌内からは弥生土器小片数点を出土したのみであった。規模は東西主軸長1.43m、南北幅0.64m、深さ25cmを測る。

出土遺物は弥生土器の小片を検出したが、図示しうるものはなかった。

6) SK 6 (第36図)



第36図 SK 6 平面及び土層断面図

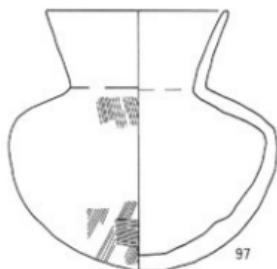
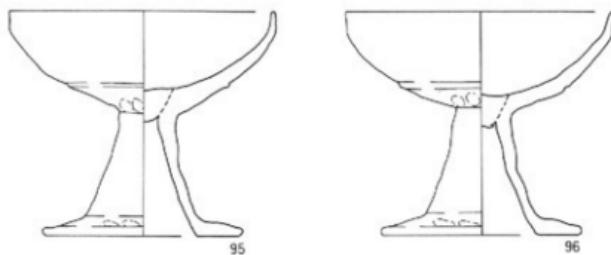
11号墳の南面、15号墳の西面に接し、丘陵の凹地に立地する。標高は41.1~40.75mを測る。平面形は隅丸の南北を主軸とする方位N $30^{\circ}50'E$ をとる長方形を呈している。埋土は上面に暗茶褐色土、その下に10cmの厚さで黄灰色土が敷かれた様相を呈する。規模は南北主軸長2.8m、東西幅1m、深さ30cmを測る。

出土遺物は土壤内から土師器高環2点(完形品)、同短頸壺1点(完形品)、そして先端部をU字状に湾曲した鉄製品の鏟を北壁より出土した。いずれも地山面よりやや上面において、かたまった状態で検出された。

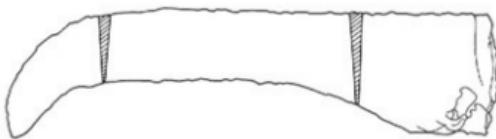
出土遺物

土師器

高環(第37図-95・96) 95・96は口径14.2cm、底径10.6cm、器高11.8cmを測る同法量の



0 5 10cm
(S = 1 : 3)



0 5cm
(S = 1 : 2)

第37図 SK 6 出土遺物実測図

端部は丸く仕上げられる。壺底部に脚部との接合時の指頭痕が見られる。脚部は外傾する柱部に水平に伸びる裾部を持つ、柱内面はヘラ削りを行ないヘラ削り後は未調整である。裾部は摘みながらナデ調整が行なわれ、その他の部位は横ナデ調整が施されている。

壺（第37図-97） 口径9.4cm、胴部最大径14.1cm、器高14.8cmを測る。口縁部は外上方に直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げられている。胴部中位上方で最大径を測り半球形の底部につづく、胴部上位に縱方向のハケ、それより底部にかけてハケ後にナデ調整が行なわれ、その他には横ナデ調整が施されている。

鉄製品

鎌（第37図-98） 全長17.5cm、幅2.5cm、着柄部幅4.2cmを測る。先端部がU字状に湾曲し着柄部に至って広くなり、着柄部は直角に近い折り返しがある。

7) SK 7 (第38図)

11号墳の南西面、9号墳周溝の東面に接し、丘陵緩傾斜面上に立地する。標高は41.25mを測る。南北に延びるSD 1を東西にカットした状態で検出された。平面形は東西を主軸とする方位N67°75'Wをとる長方形を呈している。埋土は暗黄灰色土を主とし、暗灰黄色土がブロック状に混入している。規模は東西主軸長1.64m、南北幅0.7m、深さ20cmを測る。

出土遺物は須恵器の小片を検出したが、図示しうるものはなかった。

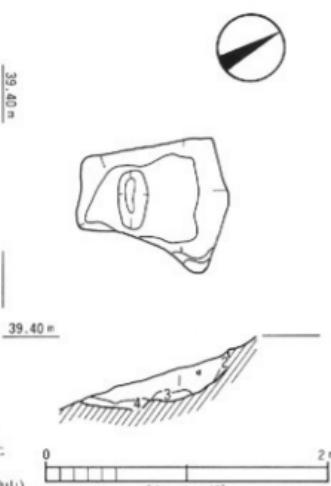


第38図 SK 7・SD I 平面及び土層断面図

8) SK 8 (第39図)

18号墳の北東部2.5m、SD 2の東面に接し、丘陵の凹地に立地する。標高は39.1を測る。平面形は隅丸の南北を主軸とする方位N $27^{\circ}30' E$ をとる台形状を呈している。埋土は上面に暗灰色土、その下に10cmの厚さで明黄灰色土が混入している。規模は南北主軸長1.1m、東西幅1~0.5m、深さ20~30cmを測る。

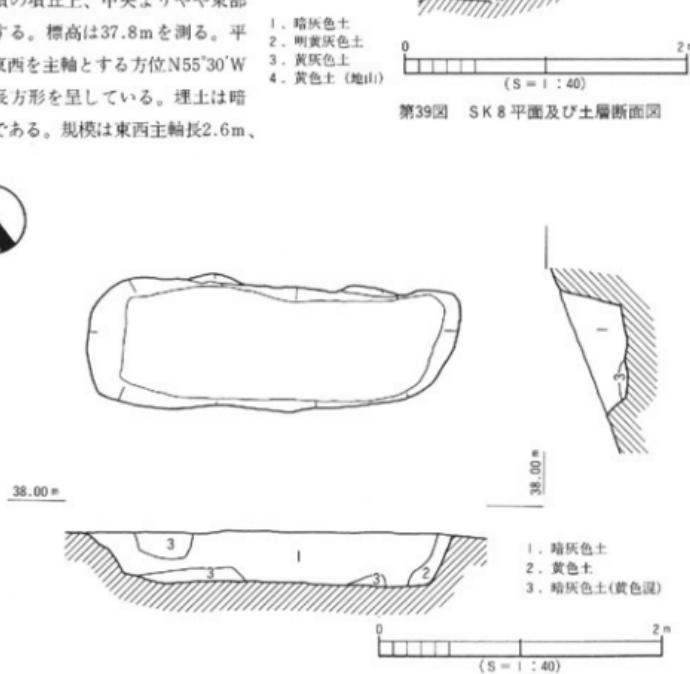
出土遺物は全く検出されなかった。



第39図 SK 8 平面及び土層断面図

9) SK 9 (第40図)

16号墳の墳丘上、中央よりやや東部に立地する。標高は37.8mを測る。平面形は東西を主軸とする方位N $55^{\circ}30' W$ をとる長方形を呈している。埋土は暗灰色土である。規模は東西主軸長2.6m、



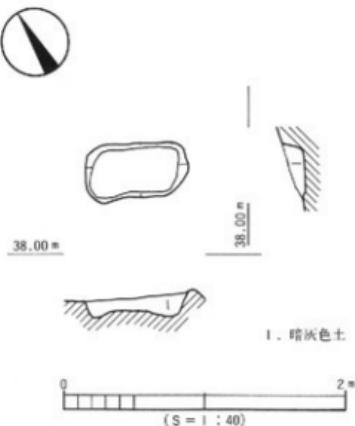
第40図 SK 9 平面及び土層断面図

南北幅0.9m、深さ35cmを測る。位置的にみて16号墳の主体部の可能性もあるが、出土遺物がなく、南方の調査区外の部分が不明なため判然とはしない。

10) SK 11 (第41図)

16号墳の東部、17号墳の西部のやや凹地に立地する。標高は37.7mを測る。平面形は東西を主軸とする方位N55°30'Wをとる長方形を呈し、埋土は暗灰色土である。規模は東西主軸長0.75m、南北幅0.4m、深さ15cmを測る。

出土遺物は全く検出されなかった。



第41図 SK 11平面及び土層断面図

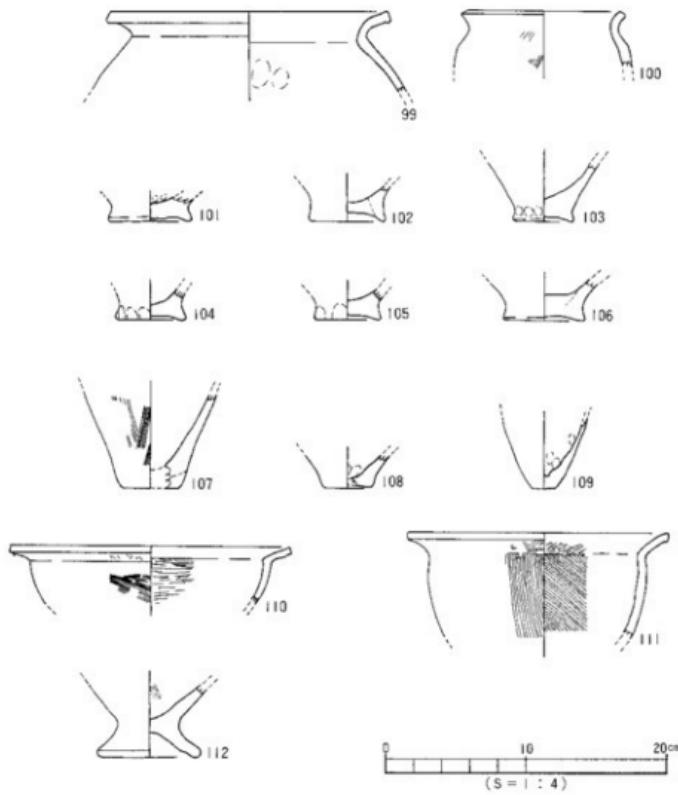
11) その他の出土遺物

弥生土器

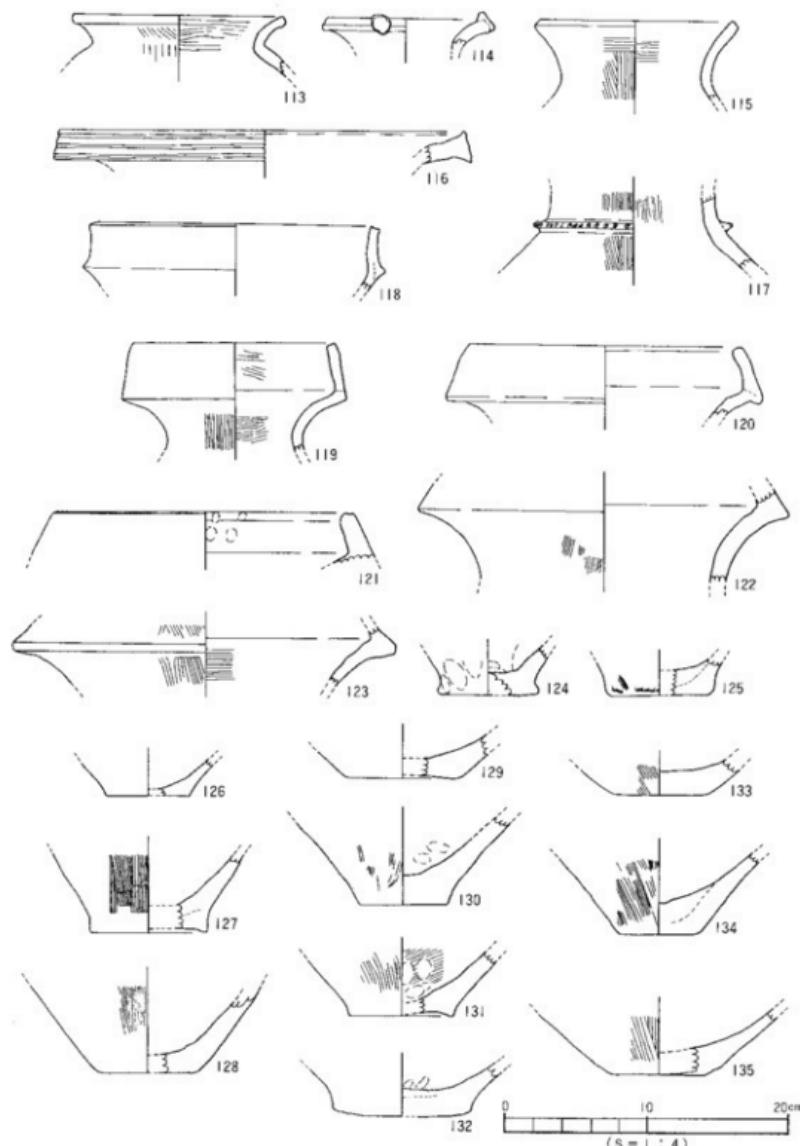
9号墳

甕(第42図—99~109) 99・100は口縁部片。99は口縁部を拡張し下方に張りだす。100は緩やかに折れ曲がる口縁部である。101~106はくびれの上げ底の底部片。101・104・105はつまみながらナデが行なわれている103・103・106ナデによる調整である。107は平底の底部より外傾して直線的に立ち上がる。108はわずかに上げ底の小さい底部。109はミニチュア品と思われる。

鉢（第42図—110～112） 110は折り曲げ口縁で頸部内面に明瞭な稜を持つ。外面口縁にハケからナデによる調整、胴部内外面に横ハケが施される。111は折り曲げ口縁、頸部内面に緩やかな稜を持つ胴部外面に縱方向のハケ目、内面に右下がりのハケ目が施される。112はくびれの上げ底の台付鉢と思われる。



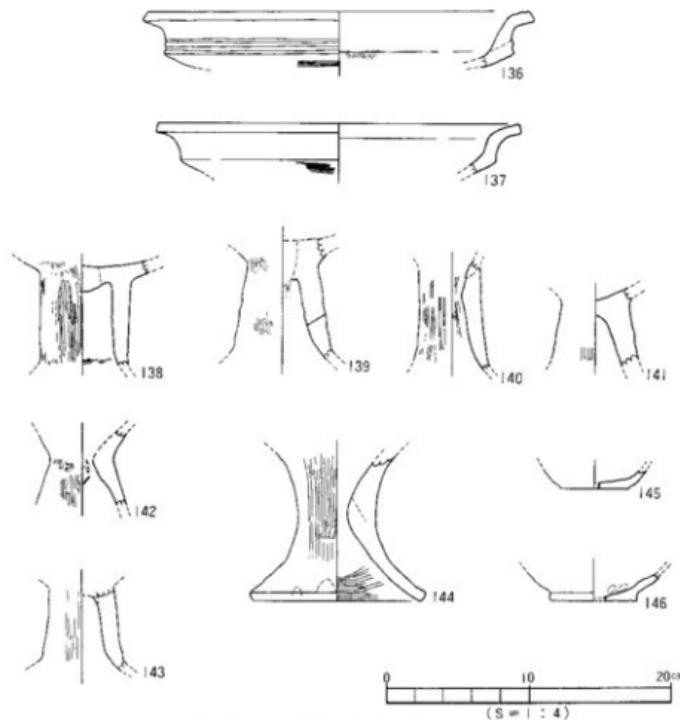
第42図 9号墳出土弥生土器実測図(1)



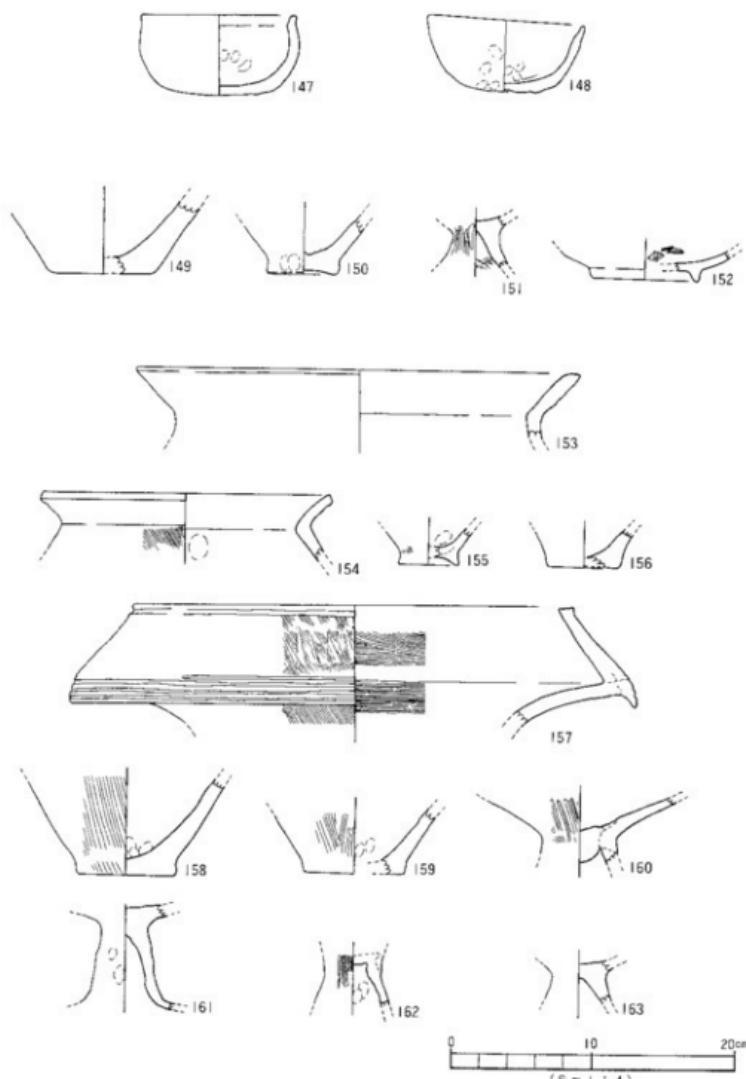
第43図 9号墳出土弥生土器実測図(2)

壺（第43図-113～135） 113は「く」の字状に折れ曲がる口縁端部は丸く内外面にハケ目が見られる。114は口縁部片で口縁端面に円形浮文を施す。115緩やかに外反する口縁部の外面はナデとハケによる調整が行なわれている。116は復元口径28.4cmを測る口縁部片である口端部を上下に拡張し端面に凹線を3状巡らす。117は頸部片。頸部に凸帶を張りつけ刻目を施す。外面に縱方向のハケ目が見られる。118～123は複合口縁の口縁部片である118は口縁部中位で段をなし外反しながら鐘部につづく。119は口縁14.0cmと小型の壺である拡張部はやや内傾する。120はわずかに内湾する拡張部。121、口端面がわずかに窪んでいる。122、123は拡張部を欠失している。124～135は底部片である。127、131はやや上げ底で、その他は平底である。132、133に黒斑有り。

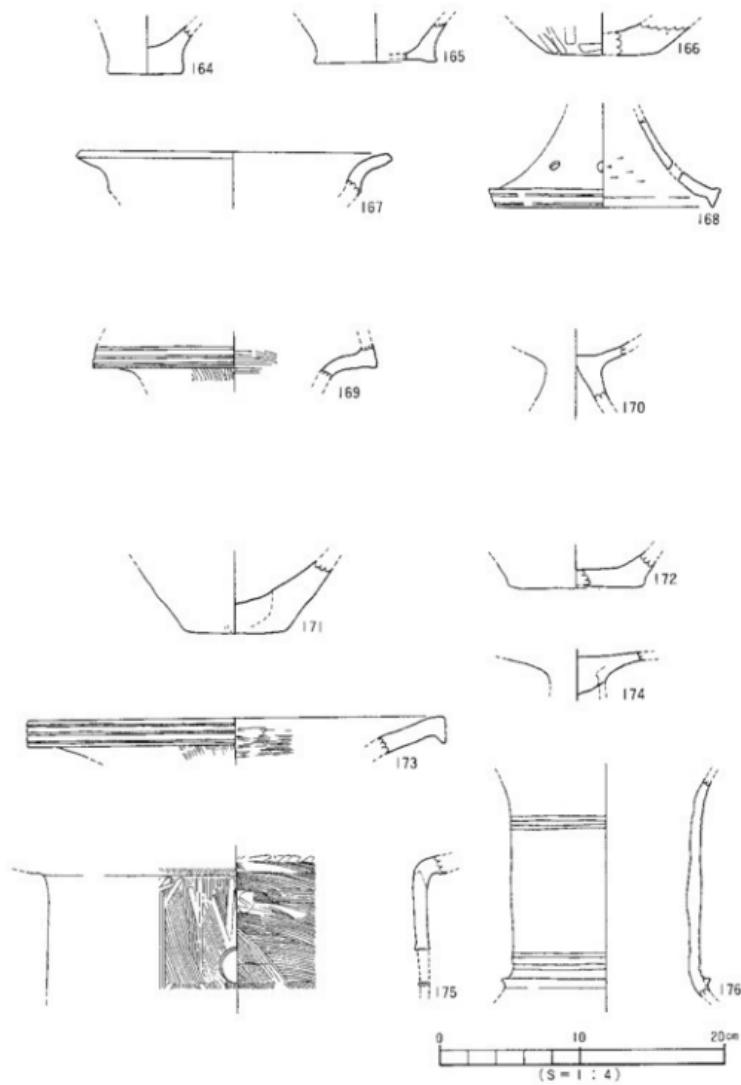
高坏（第44図-136～143） 136・137は坏部片である。136は擬口縁を作り外反する拡張部を張り付け上部と擬口縁端面に2条の凹線を巡らす。137は段をなし外反する口縁部。138～



第44図 9号墳出土弥生土器実測図(3)



第45図 15号墳出土弥生土器実測図



第46図 18号墳出土弥生土器実測図

143は脚部片である。138は直立する柱部、坏部は充填が抜け落ち外面はハケから磨きによる調整が行なわれている。139～143は瓶部に向かって広がる柱部外面はハケ内面はナデによる調整方法である。

支脚（第44図—144） 中空・柱状の体部に上下が開く外面に縦ハケと横ナデ、内面にナデと横ハケが施される。

土師器（第44図—145・146） 145は皿で底部に回転糸きり痕が見られる。146は台付の坏と思われる底部片。

11号墳

碗（第45図—147・148） 147は、口径10.7cm、器高5.8cm、148はそれぞれ11.1cm、5.2cmを測るよく似た法量である。147は、丸みをもつ底部より内湾気味に立ち上がり、口縁端部はナデによりやや外反する。148は丸みをもつ底部に凹凸が見られ、やや開き気味の口縁部端部は丸い。147、148ともに内面に凹凸が見られてすぐれ品と思われる。

13号墳（第45図—9～152）

149は壺の底部片、厚い平底である。150は甕の底部片、やや上げ底の底部の外面に指頭痕が見られる。151高杯、内面にしばり痕が顕著である外面にヘラ磨きが施される。152、土師器の碗、高台付で内面は黒色である。

15号墳

甕（第45図—153～156） 153・154、は口縁部片である。153は「く」字状に開き口縁部はやや尖り気味に丸く頸部内面に緩やかな稜が見られる。154、「く」字状の口縁部の頸部内面に稜が見られる。155・156は甕の底部片、155は上げ底で外面にハケ目、内面に指頭痕が見られる。156はわずかに上げ底である。

壺（第45図—157～159） 157は複合口縁の口縁部片である下垂口縁の端面に凹線を3条めぐらし、拡張部は内傾し口縁面に凹線を施す。外面拡張部にハケからヘラ磨き、内面はハケによる調整が施されている。158・159は平底の底部片である。外面にハケ目、内面に指頭痕が見られる。

高杯（第45図—160～163） 160～163は脚部片である。160は外方向に開く坏部を持ち内外面はヘラ磨きが行なわれている。161～163は組合せ技法と思われる。

16号墳

甕（第46図—164・165） 164は平底の底部片。165はやや上げ底の底部片である。

壺（第46図—166） 壺の底部片、外面にヘラ磨きが見られる。

高环（第46図—167・168） 167は外反する口縁部片。168、八字状に広がる脚部片である。脚端部を上下に拉張を行ない、端面に凹線を2条巡らす外面に横ハケ、内面に削り、裾部に円孔を6カ所に施す。

17号墳（第46図—169・170）

169は壺の口縁部片。口端面に不明瞭な凹線が3条巡る、外面に縦ハケ、内面に横ハケから横ナデによる調整が施されている。170は高环の脚部片で組合せ技法と思われる。

18号墳（第46図—171～176）

171、172は壺の底部片171は厚い平底である。173は壺の口縁部片、口端部が下に毛れ端面に3条の凹線が巡る、内外面にハケ目が見られる。174は高环型土器充填法と思われる。175・176は器台型土器、175は直径2.4cmの円孔を施す外面にハケ目調整からヘラ磨き、内面にはハケ目調整からナデ調整を施す。176は直立する脚部の上部に1条の凹線、下部に2条の凹線、その下に断面三角形状の凸帶を1条巡らす。内外面にナデによる調整が施される。

石 器

本調査において出土した石器の総数は5点である。その内訳は打製石鎌2点・石庵丁1点・剥片1点・残核1点である。そのうち報告するのは打製石鎌と石庵丁であり、いずれも9号墳の調査において出土したものである。使用石材に着目すると、打製石鎌はサヌカイトを、石庵丁は緑色片岩を用いている。これは、松山平野で一般的に認められる傾向である。

177は磨製石庵丁の刃部片である。a面では縦方向の研磨痕が看取されるものの、b面では研磨の方向は横であり、両面における研磨の方向は一致していない。しかしながら、いずれの面も丁寧に研磨されていることから、製品として使用されていたのが破損したものである。

178・179は平基無茎式の打製石鎌である。178は両側縁が先端部に向かってやや内に屈曲するので、平面形が五角形を呈する。調整剝離は両面に丁寧に施されており、素材面はほとんど認められない。横断面形は整った凸レンズ形である。法量は長さ29mm、重量0.9gである。

179は側縁の一部を欠く破損品である。両側縁は先端部に向かってやや外湾する。素材面が両面に若干認められる。法量は長さ21mm、重量1.1gである。
(加島次郎)



第47図 9号墳周溝内出土石器実測図

●表1 9号墳出土遺物観察表〔1〕 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
1	环盖	口径 14.8 高さ 4.8	丸い天井部。 尖り奥底に丸い口縁部。	⑩ 回転ヘラケズリ△ ⑪ 回転ナデ	回転ナデ	石・長(1~3) ○		11
2	环蓋	口径 13.6 高さ 3.7	扁平な天井部。 丸味をもつ口縁部。	⑩ 回転ヘラ切り 回転ヘラ△ ⑪ 回転ナデ	回転ナデ	長(1~6) ○		11
3	环身	口径(11.1) 機高 4.1	内側底高さに立ち上がる。 底部は内側する段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	石・長(1~3) ○		11
4	环身	口径(12.3) 高さ 4.0	口縁部は丸い。 底部は扁平。	⑩ 回転ナデ ⑪ 回転ヘラケズリ△	回転ナデ	石・長(1~3) ○		11
5	若	口径 11.6 高さ 5.6	丸味をもつ天井部に中筋のつ みが付く。 前面三角形の縁をもつ。	⑩ 回転ヘラケズリ△ ⑪ 回転ナデ ⑫ ナデ ⑬ 回転ナデ	回転ナデ	G・長(1~3) ○		11
6	环蓋	口径(12.6) 機高 4.45	口縁部に凹凸、天井部に段を もつ。	⑩ 回転ヘラケズリ△ ⑪ 回転ナデ	回転ナデ	石・長(1~3) ○		
7	环蓋	口径 12.6 機高 4.4	單縫な縁をもつ。 つまみ部欠損。	⑩ 回転ヘラケズリ△ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	石・長(1~3) ○		
8	环蓋	機高 2.65	浅く両耳、つまみ部を有する。	⑩ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	長(1) ○		
9	高环	口径(10.2) 高さ 6.5	たらあがりは内側した後直立 する。受板はやや外上方に伸び る。	⑩ ⑪ 回転ヘラケズリ△ ⑫ 回転カキ目 ⑬ 回転ナデ	回転ナデ	石・長(1~3) ○		11
10	高环	口径(11.0) 機高 7.1	受板は短く上外方に伸びる。 脚部に3方向に透し窓。	⑩ ⑪ 回転ヘラケズリ△ ⑫ 回転カキ目 ⑬ 回転ナデ	回転ナデ	石・長(1~2) △		
11	高环	口径(12.0) 機高 5.5	受板は短く水平に伸びる。 脚部に3方向に透し窓。	⑩ ⑪ 回転ヘラケズリ△ ⑫ 回転カキ目 ⑬ 回転ナデ	回転ナデ	石・長(1~2) ○		
12	高环	脚底径(9.1) 機高 6.6	「ハ」の字形に外反する脚部。 3方向に透し窓。	⑩ ⑪ 回転ヘラケズリ ⑫ ⑬ 回転カキ目 ⑭ 回転ナデ	回転ナデ	石・長(1~2) ○		
13	高环	脚底径 8.5 機高 5.8	「ハ」の字形に外反する脚部に 3方向の透し窓。	⑩ ⑪ ⑫ 回転ヘラケズリ△ ⑬ 回転カキ目 ⑭ 回転ナデ	回転ナデ	石・長(1~4) ○		
14	高环	脚底径 8.1 機高 4.4	「ハ」の字形に外反し脚部は、 あまり内側する。 舟形状の透し窓3方向。	⑩ ⑪ 回転カキ目 ⑫ ⑬ 回転ナデ	回転ナデ	石・長(1~4) ○		
15	高环	脚底径(9.5) 機高 5.0	脚部部分透で段をなす。 3方向の透し窓。	⑩ ⑪ 回転ナデ	回転ナデ	石・長 ○		
16	高环	機高 2.6	3方向の透し窓。	回転ナデ	回転ナデ	砂 ○		
17	高环	機高 3.4	脚中位に2本の出脚。	⑩ ⑪ 回転ヘラケズリ ⑫ ⑬ 回転カキ目	回転ナデ	石・長(2~6) ○		

●表2 9号墳出土遺物観察表〔2〕 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		施 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
18	高杯	口径(11.9) 脚底径(11.6) 基高 14.5	口縁部と脚部中位に2本の凹線。 脚底面に凹線。	⑦回転ヘラケズリ ⑧回転ナデ	⑨工具 同軸ナデ	砂 ○		11
19	高杯	口径(14.6) 底径 8.6 基高 10.6	口縁部手前に1条の凸筋を這 わす。 脚底面に凹面を有する。	⑩回転→カキ目 ⑪回転ナデ	⑫脚底→ナデ ⑬回転ナデ	長(1~5) ○	直筒體	11
20	甕	残高 8.3	肩部に1条の凹線、上部に2 条の凹線。脚底間に垂直状工 具による刻突例点。	⑭回転ヨコナデ ⑮回転ヘラケズリ	⑯回転ヨコナデ	砂 ○		12
21	甕	口径(7.8) 残高 9.6	口縁部中央に3条の凹線。 基部下と肩部に2条の凹線。 脚底間に刻突例点。	①~⑩回転ヨコナデ ⑪回転カキ目	⑫回転ヨコナデ	石・長(1~4) 多 ○		12
22	甕	口径 7.8 基高 15.4	瓶腹部に比較的のくびれ。 口縁部は尖り尖峰に丸い。	⑫~⑭回転ヨコナデ ⑮回転ヘラケズリ	⑬回転ヨコナデ ⑭回転ヨコナデ	長(1~2) ○		12
23	甕	口径(15.6) 残高 3.8	瓶腹部中央に1条の凹線。 肩部上部に浅波状。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~3) ○		
24	甕	口径(10.9) 基高 13.5	口縁部中央位に2条の凹線。 中位より基部間へへら状工具 による刻突。	⑯荷子印き→ヨコナデ ⑰工具	⑪~⑯ヨコナデ ⑰工具	長(1~6) ○		12
25	甕	口径 12.8 残高 16.1	口縁部中央位に1条の棱を有する。	⑪~⑯回転ナデ ⑰回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	石・長(1~4) ○		12
26	脚付 甕	脚底径(4.0) 基高 16.7	肩部に瘤突状の右上がりの創 突例点。上下に凹面を1条。	⑮回転ヨコナデ ⑯回転ヘラケズリ ⑰回転ヨコナデ	ヨコナデ	密(長=1~4) △		12
27	大型 甕	口径 18.7 脚底径 23.5 基高 37.0	腹部の搭部より「ハ」の字状に 聞く口縁部。 脚底部に焼過度あり。	⑪~⑯ヨコナデ ⑰平行叩き ⑱不規方向の平行叩き	②~⑯ヨコナデ ⑲同心円文	石・長(1~5) ○		13
28	大型 甕	口径 17.9 脚底径 32.5 基高 29.8	脚部中位に段をなす。 底部焼過度あり。	⑭~⑯ヨコナデ ⑰荷子印き→カキ目 ⑱荷子印き	①~⑯ヨコナデ ⑲~⑳ハケ目	長(1~2) ○		13
29	甕	口径(22.2) 残高 6.4	口縁部は上下に肥厚させない。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~6) ○		
30	甕	口径(16.2) 残高 6.5	近く外溝する凸振。 口縁部は丸くおさめられ焼 過度を生じる。	⑪~⑯ヨコナデ ⑰平行叩き→カキ目	ヨコナデ 同心円文	石・長(1) △		
31	甕	口径 24.0 残高 8.6	口縁部はヨコナデ。 脚部下叩き。	ヨコナデ 平行叩き	ヨコナデ 同心円文→ナデ消し	砂・石・土 ○		
32	甕	口径 22.3 残高 22.0	口縁部中位に波状。	⑦~⑯ヨコナデ ⑰平行叩き→カキ目	ヨコナデ 同心円文→ナデ消し	砂・長 ○		14
33	甕	残高 12.9	口縁部に段を有する。 口縁部中位に2条の凹線。 肩部、脚部中位に1条の凹線。	⑪~⑯同軸ヨコナデ ⑰回転カキ目 ⑲ヘラケズリ	ヨコナデ	石・長(1~3) △		14
34	椎社	脚底径 7.2 残高 11.8	外反する口縁部の基部よりや や水平に伸び延びやかな曲筋を 構ぐ様型。	⑩ナデ ⑪カキ目	ヨコナデ	長(1) ○		14

●表3 9号墳出土遺物観察表〔3〕 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
35	环	口径 16.1 高さ 6.5	古付きの底部。 口縁部は丸い。	ヨコナデ ⑩ 回転ヘラ切り	ヨコナデ	石 △		14

●表4 13号墳出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
37	环茎	口径 12.4 残高(4.6)	口縁部は尖り気味で内面に内 折する段をなす。	⑩ 回転ヘラケズリ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	石・長(1~2) ○		
38	环茎	口径(11.4) 高さ 4.4	天井部は丸みをもち、中凹 のつまみが行く。	⑩ 回転ヘラケズリ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	石・長(1~2) ○		15
39	环茎	残高 1.4	中凹みのつまみをもつ。	回転ヘラケズリ	ヨコナデ	砂・長 ○		
40	环身	口径 12.2 残高 3.8	やや上外方に伸びる受け詰。 口縁部は中凹みの面を有する。	回転ヨコナデ ⑩ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	長(1~2) ○		15
41	环身	直径(0.6) 残高 2.8	「ハ」の字状の低い高台を有す る。	⑩ 回転ヨコナデ ヨコナデ	ヨコナデ	砂・長 ○		15
42	高环	残高 3.5	水平に伸びる短い突起をもつ。	回転ヨコナデ ⑩ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	石・長(1~3) ○		15
43	高环	直径(8.4) 残高 4.3	脚部は「ハ」の字形に外反し 脚部往復で段をなす。 3方向に透し窓。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	石・長(1~2) ○		15
44	高环	直径(8.9) 残高 4.3	脚部は「ハ」の字形に外反し 脚部はよく内傾する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	石・長(1~2) ○		
45	高环	直径(7.6) 残高 2.0	内側する筋部。	ナデ	ヨコナデ	砂・石 ○		
46	高环	直径(12.4) 残高 2.4	脚部片。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	長(1~2) ○		
47	高环	残高 10.7	脚中位や上面に2条の回ね。 2方向に2段の透し窓。	回転ヨコナデ	ヨコナデ しばり痕	砂・石・長 ○		15
48	瓶	口径 12.6 残高 11.4	肩部に刻突列点文。 回転2条。	回転ヨコナデ ⑩ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ 滑錆痕	石・瓦(1~5) ○		
49	瓶	残高 5.1	胴部片。 瓶がある。	回転ヘラケズリ	ナデ	砂 △		15

●表5 15号墳出土遺物観察表〔1〕 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
50	环茎	口径(14.2) 高さ 3.5	口縁部は丸い。 地丸みのみ、大舟部が囲んで いる。	⑩ 回転ヘラケズリ 回転ヨコナデ	ナデ 回転ヨコナデ	石・長(1~5) ○		17

●表6 15号墳出土遺物觀察表〔2〕土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
51	环身	口径(13.0) 残高 3.0	直立気味に立ち上がる。 底部は水平に擴く伸びる。	回転ヨコナデ ⑩ 回転ヘラケズリ%	回転ヨコナデ	石・長(1~3) ○		
52	环身	口径(13.4) 残高 4.0	内傾して直立気味に立ち上がる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	長(1~2) ○		
53	环身	口径(13.2) 残高 3.8	内傾する立ち上がりをもつ確 認は無い。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	砂・長 ○		
54	高环	脚底径 15.6 残高 14.2	2 方向に2段透し。 中央に2条の凹線。	⑨⑩ 回転ヘラケズリ 回転ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~3) ○		17
55	高环	脚底径(13.3) 残高 12.8	脚中位に回転2条。 2段の透し窓3方向。	回転ヨコナデ	ヨコナデ しばり底	砂・長(1~2) ○		
56	高环	残高 12.0	脚中位に2条の回転をなすみ 3方向に2段の透し窓。	回転ヨコナデ	ヨコナデ しばり底	石・長(1~2) ○		
57	高环	脚底径 15.2 残高 7.6	脚下部に1条の回転。 確認は無い。 3方向に透し窓。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	砂 ○		
58	高环	脚底径 14.8 残高 12.8	脚底に斜をもつ。 脚中位に2条の回転。	⑨⑩ カキ目 回転ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~5) ○		17
59	高环	口径(11.6) 残高 3.9	口縁部と底部との境に棱を有 する。	回転ヨコナデ ⑩ 回転ヘラケズリ%	回転ヨコナデ	石・長 ○		
60	高环	口径(11.2) 残高 3.0	腹び満み。 环部中央に1条の回転。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	石・長(1) ○		
61	高环	口径(9.8) 残高 3.6	环下部に刻文與点文。 3方向の透し窓。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~3) ○		17
62	高环	口径(12.1) 残高 13.6	口縁部斜面でわずかに外反す る。柱部に当輪が通る。	回転ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~2) △		
63	高环	脚底径(8.6) 残高 4.5	細い脚部。脚端部を擦でなが れ上方に彫刻。 环部内面に自然触。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~4) ○		
64	高环	脚底径 9.0 残高 5.6	脚端部近に1条の回転。 受け舟み。	⑨⑩ 回転ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~2) ○		17
65	壺	口径(12.3) 器高 17.2	脚部中位に1条の回転。 底部から胴部にカキ目。	⑪~⑬ ヨコナデ ⑭⑮ 回転カキ目ナデ ⑯ 回転ヘラケズリ	ヨコナデ 擦地痕	長(1~3) △		
66	壺	口径 12.8 残高 15.3	口縁部外側で尖り気味に丸 く、下方に肥厚される。	⑭~⑯ 回転ヨコナデ ⑮ 回転ヘラケズリ	ヨコナデ	石・長(1~5) ○		17
67	壺	脚径 20.2 残高 12.8	肩部底削。 底部から胴部にかけてカキ目。	⑩~頂⑦ 回転カキ目 ⑪~頂⑧ ヨコナデ ⑯ 回転ヘラケズリ	ヨコナデ ナデ	石・長 ○		

●表7 15号墳出土遺物觀察表〔3〕 土製品

品番	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
68	壺	口径(13.0) 基高 9.3	肩部に2条の凹線。 腹部に2条の凹線。	凹板ヨコナデ ⑩ 同軸ヘラケズリ	ヨコナデ	石・長(1~3) ○		
69	壺	口径 9.5 基高 19.8 最高 24.8	口縁部下に2条ずつの凹線。 内縁部に肩上がりの輪ぬ法刻 突起点々。	⑩ ヨコナデ ⑪~⑫ 肩セヘラケズリ	ヨコナデ	砂・長(1~3) ○	18	
70	壺	口径 7.3 基高 14.6	口縁部は夷り氣味に丸い。 肩平な体形。	⑬⑭ 凹板ヘラケズリ ⑮ ヘラケズリ ⑯⑰ 凹板ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~3) ○		18
71	壺	口径(26.0) 基高 9.6	口縁下部に3条の波状文。 肩部にカキ目。	⑯⑰ ヨコナデ ⑯ カキ目	ハケナデ	石・長(1~3) ○		18
72	壺	口径 12.0 基高 14.5	口縁部中位より口縁端部にかけて波状文。 底部に海泥状剥剝突出点々。	⑯⑭ ヨコナデ ⑯ ヘラケズリ→ナデ	ヨコナデ 工具痕	石・長(1~3) ○		18
73	提瓶	口径(6.6) 基高 17.8	底状の把手。 焼成時に土巻片付着。 自然縫。	⑭ ヨコナデ カキ目	ヨコナデ	長(1~4) ○		18

●表8 16号墳出土遺物觀察表〔1〕 土製品

番号	品種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
75	环壺	口径 13.0 基高 4.6	口縁部は直立気味に下がる。 尖井部にへら記号あり。	⑩ 凹板ヘラケズリ% 凹板ヨコナデ	凹板ヨコナデ 直縫ナデ	石・長(1~3) ○	へら記号	16
76	环壺	口径 14.7 基高 4.8	口縁部は直立気味に据する。 縫部は丸い。	⑩ 凹板ヘラケズリ% 凹板ヨコナデ	凹板ヨコナデ	長(1~3) ○		16
77	环壺	口径 14.7 基高 4.3	裏平な尖井部よりゆるやかな カーブを描いて縫部に続く。 口縁部は夷り氣味に丸い。	⑩ 凹板ヘラケズリ% 凹板ヨコナデ	凹板ヨコナデ 直縫ナデ	石・長(1~3) ○		16
78	环壺	口径 14.5 基高 3.8	口縁部は直立気味に下がる。 端部は夷り氣味に丸い。	⑩ 凹板ヘラケズリ% 凹板ヨコナデ	ヨコナデ 直縫ナデ	石・長(1~2) ○		16
79	环壺	口径 12.2 基高 4.3	内縫する短い立ち上がり。 底部にへら記号あり。	同軸ヨコナデ ⑩ 凹板ヘラケズリ%	凹板ヨコナデ 直縫ナデ	石・長(1~3) ○	へら記号	16
80	环壺	口径 13.0 基高 4.1	立ち上がりは内縫して直立氣 味に短く伸びる。 縫部は丸い。	同軸ヨコナデ ⑩ 同軸ヘラケズリ%	凹板ヨコナデ 直縫ナデ	石・長(1~3) ○		16
81	环壺	口径 12.8 基高 4.4	立ち上がりは夷り氣味に丸い。 焼け盛み。	同軸ヨコナデ ⑩ 同軸ヘラケズリ%	同軸ヨコナデ 直縫ナデ	石・長(1~2) ○		16
82	环壺	口径 12.3 基高 3.9	立ち上がりは短く内縫し縫部 は夷り氣味に丸い。	同軸ヨコナデ ⑩ 同軸ヘラケズリ%	同軸ヨコナデ 直縫ナデ	石・長(1~3) ○		16
83	环壺	口径 11.3 基高 4.6	直立する口縁部。口縁部は内 縫する。 底部は短く水平に伸びる。	同軸ヨコナデ ⑩ 同軸ヘラケズリ%	同軸ヨコナデ	夷(4~)・長(3) ○		16
84	高壺	口径(14.0) 基径(9.2) 基高 6.0	短く内縫する立ち上がりと受 部をもつ。	⑪⑫ 同軸ヘラケズリ% ⑯⑰ 同軸ヨコナデ	同軸ヨコナデ	砂 ○		16

●表9 16号墳出土遺物観察表〔2〕 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
85	甕	口径(17.0) 底高 6.2	口縁部強く肥厚されている。 底高 6.2	ヨコナデ 平行印き→カキ目	ヨコナデ 同心印文	石(1~2) △		16

●表10 17号墳出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
86	高环	脚底径14.2 底高 4.4	細部に凹面がみられる。	円軌ヨコナデ	ヨコナデ	長(1~6) ○		
87	甕	口径 11.0 底高 5.5	U縁部。	⑪ ヨコナデ	ヨコナデ	砂 ○		

●表11 18号墳出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
88	高环	脚底径17.5 底高 4.8	瘦い脚部。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石・長(1~2) △		
89	高环	脚底径 7.8	脚部に2条の凹面。	ヨコナデ	ヨコナデ しづり痕	砂・長 ○		
90	甕	底高 3.6	肩部に凹面と表上がりの筋面 状斜交点点。	円軌カキ目	ヨコナデ	石(1) ○		
91	甕	底高 10.0	平底風の底部。	圓軌カキ目 ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~6) △		
92	舟付 甕	脚底径14.1 底高 4.4	「ハ」字状に大きく開く瘦い 脚部。	ヨコナデ	ヨコナデ	石(1) ○		19

●表12 S D 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
94	脚付 広口 甕	脚底径13.9 底高 25.3	無頭と肩部に2条の凹面。 口縁部に波状。	⑩ ⑪ 口転カキ目 ⑫ ⑬ 口転ヘラケズリ ⑭ ⑮ 回転ヨコナデ	ヨコナデ ヘラケズリ ヨコナデ	石・長(1~5) ○		19

●表13 S K 6 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
95	高环	口径 14.2 底径 10.6 底高 11.8	環部に段をもち、口縁部は直立筋柱に立ち上がる。 水平に伸びる筋柱。	ヨコナデ ナデ、指擦痕 ヨコナデ	ヨコナデ ヘラケズリ ヨコナデ	密(石・長) ○		19
96	高环	口径 14.2 底径 10.6 底高 11.8	環部に段をもち、口縁部は直立筋柱に立ち上がる。 水平に伸びる筋柱。	ヨコナデ ナデ、指擦痕 ヨコナデ	ヨコナデ 磨滅のため不明 ヘラケズリ ヨコナデ	密(石・長) ○		19
97	甕	口径 9.4 底高 14.8	丸底の底部よりやや膨らむ 全体に上方に伸びる口跡品。	ヨコナデ タバケ(1cm/本) ハケ→ナデ	ヨコナデ ナデ 工芸痕	密 ○	出雲	19

●表14 9号墳出土遺物観察表（弥生土器）〔1〕 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
99	壺	口徑(19.6) 残高 5.8	口縁部は鉛張され下方に垂り出す。	磨滅のため不明	ナテ	石・長(1~4) ○		
100	壺	口徑(10.8) 残高 4.1	ゆるやかに折れ曲がる口縁部をもつ。	⑪ ヨコナデ ⑫ ハケ→ナデ	⑬ ヨコナデ ⑭ ナデ	石・長(1~3) ○		20
101	壺	底径(5.8) 残高 1.7	くびれのやや上げ瓶を呈する底部。	ヨコナデ つまみ <small>ながし</small> →ナデ	ナテ	石・長(1~4) ○		
102	壺	底径 5.4 残高 1.6	くびれの上げ瓶を呈する底部。	ナテ ヨコナデ	磨滅のため不明	石・長(1~4) ○		
103	壺	底径 4.4 残高 4.3	くびれてやや上げ瓶を呈する底部。	ナテ	ナテ	石・長(1~4) ○		20
104	壺	底径(5.0) 残高 2.3	やや上げ底の底部に施鉛痕あり。	ナデ つまみ出し	磨滅のため不明	石・長(1~3) ○		
105	壺	底径 2.3 残高 4.8	くびれの上げ底はつまみ出し ながらのナデ。	つまみ出し ナテ	ナテ	石・長(1~5) 金 ○		
106	壺	底径 5.8 残高 3.0	くびれのやや上げ瓶を呈する底部。	ナテ ヨコナデ	ナテ	石・長(1~4) ○		20
107	壺	底径 4.2 残高 6.8	平底の底部より外傾して立ち上がる。	タテハケ(8~10本/cm) ナテ	ナテ	石・長(1~4) ○		20
108	壺	底径(3.0) 残高 2.4	わずかに上げ底の底部。	ナテ	ナナデ 施鉛痕	石・長(1~2) ○		
109	ミニチュア	底径 11.6 残高 4.2	筒形容器のミニチュア品である。	ナテ	ナテ 施鉛痕	石・長(1) ○	黒斑	20
110	片	口徑(19.7) 残高 4.3	升り直げ口縁。 腹部内面に施鉛痕。	⑪ ハケ→ナデ ⑫ ヨコハケ(9本/cm)	⑬ ナデ ⑭ ヨコハケ(5本/cm)	石・長(1~4) ○		
111	鉢	口徑(19.4) 残高 7.5	折り重ね口縁。 腹部内面にゆるやかな模様。	⑪ ヨコナデ ⑫ タテハケ(6本/cm)	⑬ ヨコハケ→ナデ ⑭ ハケ(右下引8本/cm)	石・長(1~2) ○		20
112	鉢	底径 7.4 残高 3.1	くびれの上げ底。	ヨコナデ	ハケ→ナデ	石・長(1~4) ○		20
113	壺	口徑(14.4) 残高 4.3	「く」の字状に折れ曲がる口縁。 端部は丸い。	ハケ ナテ	ヨコハケ	石・長(1~2) ○		20
114	壺	口徑(11.2) 残高 2.7	口縁部裏面に円形凹板を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~4) ○		20
115	壺	口徑(13.5) 残高 5.6	ゆるやかに外反する口縁部。	⑪ ヨコハケ→ヨコナデ ⑫ タテハケ	⑬ ナデ ⑭ ヨコハケ→ナデ	石・長(1~4) ○		20

●表15 9号墳出土遺物観察表(弥生土器)[2] 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	備考	図版
				外 面	内 面			
116	壺	口径(28.4) 残高 2.4	口端部を上下に板張し端面に 凹部を3条造る。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~4) ○		20
117	壺	底径(11.4) 残高 5.5	底部に凸部をはりつけ口を 施す。	タテハケ(5~6本/cm)	磨滅のため明確でない がハケ見られる。	石・長(1~5) ○		
118	壺	口径(19.0) 残高 4.1	段をなしわずかに外反する口 縁部。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~2) ○		20
119	壺	口径(14.0) 残高 7.8	口縁部端部は内傾し直立状味 に立ち上がる。	⑪ 磨滅のため不明 ⑫ タテハケ(6本/cm)	⑬ ハケ→ナデ ⑭ ヨコハケ	石・長(1~3) ○		20
120	壺	口径(19.0) 残高 5.0	口縁部端部はわずかに内溝す る。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石・長(1~5) ○		
121	壺	口径(21.0) 残高 3.7	口縁部端部の残存。 口縁面にナデによる跡跡。	ヨコナデ	世継痕 ヨコナデ	石・長(1~4) ○		
122	壺	残高 6.7	口縁部端部が削落する。	⑮ ヨコナデ ⑯ ハケ→ナデ	⑪ ヨコナデ ⑯ ナデ	石・長(1~3) ○		
123	壺	残高 4.3	口縁部端部を欠失する。	タテハケ(5本/cm) +ヨコナデ	⑫ ヨコナデ ⑯ ヨコハケ(3本/cm)	石・長(1~3) ○		
124	壺	底径(7.0) 残高 3.6	平底をわずかにくびれる。	つまみだしなから ナデ	些細痕 あるいはナデ	石・長(1~3) ○		
125	壺	底径 7.5 残高 2.6	平底。	ハケ→ナデ	磨滅のため不明	石・長(1~3) ○		
126	壺	底径(5.8) 残高 2.7	平底。	ナデ	ナデ	石・長(1~3) ○		
127	壺	底径(8.5) 残高 3.6	くびれのやや上げ底の底部を 呈する。 外縁に擦離圧痕あり。	⑩ タテハケ(4本/cm) ⑪ ナデ	ハケ	石・長(1~5) ○		20
128	壺	底径(6.6) 残高 6.2	平底の底部内面に指壓圧痕あ り。	⑫ タテハケ ⑬ ナデ	ナデ	石・長(1~4) ○		
129	壺	底径(7.4) 残高 3.3	平底。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石・長(1~5) ○		
130	壺	底径 6.2 残高 5.9	平底。 内外面に指壓圧痕あり。	⑭ ハケ→ナデ ⑮ ヨコナデ→ナデ	世継痕	石・長(1~3) ○		
131	壺	底径(7.4) 残高 4.7	やや上げ底の底部を呈する。	⑯ タテハケ ⑰ ナデ	世継痕 ハケ	石・長(1~5) ○		
132	壺	底径 9.8 残高 3.9	丸みがあり突出する平底をも つ。	ヨコナデ ⑱ ナデ	世継痕 ナデ	石・長(1~4) ○		

●表16 9号墳出土遺物観察表(弥生土器)〔3〕 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
133	壺	底径 6.6 残高 2.6	平底の底部に凹面。 口縁部は粗面。	ハケ→ナテ	磨滅のため不明	石・長(1~3) ○	憑斑	
134	壺	底径(5.0) 残高 1.9	平底。	⑩ タテハケ(6~8本/cm) ⑪ ナテ	ナテ	石・長(1~4) ○	経ぬ	
135	壺	底径(6.5) 残高 4.8	丸みがあり突出する平底をもつ。	⑩ タテハケ(4本/cm) ⑪ ナテ	ナテ	長(1~5) ○		
136	高环	口径(20.8) 残高 3.8	外反する短い口縁部は粗面されている。 口縁下部には2条の回線。	ヨコナテ ヨコハケ(7本/cm)	ヨコナテ タテハケ(6~7本/cm)	石・長(1~3) ○		
137	高环	口径(25.4) 残高 3.6	外反する短い口縁部はやや粗く口縁部は「コ」字状を呈する。	ヨコナテ ハケ	ヨコナテ	石・長(1~4) ○		
138	高环	口径 6.3 残高 7.4	直立する太く瘦い柱頭。	ハケ→ミガキ	ナテ	石・長(1~2) ○		
139	高环	残高 8.7	光塗技法。	ハケ	ナテ	石・長(1~4) ○		
140	高环	残高 7.8	充填技法。 しばり瓶頭部。	タテハケ(9本/cm)	しばり底 ナテ	石・長(1~4) ○		
141	高环	残高 3.7	組合せ技法か。	ハケ→ナテ	ナテ	石・長(1~4) ○		
142	高环	残高 5.3	組合せ技法か。	ナテ ハケ→ミガキ	しばり底 ナテ	石・長(1~4) ○		
143	高环	口径 5.4 残高 6.3	脚部からの光塗技法。	タテハケ ヘラミガキ	ヨコナテ	石・長(1~4) 多 ○		
144	支脚	底径 13.4 残高 10.5	「ハ」の字形に聞く脚部は「コ」字状を呈する。	⑩ タテハケ(6本/cm上+下) ⑪ ヨコナテ	⑪ ナテ ⑫ ヨコハケ(5本/cm)	石・長(1~3) ○		
145	目	底径(4.8) 残高 1.4	回転赤切り。	⑪ ヨコナテ ⑫ 回転赤切り	ヨコナテ +ナテ	長(1) ○		
146	环	底径(7.0) 残高 2.1	ヘラ切りと思われる。	⑪ ヨコナテ ⑫ ナテ	ナテ	砂 ○		

●表17 11号墳出土遺物観察表(弥生土器) 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
147	碗	口径(10.7) 容高 5.8	丸味をもつ底部。 口縁部はナテにより外反する。	⑪ ヨコナテ ⑫ ナテ	⑪ ヨコナテ ⑫ ナテ	砂 △	想度	21
148	壺	口径 11.1 容高 5.2	丸味をもつ底部は凸凹が見られる。	⑪ ヨコナテ ⑫ ナテ	⑪ ヨコナテ ⑫ ナテ	砂 △	墨班	21

●表18 13号墳出土遺物観察表（弥生土器） 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		胎土焼成	備考	図版
				外面	内面			
149	甕	直径(6.9) 残高 5.3	厚い平底。 口縁部に凹部。	⑩ 施文のため不明 ⑪ ナテ	ナテ	石・長(1~3) ○		
150	甕	直径 5.0 残高 4.4	やや土付窓の連附。	⑩ ナテ・ヨコナデ ⑪ ナテ	施文のため不明	石・長(1~3) 多 ○		
151	高杯	残高 3.7	組合せ技法か。 しづら痕顕著。	ヘラミガキ	⑩ ナテ ⑪ しづら痕	石・長(1~3) ○		
152	陶	直径(7.6) 残高 2.5	高台付。 内面凹凸。	ヨコナデ	ヘラミガキ	砂 ○		

●表19 15号墳出土遺物観察表（弥生土器） 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		胎土焼成	備考	図版
				外面	内面			
153	甕	口径(31.2) 残高 4.8	大型甕の直脚甕。 口縁部は尖り茎跡に丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~4) ○		
154	甕	口径(30.0) 残高 4.8	「く」の字形に折れ曲がる口縁部。 瓶部内面に模様あり。	⑩ ヨコナデ ⑪ テハケ(8/cm)	ハケ→ナテ 施加痕	石・長(1~4) ○		
155	甕	直径(4.4) 残高 2.6	わざかにくびれる上げ底。	⑩ ハケ ⑪ ヨコナデ	施加痕 ヨコナデ	石・長(1~3) ○		
156	甕	直径(5.0) 残高 3.9	わざかに上げ底。	施文のため不明。	施文のため不明。	石・長(1~3) ○		
157	甕	口径(30.0) 残高 8.5	口縁部は内傾する。 口縁部に2条の溝跡。	⑩ テハケ(8~9本/cm) ⑪ テハケ(6~7本/cm)	⑩ ヨコナデ ヨコハケ(10本/cm) ⑪ ヨコハケ(10本/cm)	石・長(1~3) ○	21	
158	甕	直径 7.2 残高 7.0	平底の底部よりやや内溝気味 に立ち上かる。	⑩ テハケ(4本/cm) ⑪ ナテ	⑩ 仮ナテ ⑪ 施加痕	石・長(1~4) ○	20	
159	甕	直径(7.2) 残高 3.8	平底の底部より外傾する体部。	⑩ テハケ ⑪ ヨコナデ	ナテ	石・長(1~3) ○		
160	高杯	残高 5.5	充満技法。	ハケ→ヘラミガキ	⑩ ヘラミガキ ⑪ ナテ	石・長(1~2) ○		
161	高杯	残高 7.0	組合せ技法か。	⑩ ヘラミガキ ⑪ ナテ	⑩ ヘラミガキ ⑪ ヨコナデ	石・長(1) ○		
162	高杯	残高 3.9	組合せ技法か。	タテハケ(10~12本/cm)	ナテ	石・長(1~3) ○		
163	高杯	残高 3.2	組合せ技法か。	ナテ	⑩ ナテ ⑪ ヨコナデ	砂 △		

●表20 18号墳出土遺物観察表（弥生土器） 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
164	壺	底径 6.2 残高 3.5	平底の幅円形の底部。 ナテ		磨滅のため不明	石・長(1~3) ○		
165	甌	底径(8.4) 残高 2.8	やや上げ唇の底部。 磨滅のため不明		磨滅のため不明	石・長(1~2) ○		
166	壺	底径(7.9) 残高 2.3	平底で厚い底部。 ⑩ ヘラミガキ ⑩ ナテ		ハケ(5本/cm)	石・長(1~2) ○		
167	高杯	口徑(21.5) 残高 3.2	口縁部は外反する。 磨滅のため不明		磨滅のため不明	石・長(1~5) 多 ○		
168	高杯	口径(15.2) 残高 6.5	「ハ」の字形に聞く鉛錠。 円孔を 6ヶ所に穿つ。 ⑩ ナテ ⑩ ヨコナテ	⑩ ヘラケズリ ⑩ ヨコナテ		石・長(1~3) 多 ○		21

●表21 17号墳出土遺物観察表（弥生土器） 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
169	壺	残高 2.7	口縁部に不明瞭な目錠が3 本ある。	タテハケ(5本/cm)	ヨコハケ(5本/cm) →ヨコナテ	石・長(1~2) ○		
170	高杯	残高 4.3	組合せ技法。	ナテ	ナテ	石・長(1~2) ○		

●表22 18号墳出土遺物観察表（弥生土器） 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
171	壺	底径(7.2) 残高 5.2	下底の厚い底部。 磨滅のため不明	ナテ		石・長(1~3) ○		
172	甌	底径(9.4) 残高 2.7	平底。	ナテ	ナテ	石・長(1~3) ○		
173	壺	口徑(29.2) 残高 2.8	口縁部に粗鋸 3 条が延る。 ヨコナテ タテハケ	ヨコナテ タテハケ		石・長(1~4) ○		
174	高杯	残高 3.1	丸環技法。	ヨコナテ	ナテ	石・長(1~2) ○		
175	器台	口径(27.0)	脇部に凹孔あり。 脇部上下に 2 条ずつの凹槽が ある。	タテハケ(6本/cm) →ヘラミガキ	ヨコハケ(6~10本/cm) →ナテ	石・長(1~3) 金 ○	粗粒	
176	器台	口径 13.3 残高 15.5	脇部上下に 2 条ずつの凹槽が ある。	ヨコナテ ナテ	ヨコナテ ナテ	石・長(1~2) △		21

—凡例—

遺物観察表

(1)以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。

(2)各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名稱を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1～4)多→「1～4 mm 大の石英・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

東山古墳群

—5次調査—

第Ⅳ章 東山古墳群5次調査

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1991(平成3)年9月21日、松山市都市整備部公園緑地課より松山市東石井町乙39番地1他における星が岡公園整備事業に先立って、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『118 東山繩文・弥生遺物包含地 東山古墳群』内に所在しており、このことを受けて当該地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認するため、1991年12月26日から同年2月4日の間、文化教育課は6本のトレンチ溝を設定し試掘調査を実施した。その結果、T-2, 3, 4のトレンチより弥生土器の壺片、須恵器の壺・坪身片、土師器の小形壺片など多数の遺物を出土し、また古墳の周溝と思われる溝状遺構や石室を覆った版築も確認された。この結果を受け、文化教育課と松山市都市整備部公園緑地課の二者は、遺跡の取り扱いについての協議を行い、星が岡公園整備事業に伴って失われる遺構について記録保存のため発掘調査を発掘することとなった。発掘調査は、文化教育課の指導のもと、財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが主体となり、公園緑地課の協力のもと1992年2月5日より開始された。

(2) 調査組織

調査地 松山市東石井町乙39番地1他

遺跡名 東山古墳群5次調査

調査期間 屋外調査 1991(平成3)年12月26日～1992年3月31日

調査面積 625m²

調査委託 松山市都市整備部公園緑地課

調査担当 調査主任 田城 武志

調査員 高尾 和長

調査作業員 山邊 進也・岩本 憲・志賀 夏行・原田 美則・重松 恒彦・

西田 寛一・相原 功・印中 煉・田中 国広・松友 利夫・

二宮 和見・宮本 健吉・仙波 千秋・仙波ミリ子・金子 育代・

高尾 久子 ほか

2. 調査の記録

[1] 調査の概要

本調査は、公園整備事業の一環として東山古墳群の丘陵地内に園路新設工事に先立つ事前調査として実施した。試掘調査の時点で、埋蔵文化財保護の観点から墳丘が遺存している箇所をできる限り避けて新設園路敷設計画を進めることについての協議を公園緑地課を行い、園路幅3m、延長約200mの調査区を設定した。

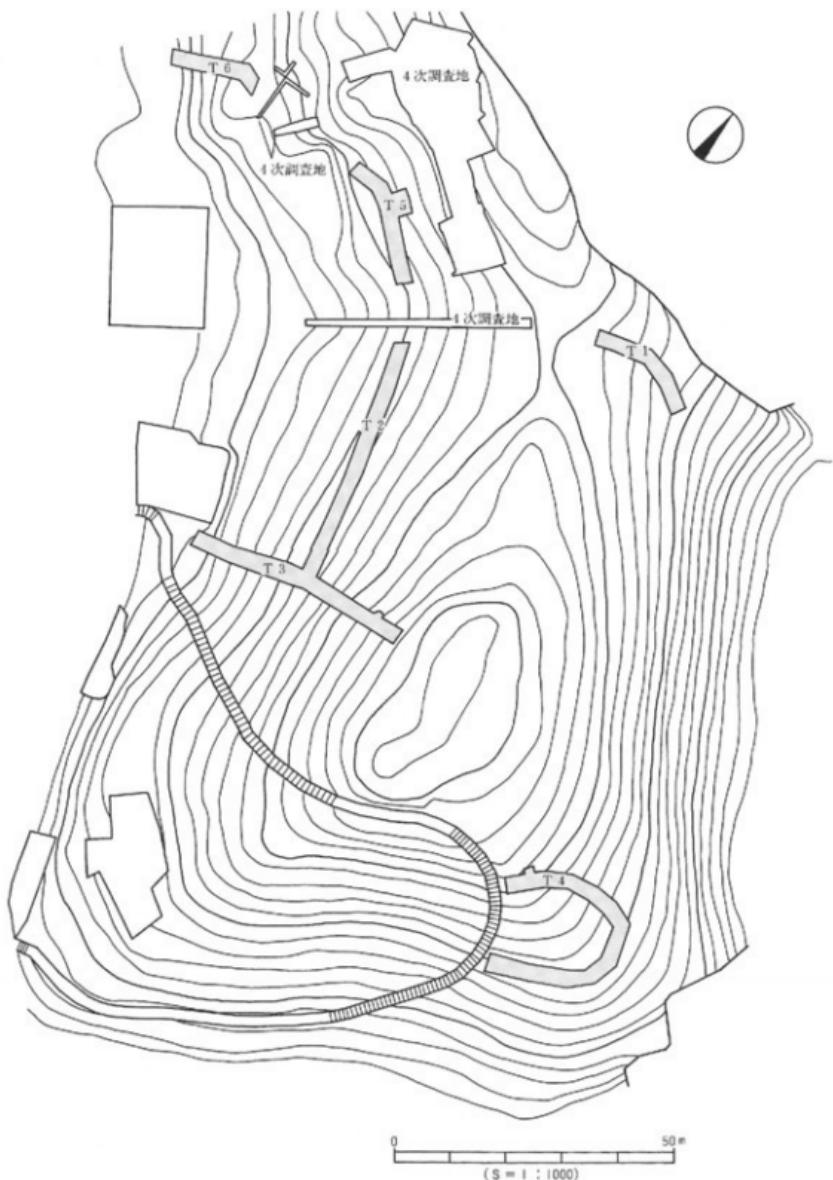
調査は、園路敷設計画に沿って6区画に分割し（第48図）、調査区及び墳丘周辺の樹木の伐採、現況地形測量、調査区周辺の古墳遺存状況、古墳主軸の設定、墳丘トレント削除、主体部石室の検出、周溝・祭祀遺構・土壙墓などの検出、写真撮影・実測作業などを順次行った。

伐採作業から表土掘削作業の時点において、T-1から溝状遺構2条、T-2から溝状遺構1条、T-3からは石室2基（20・21号墳）と溝状遺構2条、T-4から祭祀遺構と思われる土器の一群と鉄器や版築を確認、T-5から石室1基（19号墳）とそれに伴う周溝の一部、T-6から溝状遺構2条をそれぞれ検出した。そこで、19号墳・20号墳・21号墳、それぞれの方針、発掘方法などを把握するために任意のトレントを設定し、土層断面を確認してのち調査に入った。

現況地形測量と地山成形面測量においては、墳丘の遺存状況と旧地形の把握を主目的として、調査区全域にわたって20cm毎の等高線を測り、微地形の復元に努めた。また、調査区の幅が3mとなっているために19号墳などの様に石室が調査区外へ延びている場合、松山市の協力を得て一部拡張し、全容を把握する方法を講じることができた。19号墳における墳丘盛土の堆積状況を観察するためのトレントは、石室主軸（東西）方向とそれに直交する南北軸を主体部中心で設定し、土層断面図を作成した。

調査区は、4次調査時と同様、近現代の開墾行為や自然による土砂の流失、また桜、櫻の木などの樹木の根幹などによって石室をはじめとする多くの遺構は破壊されていた。

T-4の南東部からは、版築の遺存状態から未盗掘と思われる石室2基を確認したが、調査日程の都合と調査区外へほとんどの遺構が延びていたため、本格的な調査には至らなかった。今後の調査を期待したい。



第48図 調査地位置図

〔2〕19号墳

1) 墳丘

19号墳は、東山古墳群のほぼ中央にあって丘陵部の西緩傾斜面上に立地し、南南西方向に開口する石室を構築したものである。地山成形作業は石室南部の溝の掘削と右室基底面の整地にみられる。周溝は一部分を検出したのみであった。その幅3~5mを測る。基底面は平坦ではあるが、南方にゆくに従って緩やかに傾斜する。標高は37mを測る。

墳丘は盜掘や開墾行為による削平のため、遺存状況が極めて悪く、墳丘中央部の半分以上が攤乱されている。墳丘は、石室の墓壇に腰石を据えたのち、壁体を構築しながら盛土をしたものと考えられる。壁石の裏込め部分には版築が遺存しており、特に東壁の裏込めにおいては版築の明確な層序を確認することができた。墳丘の平面形は、部分的に検出された東西の2条の溝を19号墳の周溝と考えた場合、直径が約20m前後を測る東山古墳群内では大きい部類の円墳と推測できる。

2) 石室(第49図~52図)

本墳の埋葬施設の主軸はN27°30'Eをとり、南南西方向に開口する単室の両袖型横穴式石室である。石室は天井部と腰石の上部、そして羨道部のほとんどの石材を欠失している。

石室は、墓壇の内側に構築され、羨道部の南端は一段下がり調査区外へと続き、羨道については調査区外のため確認できなかった。石室は、長方形の玄室を有し、玄室の長軸部分にやや細まった羨道が連結しており、左壁で5.6m、右壁で5.5mを測る。石材には花崗岩を用いる。

玄室は、奥壁幅1.3m、玄門幅1.25m、左壁3.8m、右壁3.75mを測る。壁体は幅30~90cm、高さ30~50cm程度の塊石を立てて腰石としている。奥壁には2石、両側壁にはそれぞれ6石の腰石を使用する。腰石より上は10~40cm幅の板状塊石を持ち送りながら積み上げている。天井石は欠失しているが、奥壁と墳丘の遺存状況から推測して奥壁には更に1~2段の石が積まれていたものと考えられる。それから推定される玄室高は1.5m前後と思われる。

玄門部には石材が遺存しておらず詳細は不明であるが、腰石を抜き取ったと思われる痕跡を検出することができた。それによれば玄門は両袖で、袖石幅が左は約50cm、右は約60cmを測り、玄門部の幅は95cmである。

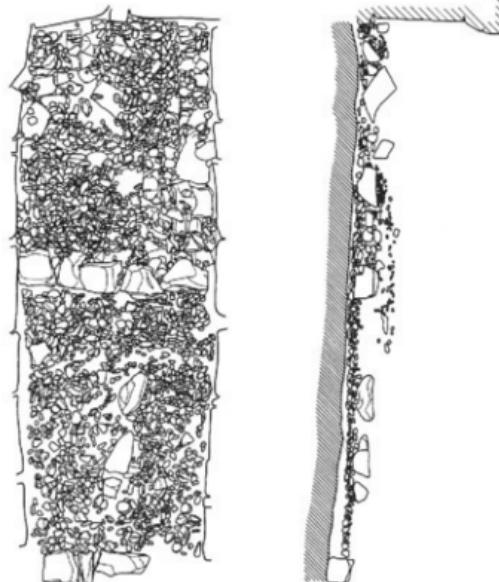
床面は和泉砂岩質の地山を削って平坦面を造り、玄室北半分に20~40cm大の塊石を敷き、その上に5~20cm大の玉石を敷き詰めている。玄門側の南半分にも5~20cm大の玉石を敷き詰め、玄門部から1.86mの地点で20cm程の段になっている。塊石、玉石とも比較的遺存状態は良好であった。

羨道部は、すべての石材を失っているが、腰石を抜き取った痕跡を検出したことで、平面

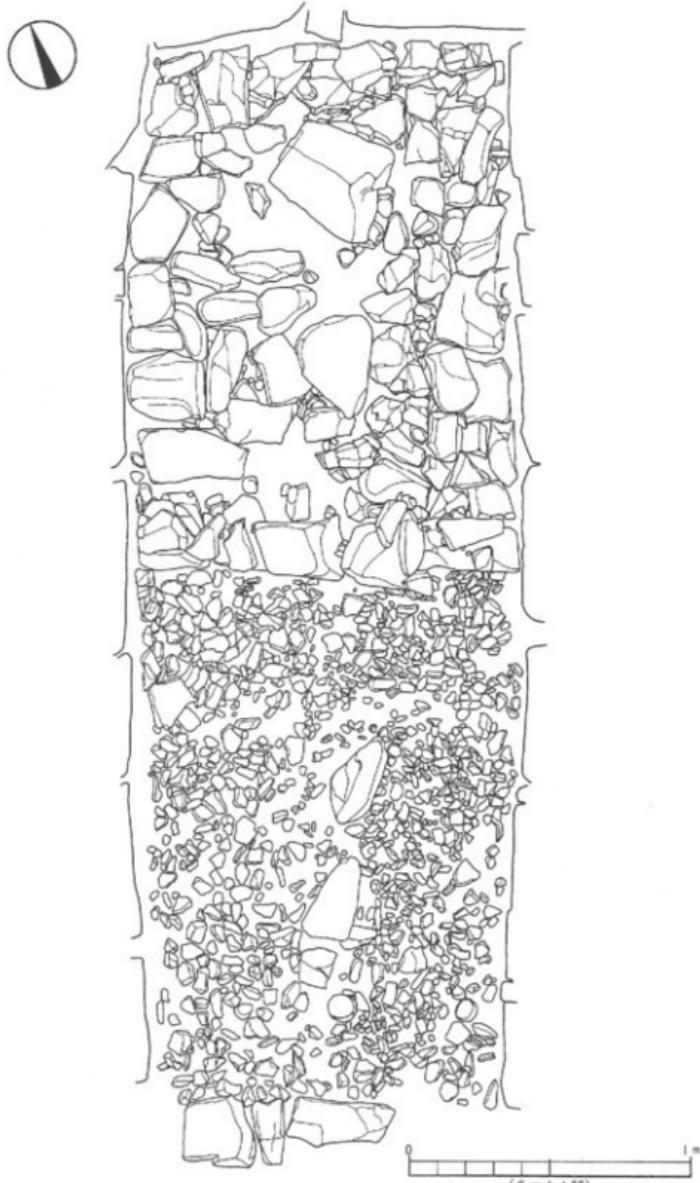
37.00 m



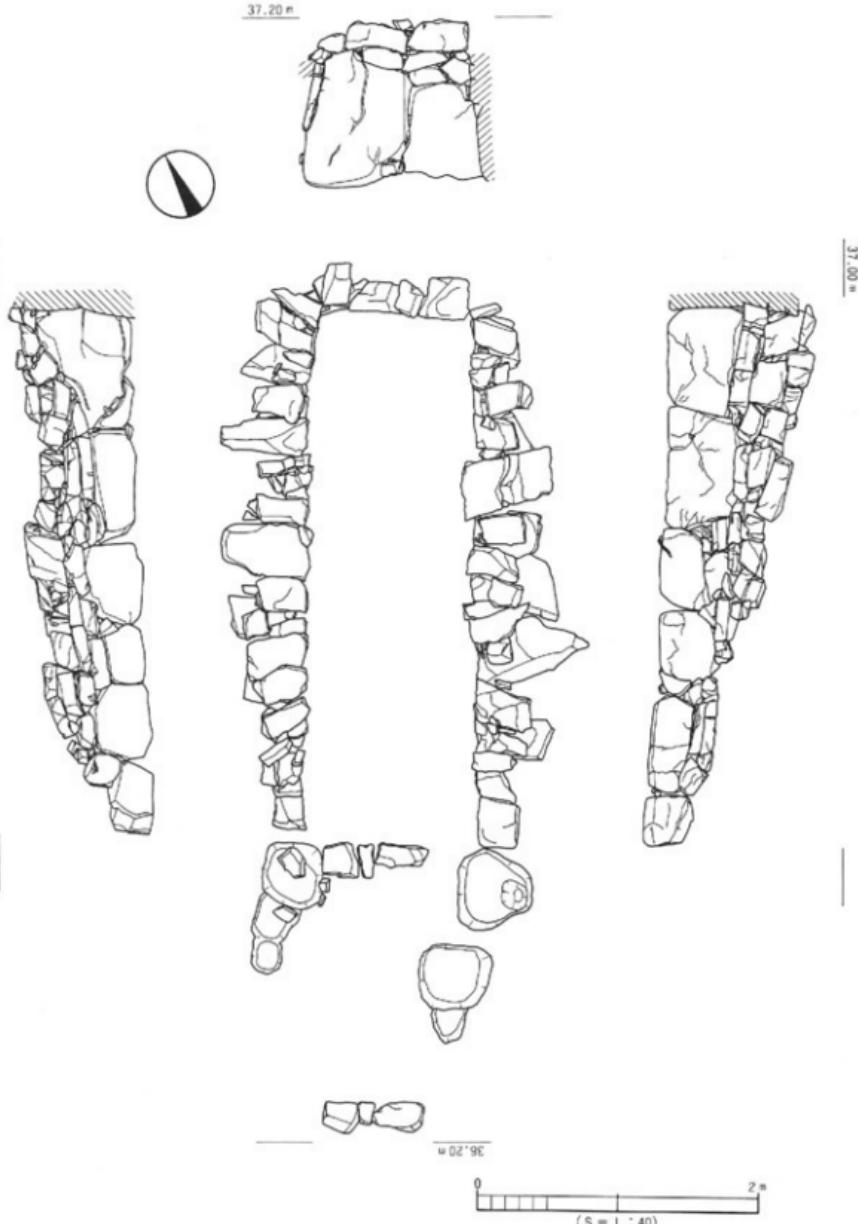
37.00 m



第49図 19号填石室平面及び断面図



第50図 19号墳石室平面図



第51図 19号墳石室平面及び展開図

形を確認することができた。それから推察して、羨道は玄室長軸に対して、やや西方向へ曲っており、調査区外へと延びている。羨道幅は1mを測り、やや広がりながら開口する。

墓壙の、地山整地面は北から南に緩傾斜しており、墓壙はその傾斜に直交して掘り込まれている。調査工程の都合上、墓壙全体を確認するまでには至らず、部分的な土層の検出のみで終ったのは残念である。ただ、墓壙の幅については玄室奥壁より1.8m南の地点で、3.6mを測り、深さも40cmあることを確認した。

3) 出土遺物(第53~55図)

出土状況 石室は撲壁上部半分以上が取り去られ、玄室内の遺物も散乱していることから盗掘を受けたものと考えられる。遺物は破碎されたものが多く、原位置を保っているものはほとんどないと考えられる。玄室からは須恵器の环身3点・环蓋2点・碗1点・台付き碗1点・高环1点・耳環3点・小型勾玉1点・管玉2点、ガラス小玉28点などが出上したが、他の施設からは須恵器碎片ばかりしか検出されなかった。

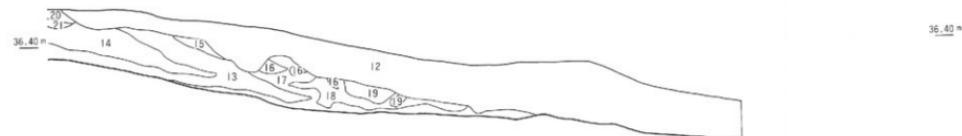
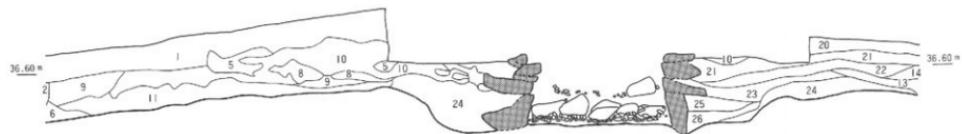
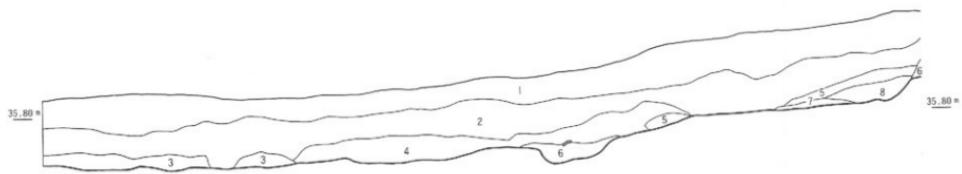
玄室内出土状況は第53図のとおりである。

出土遺物

須恵器(第54図)

蓋環 (180~184) 180は口径13.0cm、器高3.7cmを測る完形品である。緩やかな曲線を描く天井部に、やや開き気味の口縁部、口端部は尖り気味に丸く、天井部のヘラ削りは口縁部手前まで行なわれている。天井部内面に不定方向のナデが施されている。體輪回転は時計まわりである。181は口径10.0cm、器高3.1cmを測る並の蓋の完形品である。緩やかに丸い天井部に直立気味に接する口縁部、口端部は段をなし丸く仕上げられている。天井部に回転ヘラ削り、その他の部位には横ナデが施されている。182、口径12.4cm、器高3.7cmを測る环身の完形品である。水平気味に短く外上方に伸びる受部端部は尖り気味に丸い、短く内傾する立ち上がりも端部は丸く、底部に回転ヘラ削り、その他の内外面に横ナデ調整が施されている。183、口径10.8cm、器高3.3cmを測るほぼ完形の环身である。水平に短く伸びる受部は尖り気味に丸く、立ち上がりは内傾する短い立ち上がりで、底部に回転ヘラ削り、底部内面に不定方向のナデが行なわれている。184口径11.2cm、器高4.0cmを測る。扁平な底部に短く外上方に丸く伸びる短い受部と内傾する低い立ち上がりをもつ。底部2/3に回転ヘラ削り、その他の内外面に横ナデ調整が施される。

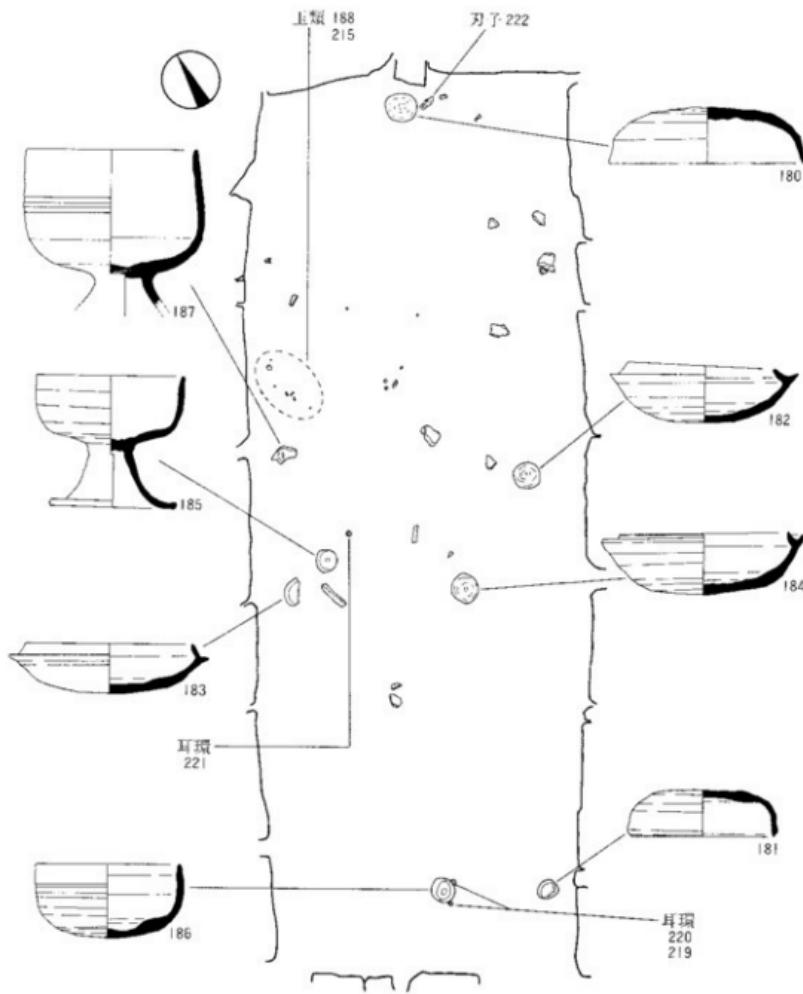
高环 (185) 口径9.6cm、底径8.2cm、器高8.8cmを測る完形品である。环部の底部と体部の境界はわずかに丸みをもち、口縁部はやや内湾する。脚部は外反し端部付近で外方へ屈曲する。



- | | | |
|-----------|--------------------|--------------------|
| 1. 淡色土 | 10. 淡褐色土 + 淡色土 | 19. 浅黄色土 |
| 2. 明褐色土 A | 11. 黄褐色土 | 20. 淡黄褐色土 |
| 3. 黄褐色土 A | 12. にじみ黄褐色土 A | 21. 黄褐色土 (带灰黄色土混) |
| 4. 棕色土 | 13. 棕褐色土 (褐色土上层) | 22. 淡棕色土 |
| 5. 深褐色土 A | 14. 深褐色土 (褐色土上层) | 23. にじみ黄褐色土 B |
| 6. 明褐色土 B | 15. 深褐色土 (褐色土混) | 24. にじみ褐色土 |
| 7. 明褐色土 C | 16. にじみ黄褐色土 | 25. にじみ黄色土 |
| 8. 黄褐色土 A | 17. 褐色土 | 26. にじみ黄褐色土 (褐色土混) |
| 9. 棕色土 B | 18. にじみ黄褐色土 (褐色土混) | |

0
2 m
(S = 1 : 40)

第52図 19号墳石室及びT5土層断面図



第53圖 19號填石室內遺物出土狀況圖

椀（186） 口径9.4cm、器高4.8cmを測る完形品である。丸みを帯びた平底から内湾した後ほぼ直立し、口縁端部は尖り気味に丸い。体部中位に2条の凹線が巡り、調整は底部に回転ヘラ削りが施されている。

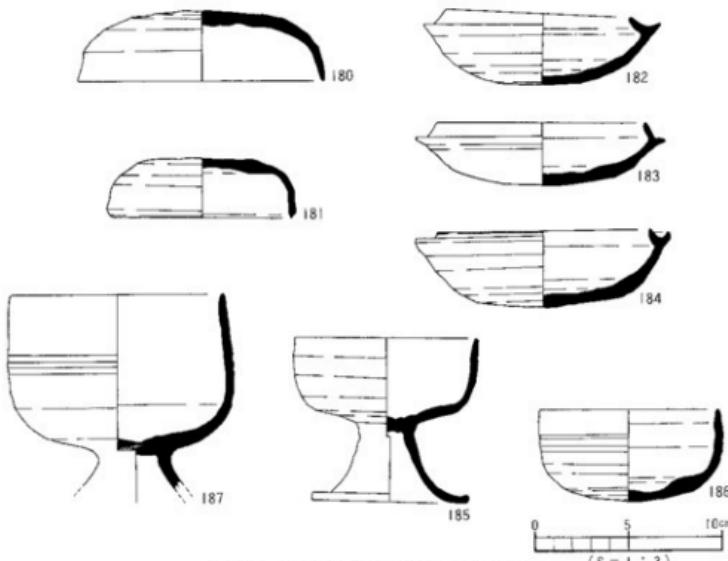
古付椀（187） 椭部口径11.2cm、器高8.5cm、脚部は据部を欠失しており残高2.0cmを測る。やや内傾気味に直立する口縁部、口端部は尖り気味に丸く口縁部中位に2条の凹線が巡り、脚部は「ハ」字状に開くものと思われる。調整は底部に回転ヘラ削り、その他に回転横ナデが施される。

金属器（第55図）

刀（222） 刀の茎の部分と思われ残存長8.8cm、最大幅2.2cm、厚さ1.1cmを測る。上部に木質の残存が認められる。

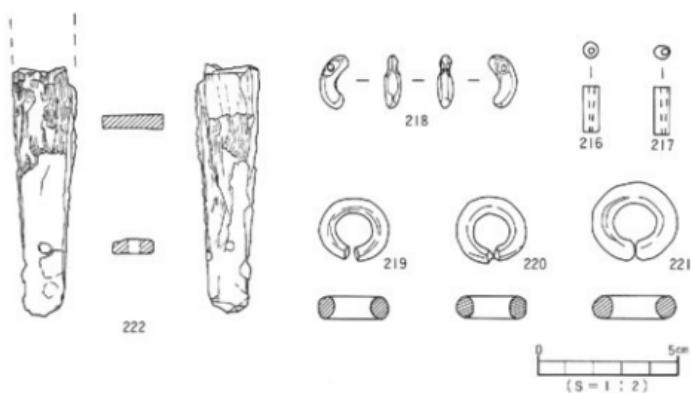
装身具（第55図）

玉（188～218） 188～215がガラス製の小玉、丸玉で30点出土している。188～196は不透明な緑色、197～201が黄色、202～213が青色、214は水色、215が赤茶色である。216、217は管玉、216は直径5.5mm、長さ16.0mm、孔径0.5～2.0mmを測り、217は直径5.5mm、長



第54図 19号墳石室内出土遺物実測図(1)

188	189	190	191	192	193	194
195	196	197	198	199	200	201
202	203	204	205	206	207	208
209	210	211	212	213	214	215



第55圖 19號墳石室內出土遺物實測圖(2)

さ17.0mm、孔径1.1~2.8mmとはほぼ同法量で色調は暗緑色の碧玉製である。218は全長19.0mm、孔径2.0mmを測る濃い緑色の石製のまが玉である。孔穿は両側から行なわれている。

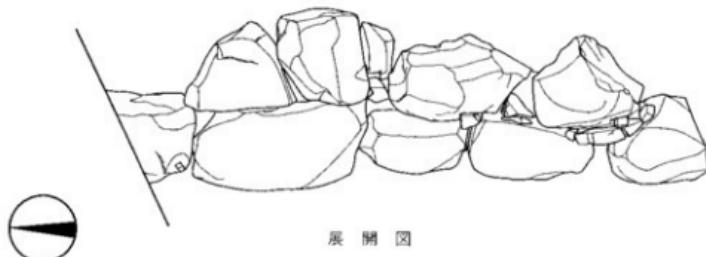
耳環（219~221） 219は外径2.40cm、内径1.34cm、220は外径2.43cm、内径1.30cmと近似した法量を示しセットになるものと思われる。221は外径3.10cm、内径1.55cmと219、220よりも大きい法量で断面は円形である。

〔3〕20号墳

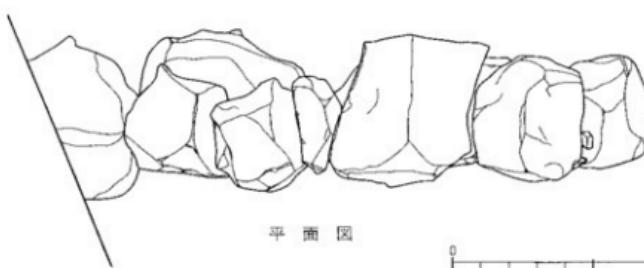
1) 墳丘

20号墳は、東山古墳群の南西部に位置し、西丘陵の傾斜面上に立地する。標高は33.2mを測る。墳丘は近現代の開墾行為によって削平され、石室も遺存状況は非常に悪い。北に高く、南に低くなっている墳形から、南側に開口する石室を構築したものと推される。周溝は石室東部に溝を検出したが、他の遺構との切り合いや開墾などによって判然とはしなかった。

33.80m



展開図



第56図 20号墳石室平面及び展開図

墳丘の平面形は、丘陵上部の東方に残る溝を周溝とした場合、直径が約10m前後を測る円墳と推測できるが、検出が石室にしても、周溝にしても部分的であるため今後の調査に寄るものとする。

2) 石室(第56図)

本墳の埋葬施設の主軸はN2°Wをとる横穴式石室と考えられる。石室は、ほとんどの石材を欠失している。

石室は、墓壙の内側に構築され、北方の調査区外へと続く。石室は右壁側の石材のみを残し、左壁側は腰石の抜き跡痕を検出しただけであった。なお、腰石の抜き跡痕は遺存状態が良くなく測量には至らなかった。床面は、和泉砂岩質の地山を整形し、平坦面を形成している。石材には花崗岩質のものを用いる。

以上のような状態から、検出された石組が玄室なのか、羨道部なのか判然とせず、今後の調査に期待するものである。

主体部内出土遺物

玉(246) 敷石上出土の半透明な緑色のガラス製の丸玉であり径10.0mm、孔径2.0mmを測る。

〔4〕21号墳

1) 墳丘

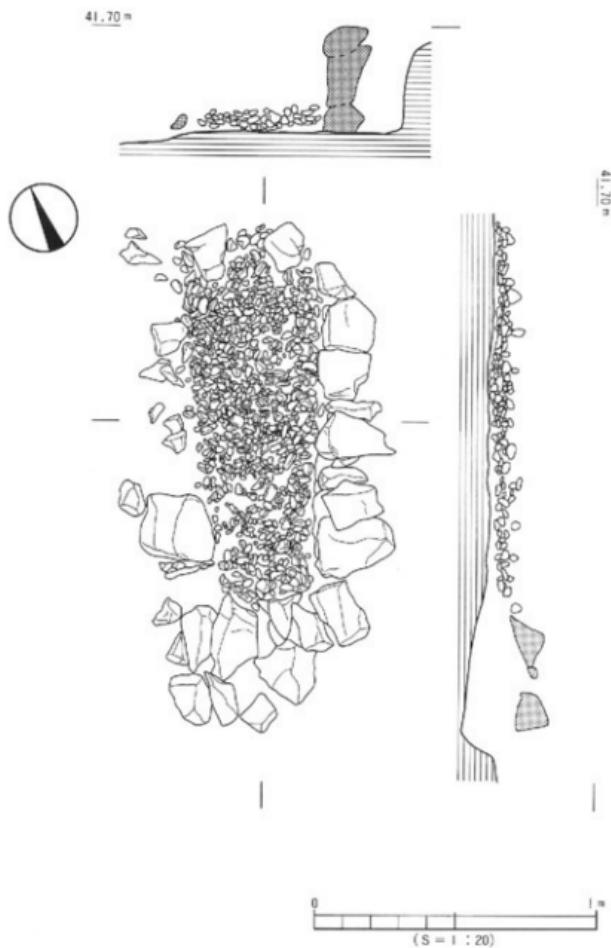
21号墳は、東山古墳群の南部にある山頂より西方15mの地点に位置し、西丘陵の比較的急傾斜面上の標高は41.4mに立地する。墳丘は近現代の開耕行為によって削平され、石室も遺存状況は非常に悪い。北に高く、南に低くなっている現地形で、石室の遺存状況から北側に開口する横穴式石室を構築したものと推されるが、北側は調査区外へ延び、南側は急傾斜のため岩盤が露出しているため、詳細は不明である。周溝は石室東部に段カットされた遺構を部分的に検出したが、判然とはしなかった。

墳丘の平面形は、上記のような状況であるために不明である。

2) 石室(第57・58図)

本墳の埋葬施設の主軸はN24°45'Wをとる横穴式石室と考えられる。石室は、腰石以外のほとんどの石材を欠失している。

石室は、墓壙の内側に構築され、北方の調査区外へと続くが一部拡張によって玄室のみの検出が可能となった。玄室は東壁が2~3段、西壁が1段の石材を遺存するのみであった。



第57図 21号墳石室平面及び断面図(1)



第58図 21号墳石室平面及び断面図(2)

床面は、和泉砂岩質の地山を整形して平坦面を形成し、その上に3~5cm大の瓦石を敷き詰めている。玄宝石材には花崗岩質を用いている。

玄室は、北壁幅0.5m、南壁幅0.4m、東壁1.2m、西壁1.15m前後を測る。壁体は幅20~30cm、高さ10~20cm程度の塊石を立てて腰石としている。

[5] その他の遺構と遺物

本調査は、幅3m、全長200mというトレンチ状の調査区であるため調査区をT1~6区に区割りして行った。前項までに記述した遺構・遺物以外にも貴重な資料が検出されており、以下トレンチ毎に記述する。

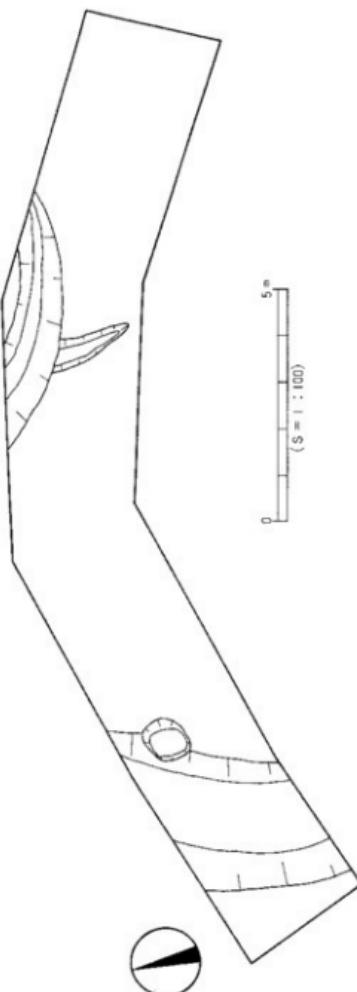
1) T 1 区 (第19・60図)

当古墳群丘陵のはば中央の東斜面にあり、西方頂上から東方麓へ向けてのトレンチ溝である。比較的緩斜面であるため、遺構の遺存状況は良好で、樹木による搅乱以外、遺構内の土層は安定していた。検出された遺構は、溝状遺構2条、柱穴1基であった。規模は、西方の溝の幅3.2m、深さ35cm、東方の溝の幅1.2m、深さ55cmであった。

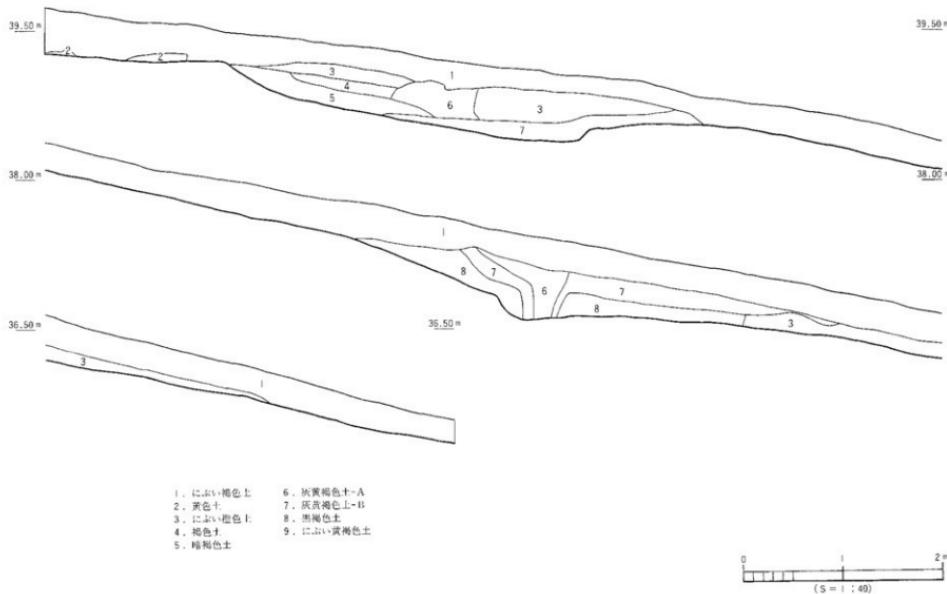
出土遺物

須恵器 (第68図)

环蓋 (240・241) 240は口径12.6cm、器高3.4cmを測る。水平な天井部に宝珠状のつまみが付く天井部より、屈曲するように口縁部につづき口端部は丸く、かえりは短く内傾し口縁部よりは下がらない。241は中央部がやや凹む扁平なつまみ部の小片である。



第59図 T 1 平面図



第60図 T-I 土層断面図

2) T 2 区 (第61・63図)

古墳群丘陵のはば中央の西斜面にあり、北方中腹から南方中腹へ向けてのトレンチ溝である。緩斜面上にあり、調査区南部から周溝とみられる溝状遺構が検出された。この溝は、位置的にみて西部に確認されている20号墳の周溝と考えられるが、中間点未調査のため判然としない。

出土遺物

弥生土器 (第78図)

甕 (248～250) 全て底部片。248、249は平底、259はわずかに上げ底である。

壺 (251) 口縁部片、口縁端部を上部に拡張し端面に凹線を3条巡らす。

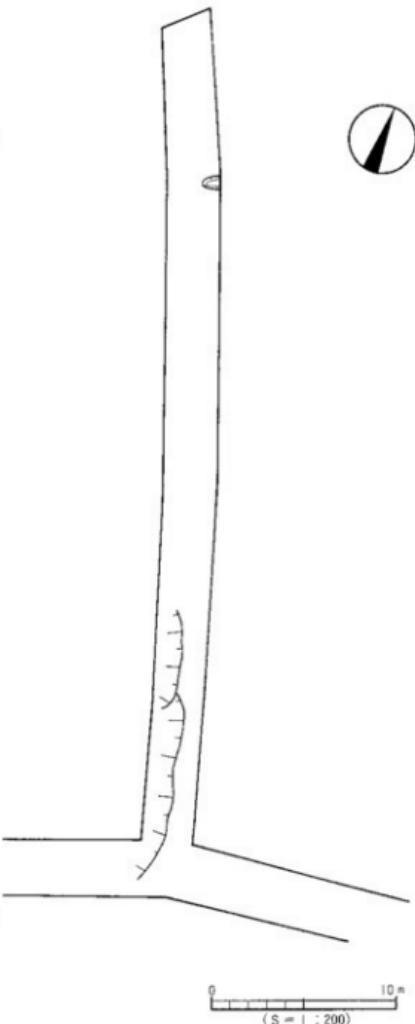
高环 (252) 环部の口縁部片、口縁手前で上方に屈曲し外反する、屈曲部と口縁部端面に2条づつの凹線が巡る。

勾玉 (253) 調査区北側の擾乱中からの出土である。全長3.40cm、厚さ0.95cm、孔径0.1～0.4cmを測る。出土時は透明に近い白色であったが取り上げ後には薄茶色に変色していた。

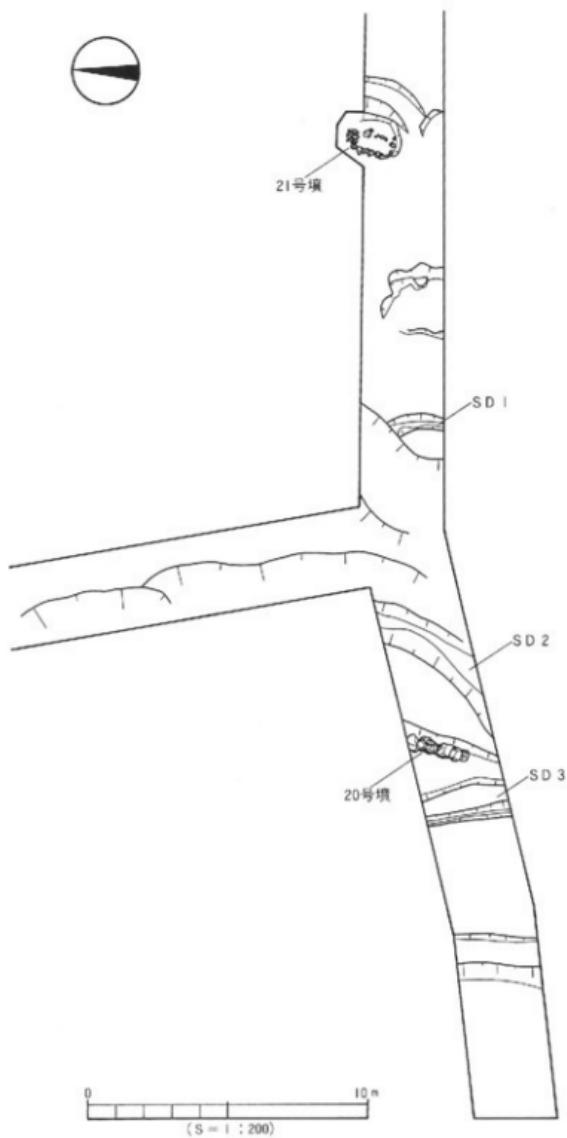
3) T 3 区 (第64・65図)

古墳群丘陵のはば中央の西斜面にあり、東方頂上から西方麓へ向けてのトレンチ溝である。頂上から中腹まではやや急傾斜地で、それより下は緩斜面である。調査区内からは、溝状遺構4条、性格不明遺構1基を検出した。

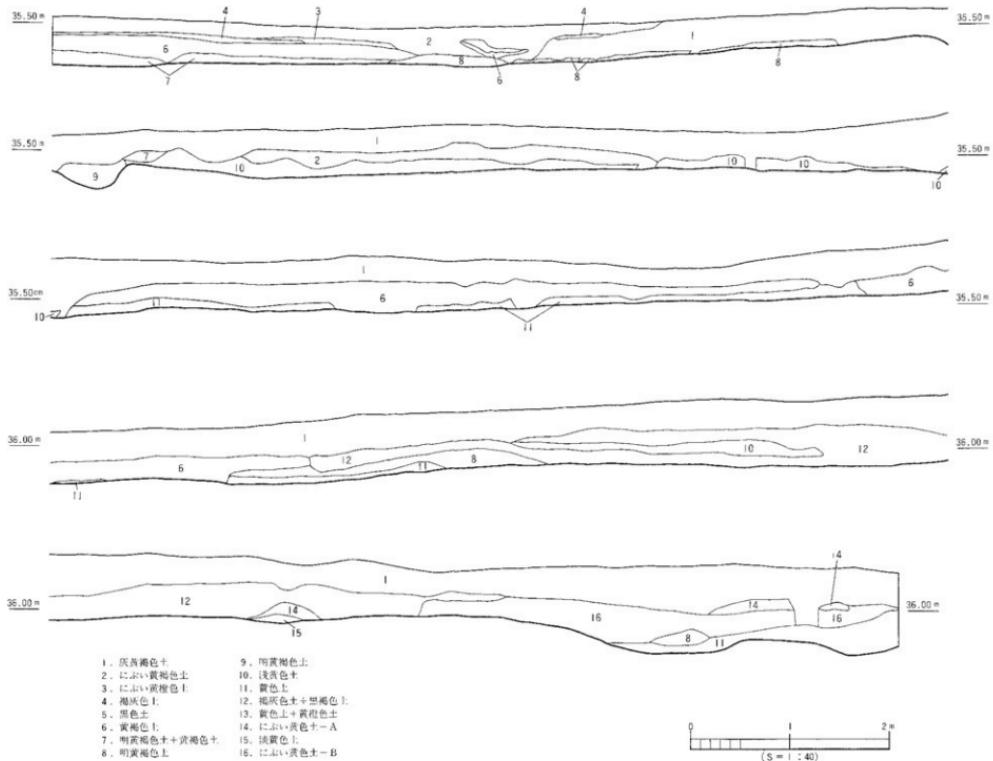
S D 2は、T 2より検出されたS D 1と関連するものと思われ、幅1.5m、深さ15cmを測り、20号墳の周溝と推される。S D 3からは弥生時代後期の壺(図-262)、小型甕(図-263)を出土している。溝内の埋土は黒色



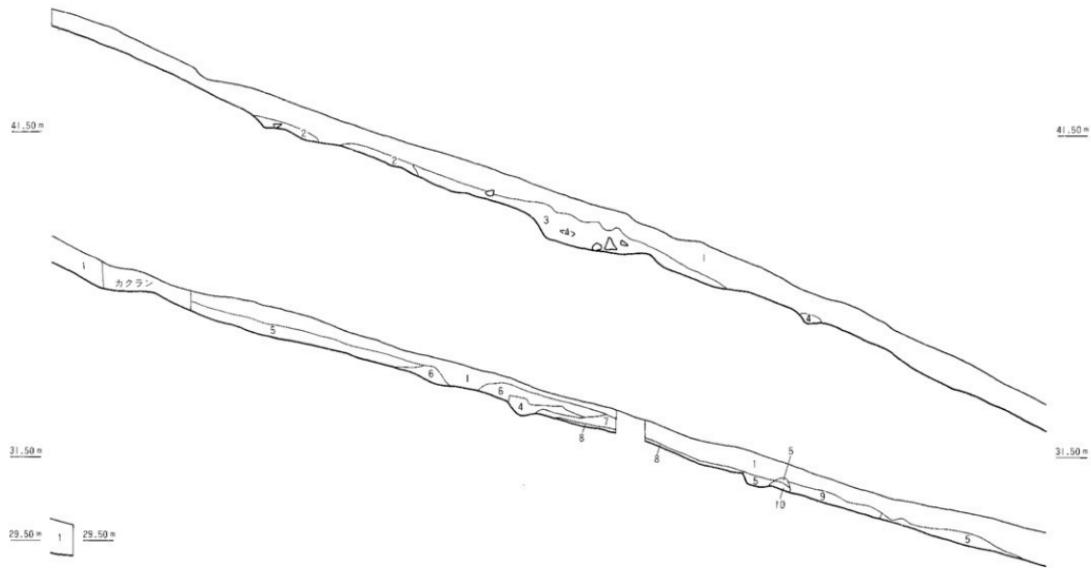
第61図 T 2 平面図



第62図 T 3 平面図



第63図 T2 土層断面図



第64図 T 3 土層断面図



土で、規模は幅0.7m、深さ30cmを測る。SX 1については、2m四方に和泉砂岩質の地山を削って成形した痕跡が見られ、3~5cm大の玉石が周辺から検出されてたことなどから石室の主体部と考えられるが、削平が激しく不明造構とした。そこから2個一組の円孔を2ヵ所に施す土師器の壺を出土している。

出土遺物

須恵器（第68図）

壺（242）丸底の底部片である。

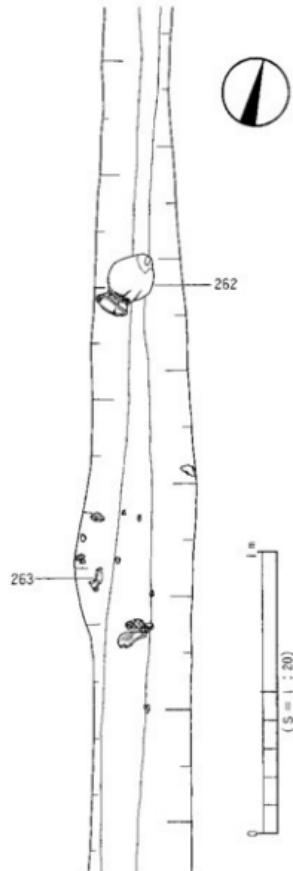
高环（243・244）243は口径12.3cm、脚底径9.3cm、器高10.5cmを測る。水平な环底部より外傾して開き、口端部手前でわずかに外反する口端部は尖り気味に丸い、脚部は短く裾部手前で聞く中位に2条の凹線を有し裾端面に凹面をなす。244は底径13.3cm、脚高10.6cmを測る脚部である。「ハ」字形に開き裾部を上方に丸く肥厚させ裾端面に浅い凹面をなし、脚中位や上方に2条の凹線、裾部手前に1条の凹線が巡る。

瓶（245）口径9.4cm、胴部最大径15.2cm、底径9.1cm、器高25.3cmを測る。外上方にわずかに外反しながら伸びる口縁部は、端部を下方に肥厚させ凹面を有する。長胴の体部は丸みを帯びた肩部で最大径を測り、直線的に狭まり底部は高台風に上げ底状である。

弥生土器（第77図）

甕（254~256）254はわずかに上がる上げ底、255はくびれの上げ底、ともに内外面にハケ目が残る。256はわずかにくびれの上げ底のミニチュアの底部片。

壺（257）底径6.0cmを測る厚い平底の底部片で内外面にハケ目が残る。



第65図 SD 3 平面及び遺物出土状況図

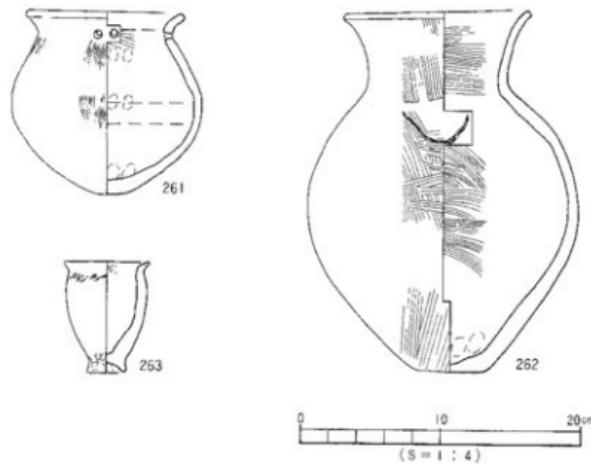
S D 1 出土遺物（第66図）

壺（261） 口径10.8cm、胴部最大径13.5cm、器高12.9cmを測る完形品である。球形の体部より短く外反する口縁部の端部は丸く、頸部に小円孔を2個2対穿っている。調整は内外面にハケ目が残る。

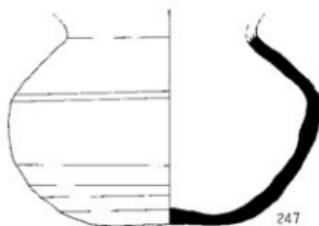
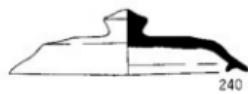
S D 3 出土遺物（第66図）

長頸壺（262） 口径13.0cm、胴部最大径19.2cm、底径5.0cm、器高25.5cmを測る完形品である。外上方に外反する口縁部の端部は「コ」字状を呈する。胴部上位に口の広がった「U」字状のヘラ記号を施している。

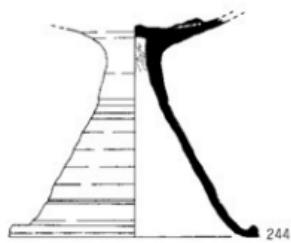
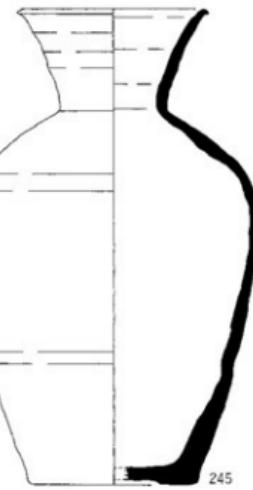
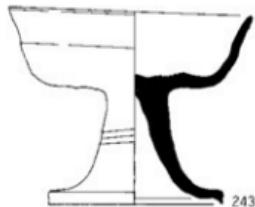
甕（ミニチュア）（263） 口径6.1cm、底径2.8cm、器高9.9cmを測る。胴部を一部欠いていながらほぼ完形品である。口縁部を「く」字形に折り曲げ端部は尖り氣味に丸く、底部はくびれの上げ底である。頸部にヘラ状工具による右上がりの刺突列点文を施す。



第66図 T3出土遺物実測図(1)



0 5cm
(S = 1 : 2)



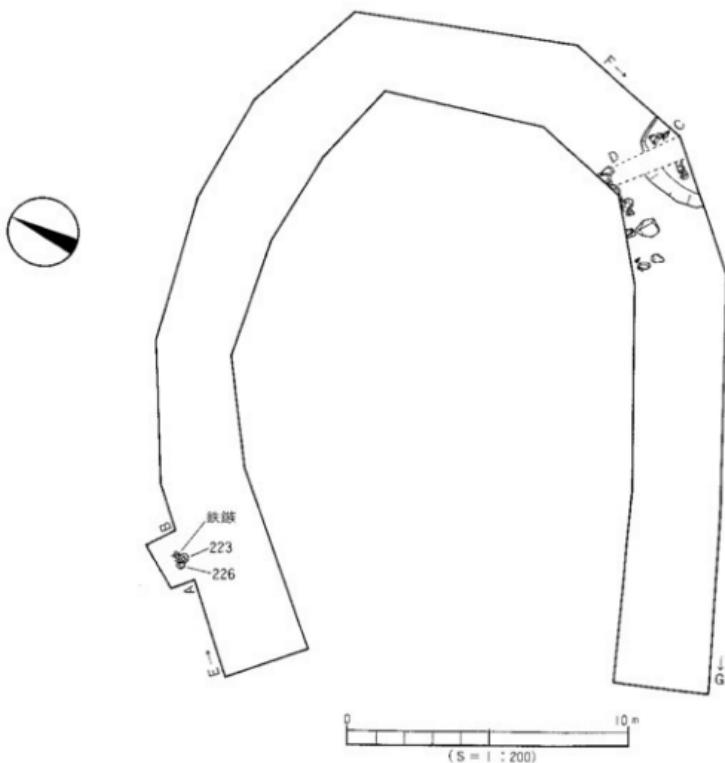
0 5 10cm
(S = 1 : 3)

第67図 T 3 出土遺物実測図(2)

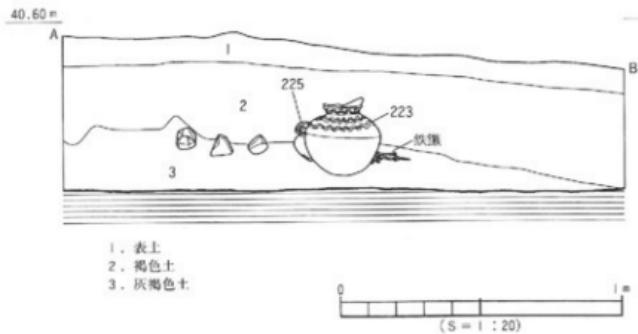
4) T 4 区 (第69~75図)

祭祀遺構；東山古墳群の南東部の緩傾斜地に「U」字形に幅3mのトレンチ溝を設定した。その北西部より須恵器の壺（完型品）、高坏片と土師器の短頸壺（完型品）、高坏の4点が一括出土し、またその直下からは13点の鉄鎌を検出した。

出土状況は、和泉砂岩質の緩傾斜の旧地形を削平し、凹地を造り、鉄鎌を敷いた上に須恵器などを置いている。出土地は、直径20m程の墳丘を形成する丘陵地上にあり、出土地より北西10mには石室があることが確認されている。土層的には土器を入れた掘り込みを確認することはできなかったが、一括して検出された状況から推察してこれらの遺物は、原位置を保っているものと考えられる。



第68図 T 4 平面図



第69図 T4 遺物出土状況及び土層断面図(1)

出土遺物

須恵器（第71図）

壺（223） 口径17.3cm、胴部最大径25.8cm、器高24.7cmを測り、一部口縁部を失しているがほぼ完形品の壺である。外傾する口縁部中位に凸帯を巡らし、その下に波状文を施す。頸部基部にも凸帯状が見られる肩部は引き目調整の上に2条の波状文を胴下から底部にかけて格子叩きを残す内面に無文当具痕が顕著に残る。

高环（224） 口縁部1/5の残存である。口縁部手前で1条の凸帯を巡らし体部と口縁部の界を設けている。口縁部は直立気味である。

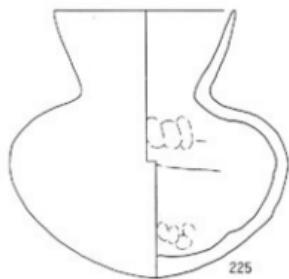
土師器

壺（225） 口径9.6cm、胴部最大径14.9cm、器高14.2cmを測る。丸底の底部よりやや胴の張った体部につづき、よくしまった頸部より外傾する口縁部は、端部で尖り気味に丸く仕上げられ内外面にナデ調整が施されている。

高环（226） 口径14.3cm、器高12.0cm、脚底径10.7cm、脚高6.6cmを測る。環部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は外反し環屈曲部は稜を持つ。脚部の柱は円錐形で底部は屈曲して聞く、調整は内外面ともに横ナデ調整が行なわれ環部の器壁がやや厚い、内外面に赤色顔料の付着が見られる。

鉄製品（第72図）

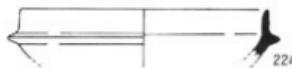
鉄鎌（227～239） 全て須恵器と土師器の壺の下からの出土である、全長15.0cm～17.0cm前後の柳葉型の長頭鎌になるものと思われる。230、231、234は先端部、227～235は茎端部を欠失している。



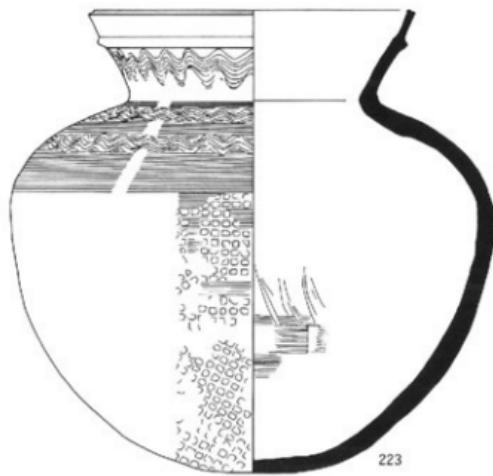
225



226



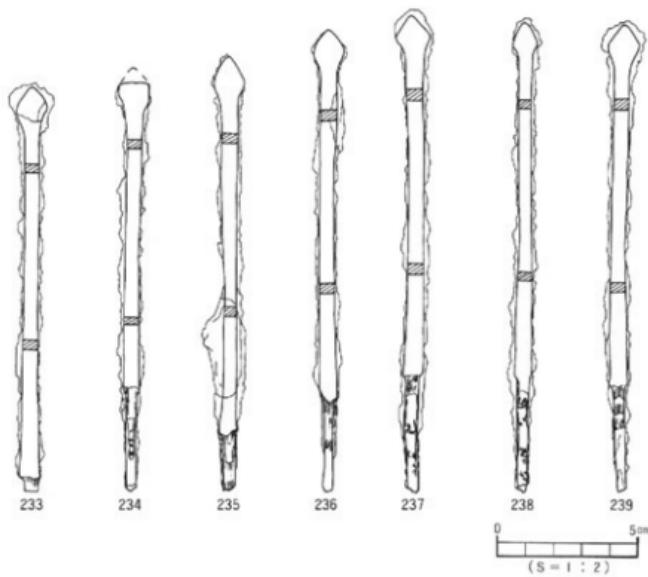
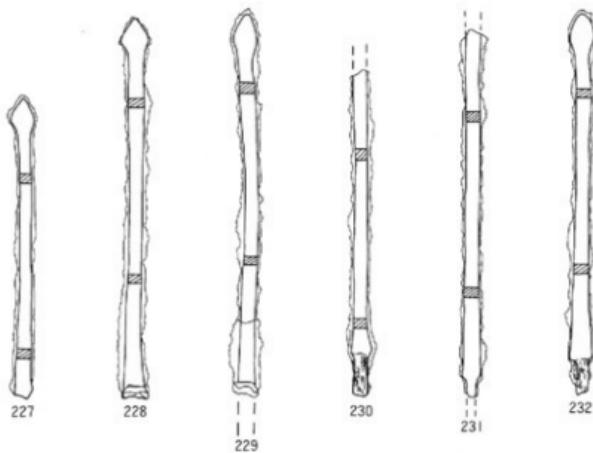
224



223



第70図 T 4 出土遺物実測図(1)



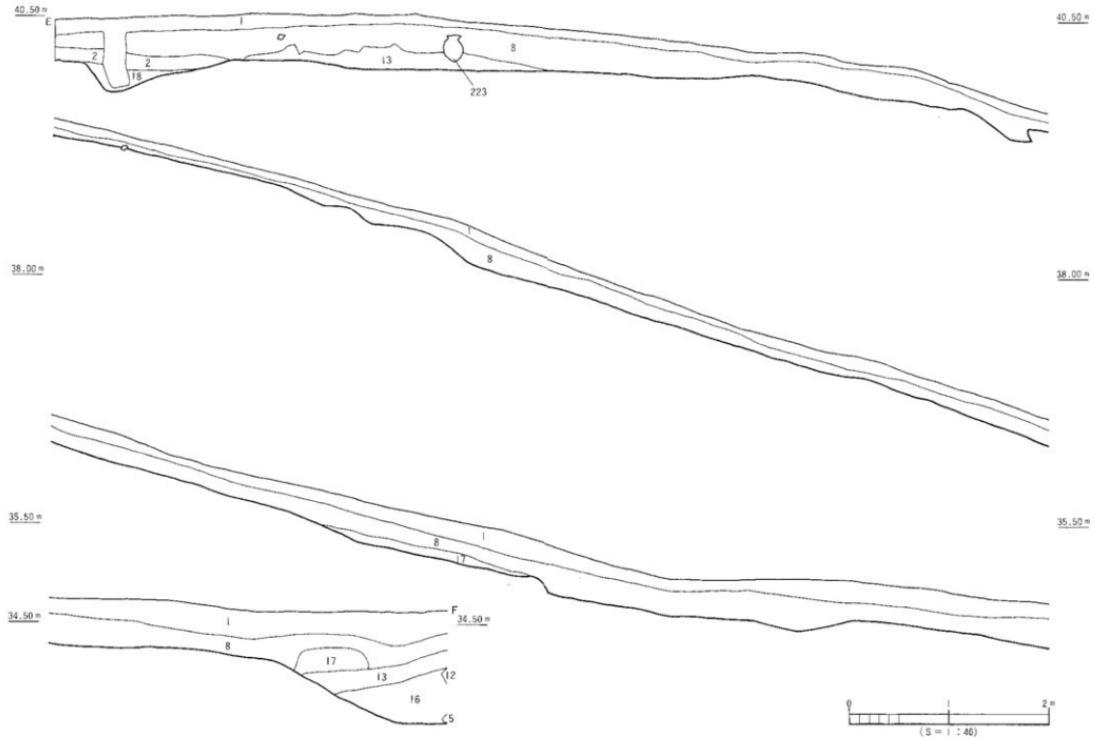
第71図 T 4 出土遺物実測図(2)

版築と石室

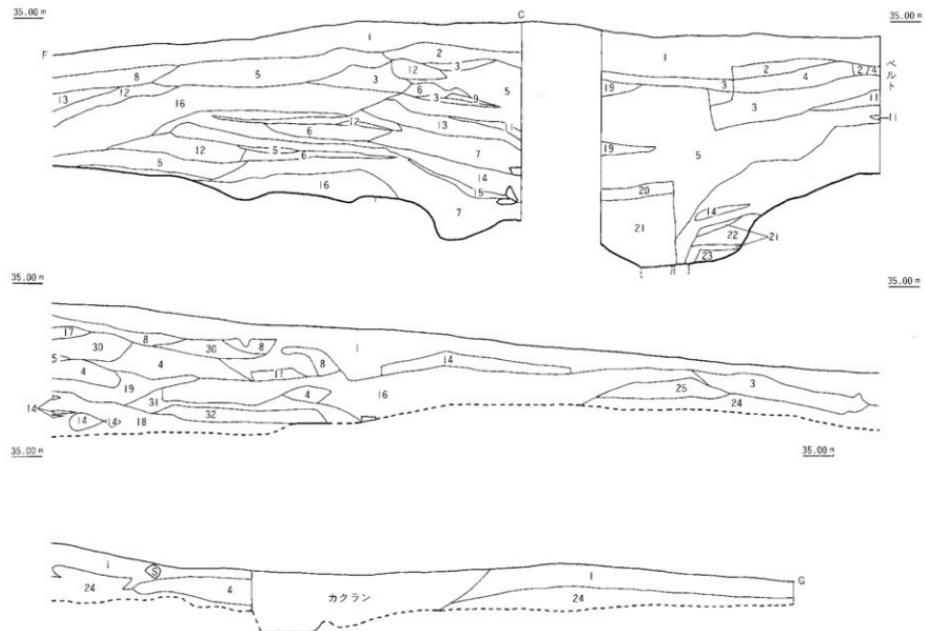
トレンチ南東角の西から東へ傾斜する地点において、黒色土と褐色土を主とする帶状に重なり合う2種類の版築を検出した。トレンチを挟んで南北にある2基の石室を覆う盛上であった。層序を観る限り、遺存状態は良く、墳型からして1墳丘2石室を持つ未盗掘の石室と思われるが、いずれも調査区外であるため、石室の調査には到っていない。



第72図 T 4 土層断面図(2)



第73図 T4 土層断面図(3)



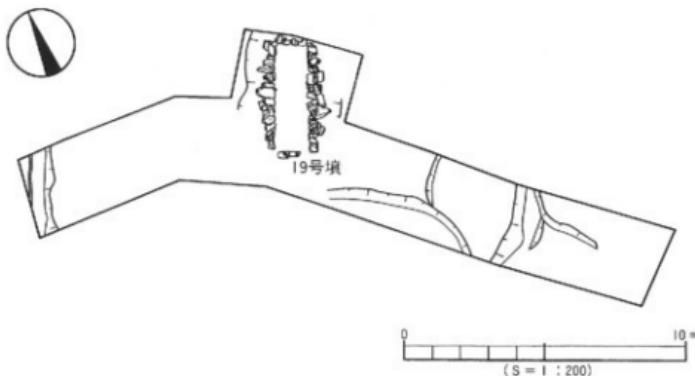
- | | | |
|----------------|-----------------|----------------------|
| 1. 表土 | 12. 暗褐色土 | 23. 黑褐色粘土堆 |
| 2. 黑色土 | 13. 灰褐色土 | 24. 明黄色土 (粘土堆混) |
| 3. 海色土 (粘土堆混) | 14. 黄褐色土堆 | 25. 喀斯特土壤 (灰白色泥) |
| 4. 黄色土 (粘土堆混) | 15. 淡灰色粘土堆 | 26. 黄褐色土 |
| 5. 暗褐色土 (粘土堆混) | 16. 明黄色粘土堆 | 27. 赤褐色粘土 |
| 6. 灰褐色土 (粘土堆混) | 17. 黄色土 | 28. 茶褐色土 |
| 7. 黑色土 (粘土堆混) | 18. 黄绿色土 | 29. 黄色土 (黑褐色土) |
| 8. 鹅黄色土 | 19. 暗褐色土 (粘土堆混) | 30. 明黄色土 |
| 9. 黄色土 (灰色土壤) | 20. 暗褐色粘土堆 | 31. 晴黄色土 (粘土堆·明黄色土面) |
| 10. 灰色土 (粘土堆混) | 21. 黑色粘土堆 | 32. 黄色粘土堆 (灰土混) |
| 11. 黑褐色土 | 22. 鹅色粘土堆 | |

第74図 T4 土層断面図(4)

0 1 2m
(S = 1 : 40)

5) T 5 区 (第75図)

古墳群丘陵のほぼ中央の西斜面にあり、北方中腹から南方中腹へ向けてのT 2に続くトレンチ溝である。緩斜面上にあり、調査区東西からそれぞれ南北に延びる溝状遺構が検出された。この溝は、位置的にみて溝の中間に確認されている19号墳の周溝と考えられる。規模は幅・深さともに詳細不明である。



第75図 T 5 平面図

6) T 6 区 (第76図)

古墳群丘陵の北西部の西斜面にあり、東方中腹から西方麓へ向けてのトレンチ溝である。西裾部は急傾斜地のため遺構は全くなく、東端に溝が1条確認された。溝の10m東方には小高い丘陵地があり、それに係わるものと推測できる。その幅1.5m、深さ50cmを測る。

出土遺物

須恵器 (第68図247)

頸部から底部にかけての残存である。やや胴の張った体部に扁平な底部が付き、胸部中位やや上方に一条の凹線が巡る。調整は底部に回転ヘラ削り後に横ナデ、底部内面に不定方向のナデ調整を施す。

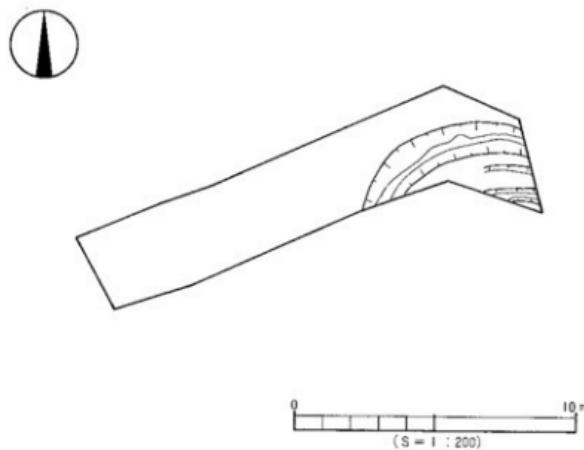
弥生土器 (第77図)

甕 (258) 平底の底部片。

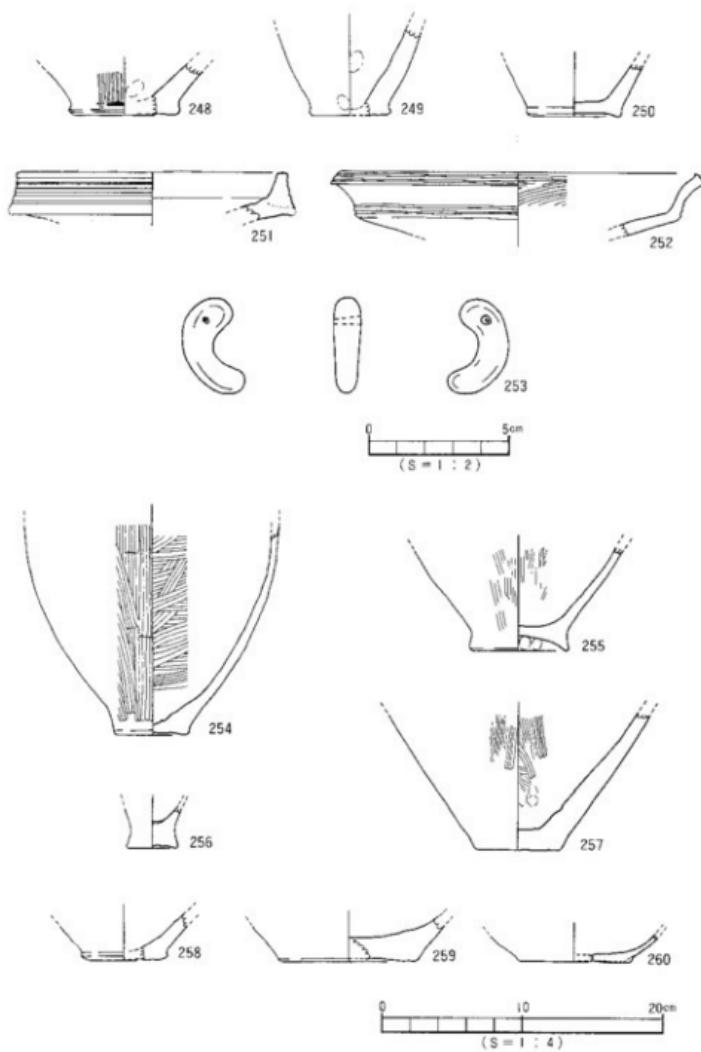
壺 (259) 厚い平底の底部片。

土師器

环 (260) わずかに高台が付く。



第76図 T6 平面図



第77図 T 2, 3, 6 出土遺物実測図

●表23 19号墳出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
180	环面	口径 13.0 基高 3.7	ゆるやかな曲面を描く天井部にやや間隔ある縫合部は大なりと縫合に丸い。	⑩ 同軸ヘラケズリ ⑪ ヨコナナ	⑫ ナナ ⑬ ヨコナナ	石・瓦(1~3) ○		44
181	环面	口径 10.0 基高 3.1	ゆるやかに丸い火口部に直立側面の口縫合部は段をもち丸い。	⑩ 同軸ヘラケズリ ⑪ ヨコナナ	ヨコナナ	石・瓦(1~3) ○		44
182	环身	口径 12.4 基高 3.7	水平気味に外上方に短くのびる受部に内傾する立ち上がり。	⑫ ヨコナナ ⑬ 同軸ヘラケズリ	ヨコナナ	石・瓦(1~3) ○		44
183	环身	口径 10.8 基高 3.3	水平に短くのびる受部、内傾する立ち上がり。	⑪ ヨコナナ ⑬ 同軸ヘラケズリ+ナナ	⑫ ヨコナナ ⑭ ナナ	石・瓦(1~4) ○		44
184	环身	口径 11.2 基高 4.0	腹平な底部に短く外上方に丸くのびる受部と内傾する丸い立ち上がり。	⑪ ヨコナナ ⑬ 同軸ヘラケズリ	ヨコナナ	石・瓦(1~3) ○		44
185	高环	口径 9.0 底径 8.2 基高 8.8	脚部は外反し、端部付近で外方へ側曲。	⑪ 同軸ナナ ⑮ 同軸ヘラケズリ+ナナ ⑯ 同軸ナナ	同軸ナナ	石(石・瓦)~3 ○		44
186	碗	口径 9.4 基高 4.8	底平気味に立ち上がる口縫合部は夷り氣味に丸い。中位に2条の筋縫。	⑪ ヨコナナ ⑬ 同軸ヘラケズリ	ヨコナナ	石・瓦(1~2) ○		44
187	脚付 碗	口径(13.2) 底高 10.5	やや内傾する口縫合部は端部で夷り気味に丸い。中位に2条の筋縫。	⑪ 同軸ヨコナナ ⑬ 同軸ヘラケズリ ⑭ ヨコナナ	⑫ 同軸ヨコナナ ⑭ ヨコナナ	石・瓦(1~6) ○		44

●表24 T 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
223	壺	口径 17.3 基高 24.7	内傾する口縫合部中央に段をなす。 口縫合部と肩部は波状文。	⑪ ヨコナナ ⑯ カキ括弧記号 ⑰ 繋子印き	⑫ ヨコナナ 当て具縫+ヨコナナ	石・瓦(1~4) ○		45
224	高环	口径(13.1) 基高 2.6	口縫合部前面に一条の凸縫を造らす。	同軸ナナ	同軸ナナ	瓦(1~5) ○		45
225	壺	口径 9.6 基高 14.2	外上方にのびる口縫合部は夷り氣味に丸い。	⑪ ヨコナナ ⑭ ナナ	ヨコナナ	瓦 ○		45
226	高环	口径 14.3 脚底径(10.7) 基高 12.0	耳脚部中央下段で段をなす。 口縫合部はやや内傾する。	ヨコナナ	⑫ ヨコナナ ⑯ 板状工具によるヨコナナ	密 ○	赤色顔料	45

●表25 T 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
240	环面	口径 12.6 基高 3.4	水平な天井部より「ハ」の字状に口縫合部につづく。 かえりは短く内傾する。	⑩ 同軸ヘラケズリ ⑪ 同軸ヨコナナ	同軸ヨコナナ	砂 ○		46
241	石 つまみ	横高 1.6	やや中央部が膨らむつまみ頭。	ナナ	ナナ	灰(1) ○		

●表26 T 3出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
242	甕	残高 5.8	丸底。	ヨコナデ	ヨコナデ	長(1~2) ○		
243	高环	径 12.3 底径 9.5 基高 10.5	外上方にのげる口縁部は丸い。 脚部中央に2条の凹線。	ヨコナデ	ヨコナデ	長(1~2) △		46
244	高环	径 12.3 底径 11.3 残高 11.7	「へ」の字状に長い脚部。 中央に7条の凹線。	ヨコナデ	ヨコナデ	長(1~2) ○		46
245	瓶	口径(9.4) 底径(9.1) 基高 25.3	外反する口縁部。 高台状の底部。	⑪~⑭ ヨコナデ ⑮ ナデ	ヨコナデ	長(1~2) ○		46

●表27 T 6出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
247	甕	残高 10.7	扁平な底部。 脚部中央に1条の凹線が追る。	⑯ ヨコナデ ⑰ 同軸ヘラズ)→ヨコナデ ⑯ ナデ	⑯ ヨコナデ ⑯ ナデ	長(1~2) ○		46

●表28 T 2出土遺物観察表 (弥生土器) 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
248	甕	底径(7.2) 残高 3.7	平底。	タテハケ ナデ	ナデ	石・長(1~3) ○		
249	甕	底径(5.4) 残高 6.5	平底の底部より外方にのびる脚部。	ナデ	ナデ	石・長(1~4) ○		
250	甕	底径(6.6) 残高 3.8	わずかに上げ底。	ナデ	ナデ	石・長(1~4) ○	内面黒色	
251	甕	口径(18.1) 残高 3.4	口縁部を上方に被装を行ない裏面に凹線を4束追らす。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~4) ○		47
252	高环	口径(25.3) 残高 4.5	外反する丸い口縁部。 端面に2条の複凹線が追る。	ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	石・長(1~3) ○		47

●表29 T 3出土遺物観察表 (弥生土器) 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
254	甕	底径 4.9 残高 15.0	わずかに上がる上げ底。	⑯ タテハケ(4~5本/1cm) ⑯ ナデ	⑯ ヨコハケ(4~5本/1cm) ⑯ ナデ	石・長(1~5) ○		47
255	甕	底径 6.8 残高 7.4	上げ底。 外側して立ち上がる。	⑯ タテハケ(6本/1cm) ⑯ ナデ	⑯ タテハケ ⑯ ナデ	石・長(1~3) ○		47
256	レシニア	底径 3.6 残高 3.0	わずかにくびれる上げ底	磨滅のため不明	ナデ	長(1~4) ○		
257	甕	底径 6.0 残高 9.7	平底の底部より外側して立ち上がる。	⑯ タテハケ(5本/1cm) ⑯ ナデ	ハケ(5本/1cm) ⑯ ナデ	石・長(1~3) ○		

●表30 T 6 出土遺物観察表（弥生土器） 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
258	甕	口径(6.0) 底高 3.5	平底。	⑪ ヨコナテ ⑫ ナゲ	ナテ	石・長(1~4) ○		
259	甕	底径(9.8) 底高 3.2	厚い平底。	ヨコナテ	ナテ	石・長(1~4) ○		
260	甕	口径(7.8) 底高 2.0	わずかに高台が付く。 磨滅のため不規		ヨコナテ	長(1) △		

●表31 S D 1 出土遺物観察表（弥生土器） 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
261	甕	口径 10.0 底高 12.9	複雑な体形に傾く外反する口縁部。 底部に2箇所底の凹凸を2ヶ所に施す。	⑪ ヨコナテ ⑫ ハケ	⑬ ハケ ナテ	石・長(1~5) ○		47

●表32 S D 3 出土遺物観察表（弥生土器） 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
262	長颈 甕	口径 13.0 底径 5.0 基高 25.5	外上方に外反する口縁部。 口縁部はヨコナテを呈する。 底部上位にヘラ記号。	⑪ ヨコナテ ⑫ ナゲ ⑬ ハケ	⑭ ヨコナテ ⑮ ヨコハケ ⑯ ハケ	石・長(1~4) ○		47
263	ミニチャ	口径 6.0 底径 2.7 基高 9.9	くびれの上げ底。 底部に網目型点文。	ナテ	ナテ 指觸痕	石・長(1~3) ○		47

—凡例—

遺物觀察表

(1)以下の表は、本調査出土遺物觀察一覧である。

(2)各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1～4)多→「1～4 mm 大の石英・長石を多く含む」
である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

第V章 調査の成果と課題

東山古墳群は、松山平野の中央よりやや南部、石手川と重信川に囲まれた三角形を形成する平野部のほぼ中央に位置し、石井地区の平野に点在する丘陵のひとつである。その丘陵には、これまでの調査によって10数基の古墳の存在が確認され、また縄文・弥生時代の遺物も数多く発見されている。

今回実施した4次調査では11基、5次調査では8基の古墳を確認し、その内主体部の部分検出を含めて7基の古墳の調査を行った。そこで、それぞれの主体部出土遺物の年代的な位置付けと築造時期の前後関係を把握するため古墳の構造について考察し、古墳の時代的、地域的な位置付けを行い、周辺に遺存する犬山・星岡古墳群との比較資料として提示するものである。

〔1〕4次調査

9号墳主体部の遺存状況は極めて悪く、かなりの規模で削平が行われていた。従って、墳丘隆上は失われ、地山面も激しくカットされ、地山整形の痕跡を確認することはできなかつた。主体部を構築したと思われる石材は、ほとんどが原位置を留めておらず構造や規模等についての詳細は把握できなかつた。ただ、馬蹄型状に検出された周溝からは、多数の須恵器を検出することができた。それを器種別に観ると、环蓋2点、环身2点、高环26点、壺9点、甕4点、横瓶1点、匙1点等である。

高环No.9は、器高8.5cmの小型有蓋高环である。脚部はハの字形に外反し、端部で外方に屈曲させ、さらに下方へカギ形に曲げられている。体部にみられるスカシ窓は、3方向にあり、形は台形を呈している。このような特徴を有する高环は、他にもNo.10・11・12・13・14・15等同地点から多数出土しており、TK23型式、TK47型式の範疇に入るものと推察できる。蓋、环身（No.3・5・6・7）はともに比較的小さく、蓋は口縁部が内傾する明瞭な段を有し、稜は短く丸い。器高は口径に対して高く、天井は丸い。天井の調整は回転ヘラ削りを施している。环身はたちあがりが高く、わずかに内傾しており、端部は蓋と同様に内傾する明瞭な段を有し、TK208型式に比定されるものも認められる。壺・甕類に関しても、环身等と同型式に属するものが大半であり、出土状況から推しても当古墳は5世紀後半から6世紀前半に位置するものと考えられる。

ただ、出土須恵器の中には陶邑窯型式に属さない非陶邑系の高环（No.19）と大型甕（No.28）が含まれていた。このことについては、他の遺物との関連性、意味合い等について近年報告された松前町「出作遺跡I」等の例から半島系の松山平野では稀有な遺物であることが判明している。なお、第VI章考察欄において、蛍光X線分析や器型等の点から比較検討された奈

良教育大学三辻利一氏、松山市埋蔵文化財センター梅木謙一の論考をご参照願いたい。

東山古墳群の中央部よりやや東方に位置する15号墳は、9号墳の東8mに位置し、主体部は調査区域外にあるため確認できず、墳丘の平面形は、部分的な調査のため不明瞭だが、円形を呈しているものと思われ、周溝検出状況から直径は約12~14mを測るものと考えられる。周溝は、墳丘の南部において、16・18号墳の周溝によって墳丘裾部をカットされており、幅3m、深さ20~30cmの規模である。出土遺物は、主体部が調査区外にあるため周溝内から出土した遺物に限られる。周溝内からは、須恵器环身3片、高环12片、环蓋2片、壺片8片などを出土している。緩傾斜地の上部にある主体部ないしはその周辺部の祭祀遺構からの流れ込みと考えられるが、他の古墳に比較して出土遺物の多いことが注目される。

高环No54・55・56は、それぞれ脚基部は太くてきわめて安定感があり、脚はゆるやかにラッパ状をなし、脚底径も環部の口徑に近い。スカシ窓は2方向(54)ないし3方向(55・56)に長方形と三角形を組合させ、その組み方は2段で縦方向に配している。環部が欠失しているが、脚部の器型からTK209型式に比定される。また、魁(No72)は体部が小型化し、球形を呈している。口頸部は基部が細く、ラッパ状に外反し、頸端部で段をなして外反する。口縁端部は丸く仕上げられ、頸部外面には波状文、胴部には横曲状刺突列点文が施されている。堤瓶No73同様、II型式5段階の範囲に入るものと考えられる。

次に、方形の周溝を持つ16・17・18号墳についても半分以上が調査区外のため、全容は不明であるが、それぞれ小型化した方墳と考えられる。一辺が5~8mの周溝を持ち、盛土は南斜面であるために流失してなく、わずかに周溝に残された須恵器によって構築時期を推定することができた。16号墳出土の环身No79・80・81・82は、立ち上がりが短く内傾しており、その端部は丸く、段をなすものは全く見られない。底部は丸く安定性に欠けるものもある。底部の外面1/2前後に回転ヘラ削り調整がみられ、内面は回転ナデ調整が施されているものが多く、TK209・217型式に比定される。18号墳出土の高环(No88)にしても同型式に酷似していることから、この3基の方墳は、同時期に構築されたものと思われ、7世紀初期の当地域における方墳の位置付けを考えるうえで貴重と言えるが、全貌の確認に至らなかったのは残念である。

[2] 5次調査

今回実施した4・5次調査では最も遺存状況が良かったのが19号墳であったが、状況は石室は側壁上部半分以上が取り去られ、玄室内の遺物も散乱し盗掘を受けていた。遺物は破碎されたものが多く、原位置を保っているものはほとんどないと考えられた。玄室内からは須恵器の环身3点・环蓋2点・碗1点・台付き楕1点・高环1点・耳環3点・小型勾玉1点・管玉2点・ガラス小玉28点などが出土したが、他の施設からは須恵器碎片しか検出されなかった。

环身No182・183は、立ち上がりが短く内傾し、その端部は丸い。底部はやや丸みを帯び、安定性に欠けるTK43型式に類するが、No184は立ち上がりが受部端の上面よりやや上方になってしまっており、これは立ち上がりの消滅傾向が現われた時期と解され、II型式6段階に比定される。更には、7世紀中頃から後期のものと推される高坏（No185）、高台付き榎（No187）の存在から推察して、3期に及ぶ追葬が考えられる。

次に、古墳の構造についてであるが、本墳の占地は東から西へと比較的急峻な斜面となつておらず、墳丘域、墳形は大半が削平されていたために判然としなかった。石室は、南南西方向に開口する單室の両袖型横穴式石室で、ほとんどの壁面が腰石と上部に1～3段残す状況である。羨道部については、石材はなく抜き取り痕を残すのみであった。そんな中で玄室内床面からは追葬を示す状況を確認することができた。すなわち、床面に敷かれている河原石が2層に分層されていたことである。1層は、旧地山成形直上に敷かれ、2層はその上部20cmの高さに敷かれていた。また玄室中央より奥壁にかけて和泉砂岩質の割石を敷き詰め、ベット状造構を形成していた。その他の構造からしても、この玄室の埋葬方法は、平井谷1号墳（松山市文化財調査報告書31）とはほぼ同様の形態を呈しており大変興味深い。

これらの遺物や構造等から考えても、少なくとも2～3回の追葬があったことは明白である。

T4区からは、須恵器の壺（No223）、高坏（No226）、高坏（No225）の4点が一括出土し、またその直下からは13点の鉄鎌（No227～239）を検出した。和泉砂岩質の緩傾斜面を削平し、凹地を造り、鉄鎌を敷いた上に須恵器などを置いたものである。出土地は、直径20m程の墳丘を形成する丘陵地上にあり、出土地より北西10mには石室があることが確認されている。土層的には土器を入れた掘り込みを確認することはできなかったが、一括して検出された状況から推察してこれらの遺物は、原位置を保っているものと推されることから、墳丘に設けられた祭祀遺構と考えられる。土器編年（西弘海編）からして5世紀初期から中頃にかけての遺構と推測でき、北西10mに地点には古墳時代前期乃至は中期の石室が存在することになる。なお、須恵器No223・224については「考察編」に稿を譲る。

東山古墳群4・5次調査の結果、当初考えられていた古墳時代後期の群集墳の宝庫であることが確認された。また、古墳時代全般に跨がる遺跡が遺存すること、今回は検出できなかつたが弥生時代の遺構の存在することが多数の遺物の出土によって明らかになったこと、更には19号墳から松山平野における構築方法のひとつの様式が判明したこと等、多くの貴重な成果を得ることができた。一方では、非陶邑系須恵器出土によって石井地区と松前町、東野地区との物質の流通等の問題が出現しており、これを今後の松山平野における陶質土器を考える上で新たな課題として提示し、まとめとしたい。

第 VI 章

考 察



VI-1 東山古墳群出土初期須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学物理化学研究室教授 三辻 利一

1) はじめに

四国でも香川県下では岡の御堂古墳群、川上古墳、国市池遺跡、垂水遺跡、長尾宮西遺跡、引田遺跡、荒神島遺跡、村黒遺跡、太田下・須渠遺跡から出土した初期須恵器が蛍光X線分析によつて陶邑産であると推定されている。愛媛県下でも出作遺跡出土初期須恵器の中に大阪陶邑産と推定されるものが検出されている。

いま、全国各地の5・6世紀代の遺跡から出土した古式須恵器の蛍光X線分析が進められている。勿論、大阪陶邑産と推定される須恵器を検出するためである。このような研究の一環として、今回は東山古墳群から出土した初期須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

2) 分析結果

表33には20点の試料の分析値が示されている。すべての分析値は岩石標準試料JG-1による標準化値で示されている。

产地推定を行うためには、母集団となる窯跡または窯跡群を選定しなければならない。初期須恵器の場合には、大阪陶邑群と推定される須恵器が全国各地の遺跡から出土しているので、大阪陶邑群を母集団の一つとして選出しなければならない。次に、四国には香川県内に宮山窯、三谷三郎池窯という初期須恵器の窯が見つけられているので、当然、母集団の中に加えられなければならない。地元、愛媛県内の初期須恵器の窯については十分な情報は筆者の手元にない。それで、谷田窯群の須恵器を以って地元産の初期須恵器に代替させた。何故ならば、もし、松山市内、および、その周辺に未発見の初期須恵器の窯があるとすると、そこから出土する須恵器の化学特性は谷田窯群の須恵器と類似すると考えられるからである。それで、谷田窯群も母集団の一つに加えられた。さらに、考古学的な器形観察から、韓半島産の可能性をもつものがあるので、韓半島の三国時代の陶質土器の窯のうち、高靈の内谷洞窯を代表として母集団の一つに加えた。

こうして、大阪陶邑群、三谷三郎池群、宮山群、谷田群、内谷洞群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値が計算された。マハラノビスの汎距離とは統計学上の距離であり、遺跡出土須恵器がどの母集団に帰属するかを検定する上に必要な因子である。K、Ca、Rb、Srの4因子を使って計算された。その結果は表34にまとめられている。

母集団への帰属条件はHotelling T²検定により、母集団の試料数、使用因子の数、それにマハラノビスの汎距離の二乗値を使って決められる。その結果、帰属条件として、 $D^2(X) \leq 0$ を採用してもよいことがわかった。(X)は母集団名である。この帰属条件からみると、20点の試料の中には宮山群、谷田群、内谷洞群に帰属するものはないことになる。一方、大阪陶邑群に帰属するのはNo.4、8、10、11、12、13、16、17、18、19、20の11点である。また、三谷三郎池

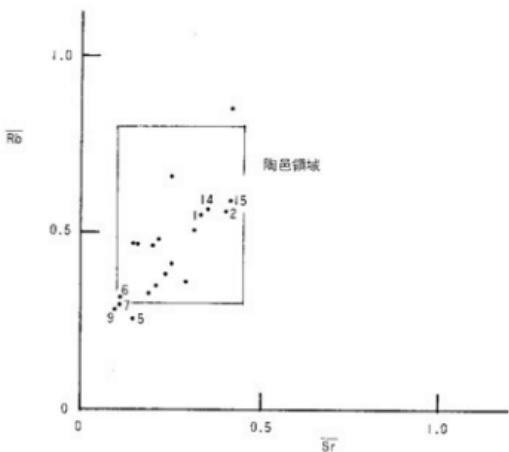
群への帰属条件を満足するのはNo.6、7、10、14、17、19の6点であるが、No.10、17、19の3点は大阪陶邑群と重複して帰属条件を満足した。

ここで、20点の試料のRb-Sr分布図を第78回に示しておく。ほとんどの試料が大阪陶邑領域に分布していることがわかる。領域を離れたNo.5、6、7、9のうち、No.5、9は不明、No.6、7は三郎池群に帰属したものである。しかし、表33を点検すると、No.5、6、7、9の4点は全因子で類似しており、同じ胎土をもつ須恵器とみられる。当然、同一産地の須恵器である。この点を考慮に入れて、ここでは無理をせず、これら4点を产地不明としておいた。

No.1、2とNo.14、15の4点は器形観察から韓半島産の可能性があるとされた試料である。表33をみると、これら4点はCa量が多いという共通点をもつ。第78回でもほぼ、同じ領域に分布しており、同一産地の陶器である可能性が高い。そうだとすると、これら4点はNo.14で推定された三谷三郎池窯群とする説にはいかない。もう少し帰属条件を甘くして、D²値が15程度の母集団も产地候補として上げておかなければならなくなる。そうすると韓半島産の可能性が出てくる。こうして、No.1、2、14、15は(?)符号を付して半島系と推定されることになった。No.20はRb-Sr分布図では陶邑領域を離れるが、D²値が陶邑群への帰属を満足したので、陶邑群産としておいた。

表33 東山古墳群出土初期須恵器の分析値

試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	器種	遺物番号	出土地
1	0.444	0.213	2.53	0.552	0.333	0.286	甕	223	T 4
2	0.449	0.265	2.18	0.562	0.402	0.368	"	28	9号 NW区
3	0.382	0.168	4.28	0.660	0.253	0.114	壺	25	" SE区
4	0.293	0.060	2.94	0.326	0.193	0.080	高环	14	" NE区
5	0.211	0.030	2.79	0.264	0.150	0.065	甕	27	" "
6	0.207	0.039	2.52	0.316	0.110	0.020	高环	13	" "
7	0.212	0.032	2.74	0.289	0.101	0.011	"	10	" "
8	0.316	0.080	2.73	0.357	0.290	0.135	环盖	7	" "
9	0.193	0.040	2.49	0.276	0.096	0.015	"	6	" "
10	0.308	0.076	1.96	0.413	0.249	0.092	环身	3	" SE区
11	0.300	0.062	2.64	0.381	0.238	0.092	高环	11	" 南:シナ
12	0.490	0.086	2.87	0.513	0.324	0.177	"	-	" NW区
13	0.269	0.056	2.75	0.342	0.206	0.077	"	16	" SE区
14	0.410	0.220	2.40	0.571	0.352	0.224	"	-	" SE区
15	0.509	0.317	2.61	0.594	0.407	0.378	"	19	" NE区
16	0.428	0.039	2.65	0.481	0.215	0.170	甕	32	" SE-NF NW-I-C
17	0.299	0.021	2.42	0.466	0.146	0.038	环身	40	13号
18	0.395	0.029	2.54	0.465	0.203	0.135	高环	42	" NE区
19	0.301	0.025	2.32	0.471	0.156	0.043	环盖	38	" NW区
20	0.545	0.149	1.85	0.848	0.417	0.228	高环	54	15号



第78図 東山古墳群出土初期須恵器のRb-Sr分布図

表34 產地推定の結果

試料番号	時 期	D ² (陶邑)	D ² (三郎池)	D ² (窓山)	D ² (谷田)	D ² (内谷洞)	推 定 產 地
1	5C末	14	15.0	120	13	13	半島系(?)
2	"	21	16.1	57	30	13	" (?)
3	?	17	36	120	16	24	陶邑(?)
4	5C末	8.6	19	130	19	46	"
5	"	17	20	101	31	65	
6	"	16	8.1	109	30	64	三郎池、不明
7	5C末~6C初	15	10	130	33	67	" 不明
8	5C末	10	34	65	22	35	陶邑
9	"	18	11	120	34	72	不明
10	"	7.2	9.4	64	12	33	陶邑、三郎池
11	5C末~6C初	8.3	16	76	17	37	陶邑
12	6C前	2.7	54	270	23	14	陶邑
13	5C末	10	15	81	19	46	陶邑
14	"	15	5.9	54	12	15	三郎池→半島系(?)
15	"	42	17	130	63	15	半島系(?)
16	5C後	3.0	32	310	24	22	陶邑
17	5C末	6.1	2.0	140	27	37	陶邑、三郎池
18	"	3.2	25	260	26	25	陶邑
19	"	6.0	1.7	140	25	36	陶邑、三郎池
20	"	7.3	14	230	17	16	陶邑

VI-2 松山平野における非陶邑系須恵器に関する一考察

梅木 謙一

1.はじめに

近年、西日本各地で須恵器窯跡が発見、調査され、特に5世紀代の須恵器生産が多様な様相をもつことが指摘されはじめた（橋口達也1990）。

松山平野においても、この10年間に非陶邑系須恵器が平野内の数遺跡で出土し、1992年には長井數秋氏により初期須恵器窯（伊予市市場南組窯跡）が発見される（長井數秋1992）など、松山平野の5世紀代の須恵器生産とその様相は弱々にではあるが明らかになりつつある。

本稿では、5世紀代の松山平野の集落構造及び須恵器生産の実態把握のため、松山平野出土の非陶邑系須恵器の比較検討と、それ等が属する集落の一側面を明らかにするものである。

論述に際しては、まず定森秀夫氏が指摘する「同じ窯で同じ工人が製作したかのようである」酷似する資料3点を比較検討し、その立証を行う（定森秀夫1993）。つづいて、酷似品が出土する集落（5世紀代）の様相を概観し、非陶邑系須恵器保有の背景を追究していく。

2. 酷似する壺3点

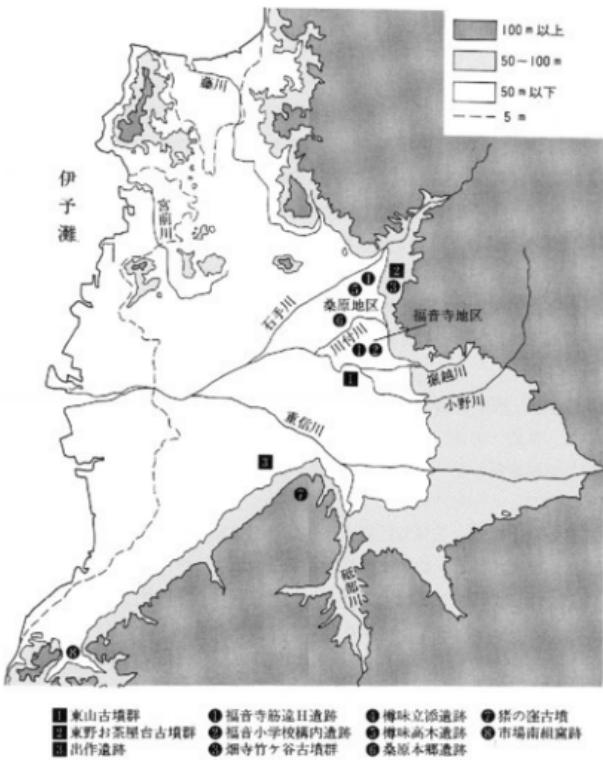
松山平野では、非陶邑系須恵器・陶質土器の出土は約10遺跡10数例におよぶ。このうち定森氏が指摘するように、壺においては製作手法・法量が酷似するものが3点あり注目されるものとなっている。以下、3点の酷似性を立証するため、まず該当資料について出土遺跡、出土状況、共伴遺物を概観し、次に資料の比較・分析を行うものとする。

1) 東山古墳群5次調査他（松山市東石井町2139-2他、田城武志1993）

東山古墳群は、松山平野のはば中央に位置する独立丘陵上に立地する（第79図）。平成5年度までに6次にわたる調査が実施され、横穴式石室をもつ後期の群集墳地帯であることが明らかとなっている。5次調査は、丘陵頂部の東側部分にて、幅3m、全長200mに対して実施されたものである。調査では、石室を5基と周溝を検出した。このうちT4（第4トレンチ）の調査では、2基の石室と石室より30m離れた地点で非陶邑系須恵器の壺が出土している（第80図1）。出土状況は、緩傾斜地を削平し凹地を造成した後、鉄鏟直上に非陶邑系須恵器の壺と土師器の壺が各1点並べられて置かれている状況にあった。この他、T4からは先の2点の周辺より（10~20cm離れた同じ土壌より）非陶邑系と思われる須恵器の高環片1点と、3m程離れた地点より土師器の高環（完成品）1点が出土している（第83図4~6）。

2) 東野お茶屋台古墳群（松山市東野4丁目、阪本安光1979）

東野お茶屋台古墳群は、松山平野北東部にある低位段丘陵上に立地する（第79図）。昭和50年から3次にわたる調査が行われ、群集墳の一部が検出されている。このうち、3次調査（昭和53年）により検出された9号墳の周溝からは非陶邑系須恵器の壺が出土されている（第81



第79図 非陶邑系須恵器出土の主要遺跡とその周辺 (S = 1 : 180,000)

表35 非陶邑系壺の計測値

遺跡	計測値	測定方法										個数(本)	叩き	叩き目大(m)
		器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	側最大径(cm)	口縁~凸部(cm)	口縁~底(cm)	蓋長(cm)	流域上(山数)	流域中(山数)	流域下(山数)			
東山	24.4	17.5	13.5	25.8	1.6	5.2	(32)	31	45	6・4・4	正鶴子	4×4		
東野	25.0	17.7	13.6	26.7	1.7	5.0	(40)	(40)	(52)	10・6・6	斜鶴子	4×5		
出作	25.2	17.4	14.2	27.3	1.5	4.8	41	39	53	8・6・6	正・斜鶴子	3・4・5・3		
最大差	8mm	3mm	7mm	15mm	2mm	4mm	9	9	8	4・2・2	正・斜	1.5mm		

図2)。9号墳は周溝の一部を検出するにとどまり、墳形は方墳ではないかと報告されている。周溝は、幅3m前後、コーナー部分では6mを測る。溝内からは、須恵器、土師器、鉄器等が出土しているが、報告掲載図版からすると原位置ではなく流入品である可能性が強い遺物である。なお、この周溝からは、先の壺出土地から4m離れた地点より初期須恵器に属する器台が出土している。(第83図7)。

3) 出作遺跡(伊予郡松前町出作、相田則美他1993)

出作遺跡は、松山平野南西部の沖積低地上に立地する(第79図)。調査は昭和52年度に行われ、約3,000m²中に祭祀遺構3基(5世紀後半~6世紀前半)、自然流路2条(註1)、竪穴式住居1棟、焚火跡多数などが検出されている。このうち、祭祀遺構SXO2からは、多量の須恵器と土師器、石製模造品、鉄製品が出土している。該当資料(第82図3)はSXO2から出土しているがSXO1からも非陶邑系須恵器は多数出土している。

4) 比較

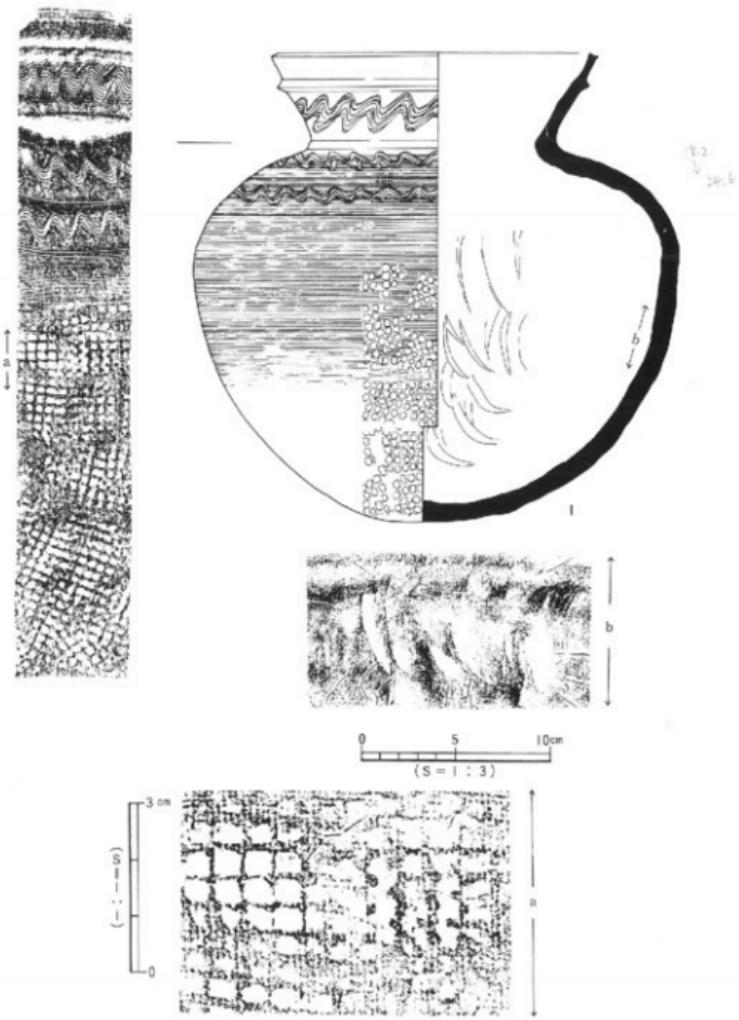
次に、東山古墳群、東野お茶屋台、古墳群、出作遺跡より出土した酷似する非陶邑系須恵器の壺について、形態、法量、成形・調整、施文等について比較分析するものとする。なお、以下論述に際しては資料名を「東山の壺、東野の壺、出作の壺」と略称し、資料の詳細は観察表(表35)を参照していただきたい。

①形態 肩部が強く張り、上外方に開くやや長い口頸部をもち、口縁下1.5~1.7cmの外面に突帶を有している壺である。總じて形態に差はないが、ただ1点違いがみられる。それは、頸胴部境にある。出作の壺では明瞭な突出がみられるが、東野の壺にはこの突出はみられない。東山の壺は頸部が一部欠損しているため充分な対象資料といい難しいが、観察可能な場所では一部に不明瞭な(低い)突出部分が看取されたが、この突出が全面にみられたとは考えにくい。この突出は、貼り付け凸帯として意図されて施されたものなのか、ナデにより無意識的に生じたものであるかは判断できなかったが、形態として違いが認められる唯一のものとして注目されるものである。

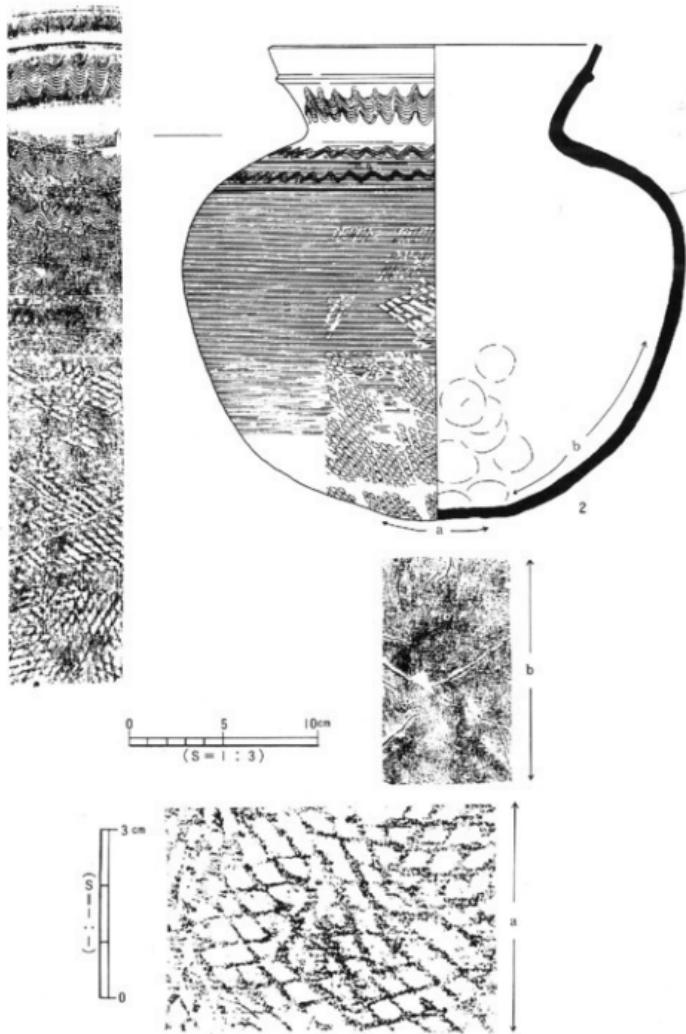
②法量 器高、口径、頸部径、胴部最大径、口縁から口縁下凸帯上までの長さ(以下、「口縁~凸帯長」)、口縁部から頸部下端までの長さ(以下、「口頸長」)について計測を行った(表35)。

器高は24.4~25.2cmで2~8mmの差がある。口径は17.4~17.7cmで1~3mmの差、頸部径は13.5~14.2cmで1~7mmの差、胴部最大径は25.8~27.3cmで9~15mmの差、口縁~凸帯長は1.5~1.7cmで1~2mmの差、口頸長は4.8~5.2cmで2~4mmの差となる。

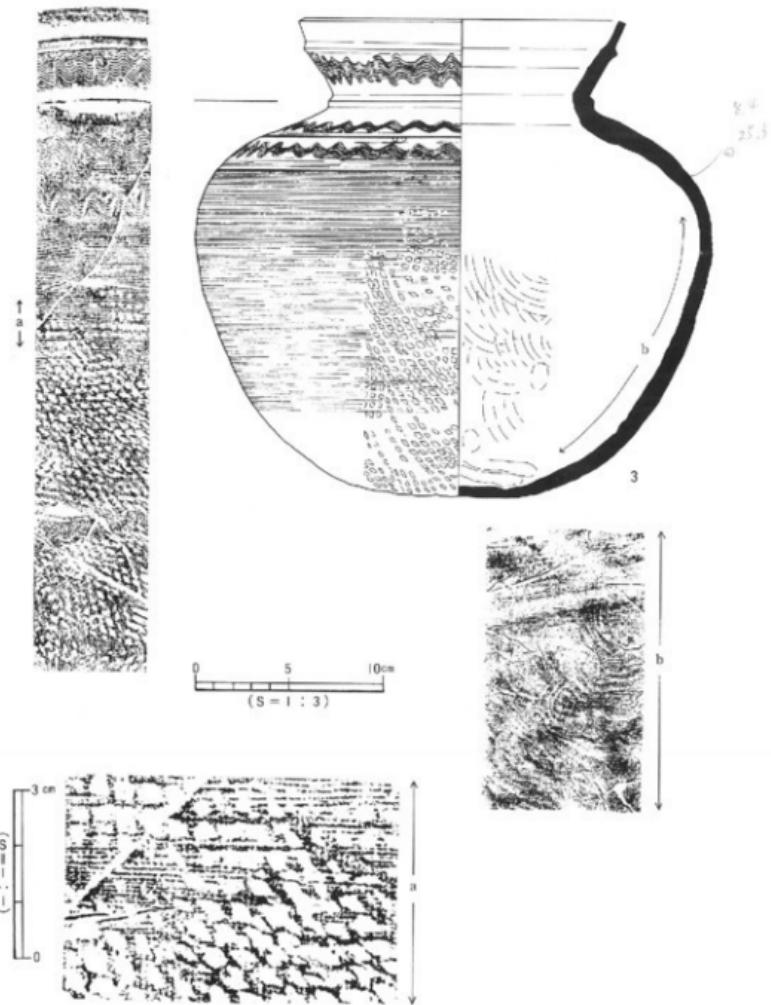
計測の結果、口径、頸部径、口縁~凸帯長、口頸長は2~4mmという差で、極めて近似したものであることが分かる。これに対し、器高と頸部径、さらに胴部最大径は7~15mmでやや差の大きいものとなっていることが分かる。このうち、器高は成形から焼成にいたるまでの土器の移動による底部変化(平坦化等)が最大の要因と考えられ、頸部径は頸部下



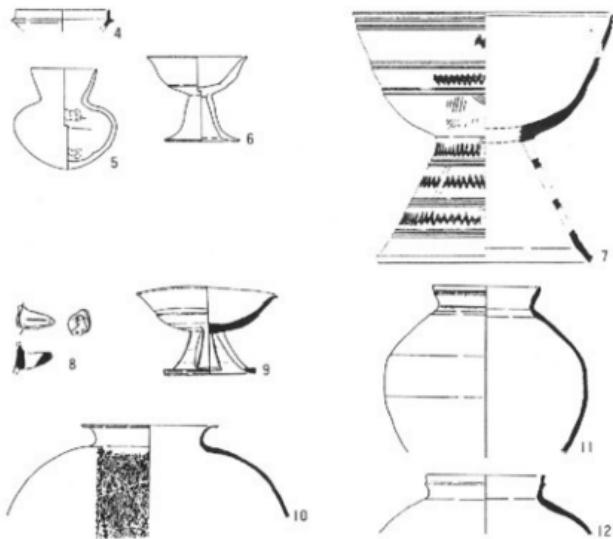
第80図 東山古墳群5次調査T4出土遺物



第81図 東野お茶屋台古墳群 9号墳出土遺物



第82図 出作遺跡 SX 02出土遺物



4~6: 東山古墳群5次T4 7: 東野お茶屋古墳群9号墳調査 8~12: 出作遺跡SX02

第83図 非陶器系壺に伴出する遺物

端の突出の有無が影響しているものと考えられ、両者の計測値差は理解ができるところである。一方、最大差が生じている胸部最大径については東山の壺が最小値で、出作の壺が最大値となっているが、これは器高と同じ傾向を示したものでもあり、結果として胸部の法量差として認められるものであるといえる。

③成形及び調整 成形・調整は3点とも共通する手法及び工程である。

外面は口頸部はナデ、胸部は叩き後上半部はカキ目調整を行う。内面は、底部は当て具ないし指頭や指ナデによる凹凸がみられ、胸部は上半部はナデ、下半部は無文の当て具痕が看取される（亀田修一1989）。内面の口頸部はヨコナデ調整である。調整は、総じて同じ手法となるが、仕上げにわずかな差がみられるものとなっている。

外面の叩きによる成形は観察の結果、胴上半部の波状文の位置（二段の波状文間）に、わずかながら叩き痕が看取されることにより、叩き成形は胴部全体に行われていたことが新たに分かった。また、叩き目の観察では、東山の壺は全面に正格子の目（1辺4mm大）が、東野の壺は全面に斜格子の目（1辺4~5mm）が、出作の壺では上半が正格子（1辺3.5mm）、下半が斜格子（1辺4~4.5mm）の目が看取され、叩き板に違いが認められる。なお、出作の壺では、下半の斜格子の目は上半の正格子の目を覆っているため、叩き成形が上半か

ら下半に、さらに叩き板が正格子から斜格子に移行したことが明らかとなった。

内面では、胴部下半の無文の当て具痕は、東山と出作の壺では当て具の外郭が段として三ヶ月状に残るが、東野の壺はナデが丁寧に行われた結果丸みのある凹みとして看取されるにすぎないものとなっている（註2）。口頸部から胴部上半は、東山・出作の壺ではナデが強く行われた結果明瞭な稜が生じ、それに対し東野の壺は強いナデが行われない結果明瞭な稜は看取されないものとなっている。

④施文 頸部下半に1段、胴部上半に2段の波状文を施すことと共通としている。

胴部上半の施文工程では、カキ目調整後、出作の壺では施文部分をナデによりカキ目を消した後、波状文を施すものとなっている（東野・東山の壺はカキ目が残る）。この他、二段の波状文間と下部の波状文下位にはカキ目とは違う1条の沈線が認められる。二段の波状文の位置をあたかもこの線により決定したかのようである（この線と波状文との切り合いはなく、どちらが先に施されたのかは特定できなかった）。

なお、今回の観察では試行的に、波状文の方向や波状文数を調べた。

波状文の方向は、波状文の上部の方向を「左」・「右」で現すこととした。波状文の方向を頸部のものから胴部のものへと順に記述すると、東山・東野の壺は右・左・左となり、出作の壺は左・右・右となる。また、波状文の数では、東野と出作の壺は、東山の壺よりも1つの波状文がやや小さいことで10個程度多く施されるものとなっている。さらに、標目の本数も波状文数と同様な傾向を示し東野と出作の壺は、東山の壺より多く看取された。

以上、形態、法量、成形・調整、施文について比較を行ってきた。形態と法量では、口頸部の外反の角度も大差なく（第84図）、一定の形態と法量をもっていた、形成・調整、施文では、同じ手法と工程が行われ、工具や仕上げの致密さに限り差がみられるものであった（註3）。よって、東山・東野・出作の壺は細部にわざかな違いをもつが、総じて同じ形質をもつ土器といえるだろう。そして3者間には同一の土器製作概念が存在していたものと考えられる。

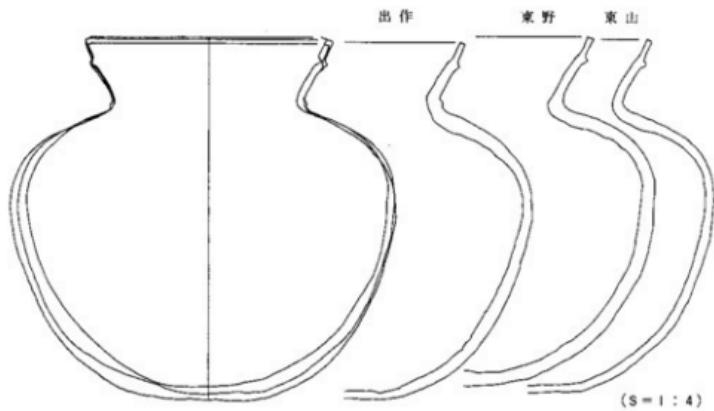
3. 集落と流通

さて次に、酷似する非陶邑系須恵器（壺）が出土する遺跡について、遺構や出土遺物、特にその共通性を取り上げ、酷似土器保有（出土）の背景を考えることとする。

1) 東山古墳群と集落

東山古墳群は、今までのところ5世紀後半から7世紀前半に連続と墓域として存在していたことが分かっている。5世紀後半～6世紀初頭に比定される須恵器では、陶邑系のものが大多数を占め、非陶邑系のものは当該資料と他に数点が出土するにすぎない（註4）。ところで、当該資料の出土状況は、出土地点と共伴遺物において特異な状況を示していた（前述

墳丘外で、鉄鎌を伴って出土）。平野内には、墳丘に関する祭祀的行為と思われる資料はあるが（註5）、土器と鉄製品が同時に墳丘外に共伴される例は現在までに確認事例はない。よっ



第84図 酷似する壺

て、当該資料である非陶邑系の壺と鐵鏡は、一般的な墳丘内祭祀とは異なる一面をもつものであると考える状況にあるといえる。

次に、東山古墳群に対応する集落であるが、丘陵の西接地では5～7世紀代に比定される竪穴住居址や掘立柱建物跡が多数検出されている。福音寺遺跡、福音寺筋遺跡、福音小学校構内遺跡、北久米淨蓮寺遺跡などがそれで、川附川と堀越川に挟まれた地域（遺跡）は立地や遺構・遺物の時期より東山古墳に対応する集落域（仮に「福音寺地区」と称す）と考えられる。このうち、筋達日遺跡、福音小学校構内遺跡からは、定森氏が指摘するように陶邑系須恵器とは異系譜の須恵器が10点前後出土している。これ等の遺跡においても、出土量をみるとやはり陶邑系須恵器が主体であり、異なるものは少数にとどまり、出土品が非陶邑系で占められる遺構はないのである（註6）。さて、この地域から検出される遺構には1辺7mにおよぶ大型の方形竪穴住居址（カマド付き）が福音小学校構内遺跡や北久米淨蓮寺遺跡（橋本雄一-1993）より検出されており、出土物では福音小学校構内跡から鐵製品や石製玉類（子持ち勾玉1点の他、白玉や勾玉も出土）が出土している。福音寺遺跡一帯は、カマド、鐵製品、石製品を生活に需要するといった、5世紀後半の一つの典型的な集落といえる。

2) 東野お茶屋台古墳群と集落

東野お茶屋台古墳群は、平野の北東部の低位段丘陵に立地するが、隣接する丘陵には他に畠寺竹ヶ谷古墳群などがあり、現在までにこの地域では、5世紀後半から6世紀までに比定される古墳が存在していたことが分かっている。この地域での非陶邑系須恵器の出土は、東野お茶屋台古墳群出土の壺と器台1点のほかに、畠寺竹ヶ谷古墳群から壺の口縁部片1点が

出土しているが（松本敏三1986）、出土品の大多数は陶邑系のもので占められている。

これ等の古墳群に対応する集落は、立地上古墳群の眼下西方にある石手川と川附川に挟まれた地域（桑原地区）であると考えられる。この地域は近年の調査により5世紀～6世紀に比定される竪穴式住居址が樽味立添遺跡、樽味高木遺跡で確認されており、これ等の遺跡がいすれかの古墳群と対応するものであると考えている。このうち樽味高木遺跡からは、包含層中であるが5世紀代に比定される軟質土器片（3個体分）が出土しており、松山平野では同資料としては唯一の確認資料となっている。また、桑原本郷遺跡からは、包含層中より5世紀末の須恵器（陶邑系）と100点余りの滑石製白玉が出土している。福音寺遺跡一帯と同じく、5世紀後半～6世紀初頭の注目される資料が、桑原地区からは出土しており、集落の充実度がうかがえる。

3) 出作遺跡と集落・墳墓

出作遺跡は、松山平野南西部にあり、旧重信川と旧大谷川に挟まれた沖積低地の微高地上に立地する。祭祀遺跡として著名であるが、報告書刊行以降、祭祀遺跡として限り評価してよいものなのかという疑問も生まれている（註7）。祭祀遺構のなかで非陶邑系須恵器はある範囲に集中して出土している状況にあり、また出土物全体としては、陶邑系須恵器と土師器が多数を占めている状況にある。検出遺構には、多量の土器・石製品・鉄製品（製品・未製品・素材）を出土した性格不明の遺構3基以外に、溝2条と調査区内の北部分で方形の竪穴式住居址が検出されている。住居址は性格不明遺構と同時期であるのかは判断されていないが、一部の担当者は検出遺構は同時代・同集落内的一部分にあたり、方形住居址も同時期に存在していたものと想定されると考えている。ただし、該当資料以降、周辺地域での発掘調査がないため、出作遺跡周辺の集落様相は想像の域をでないのが現状である。一方、墓域については、5世紀代に比定される古墳が、出作遺跡の南東1.5kmにある。猪窓古墳と呼ばれているもので、調査の結果鉄製品と鉄生産に関わる遺物が出土しており、時期的及び出土資料的にも出作遺跡と関係が強い古墳と考えられている。出作遺跡の集落分析については、今後の資料に期待するところが大きいのである（註8）。

東山古墳群・東野古墳群とその集落、出作遺跡とその周辺遺跡を概観したが、そこには幾つかの共通する現象がみられる。一つは、非陶邑系須恵器の出土量（少なさ）、二つには5世紀代集落に需要される新しい文化の移入と定着化である。

松山平野では、東山古墳群・東野お茶屋台古墳群、出作遺跡の他に、非陶邑系須恵器は福音寺筋違日遺跡、福音小学校構内遺跡、五郎兵衛谷古墳・素鷺小学校構内遺跡等数ヶ所の遺跡から出土がみられる。いずれも、その出土量は出作遺跡を除くと10点に満たない量であり、伴出ないし、同遺跡から出土する（5世紀後半から6世紀初頭の）須恵器は、大多数が陶邑系のもので占められているという状況にある。

つづいて、非陶邑系須恵器出土の地域性を考えると、5世紀後半の集落ではカマドや鉄製品、石製模造品が使用され、墳墓では群集墳が成立している状況にある。そして福音寺地区（東山古墳や福音寺遺跡等）と、桑原地区（東野お茶屋台古墳群や樽味高木遺跡等）には6世紀前半に比定される前方後円墳が地域境とその周辺に存在している（註9）。集落においても5世紀後半に充実する集落経営が6世紀にも継続し、そして6世紀前半には該当集落は平野の要地として存在していたものと想定される状況にあるのである。

このように、非陶邑系須恵器は5世紀後半から6世紀に経済的に充実をみせる集落に、少量が移入され、しかも非日常的な形で存在する傾向が高いものであるといえる。

4.まとめ

松山平野で出土した非陶邑系須恵器について、酷似する3点に注目し、その類似性を追究した。その結果、3点については同じ形質であり、その差異は製作工程における最終段階で、工具や手法（調整）という細かい点で認められるにすぎないことが分かった。一方では課題も生じた。法量では、成形→乾燥→焼成に至る過程において土器自体は収縮するものであり、それがどれほどのものになるかを鑑みなければならず、個体差（収縮率と許容範囲）の研究が必要であるといえる（註10）。

さて、松山平野における非陶邑系須恵器は、長井氏の調査により窯址が確認されたことで古くより当平野で生産が開始され、そのなかで出現するものであると考えられる。そして、今回取り上げた3点を含め非陶邑系須恵器は松山平野においては6世紀初頭まで集落内に存在していた可能性が近年の調査により想定されるところである。6世紀第1四半紀以降は、細部に在地的要素をもつが、基本的には陶邑系須恵器で占められることになるのである。ここで問題となるのは、6世紀第1四半紀以降の非陶邑系須恵器の工人集団の動態である。想定されることは、非陶邑系の工人集団は、6世紀第1四半紀以降平野を退出するか、平野にとどまり、平野に存在する陶邑系の工人集団に同化するかの二つの選択がある（註11）。このどちらを選択したにしろ、5世紀後半に存在した非陶邑系の土器作りは遅くとも6世紀初頭に大きな変化を生じたことになる。

また、いまひとつ問題となるのは、非陶邑系の土器作りの出自と分布である。松山平野のものについては、松本敏三氏や亀田修一氏、そして定森氏より朝鮮半島南部に類例や出自を求める見合がある（註12）。筆者は、現在この問題に対し自論をもちえないが、定森氏が提唱する半島南部にルーツが求められることを支持しておきたい。

そこで、本稿で取り上げた酷似する壺3点の製作に関わる問題である。酷似する壺3点は、その形態（口頸部形態）や頸部の突起等において類似例が日本にはないということで、半島南部にルーツを持ち、当平野で生産された土器と考える。さらに、平野内にも多量に出土がないため、複数工人による生産というよりは「一人による生産品」として積極的に考える



1. 東山古墳群 5次調査 T4 出土

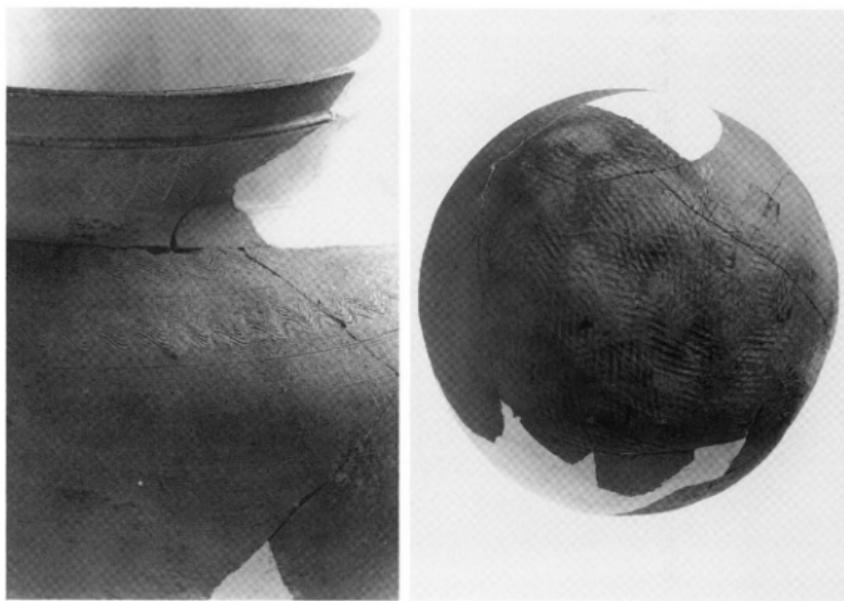


3. 出作遺跡 SX02 出土

第85図 東山古墳群・出作遺跡出土遺物



2. 東野お茶屋台古墳群 9号墳周溝出土



第86図 東野お茶屋台古墳群出土遺物

ものである。

以上、松山平野で出土した酷似する非陶邑系須恵器等の比較研究より、当平野の須恵器生産と社会構造を一部ではあるが明らかとした。今後は非陶邑系須恵器を製作した工人の出自と終えん、また5世紀後半から6世紀初頭に出現するカマドや鉄製品の製作等が平野のなかにいかに受け入れられたかなどを分析し、古墳時代中期～後期の社会構造を明らかとしなければならないだろう。

最後になったが、本稿を成すにあたり定森秀夫氏、村上恭通氏、谷若倫郎氏、西川真美氏、大政哲志氏、宮内慎一氏、山之内志郎氏、水口あをい氏、山下満佐子氏、松山桂子氏、平岡直美氏には、多大の助言と協力をいただいた。文末ながら記して感謝の意を表すものである。また、執筆の機会と脱稿が遅れたにも関わらず配慮をいただいた細集の田城武志氏には深謝申し上げる。本稿については、不勉強なところが多く、関係機関や先学者に多少なりとも迷惑をおかけすることとなるであろうが容赦願いたい。

(文献) 猪口達也 1990 「須恵器」『日本考古学協会1990年度大会研究発表要旨』。長井数秋 1992 「松山平野の須恵器編年」『愛媛考古学』12号 愛媛考古学協会。定森秀夫 1993 「出作遺跡の非陶邑系須恵器・陶質土器」『出作遺跡Ⅰ』松前町教育委員会。田城武志 1994 「東山古墳群第一4・5次調査」松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター。阪本安光 1979 「東野遺跡埋蔵文化財調査報告書」愛媛県教育委員会。相田則美他 1993 「出作遺跡Ⅰ」松前町教育委員会。龜田修一 1989 「陶製無文当て具小考」『生產と流傳の考古学』松山浩一先生退官記念論文集Ⅰ。樋本雄一 1993 「北久米淨蓮寺遺跡～3次調査地～」松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター。松本敏三 1986 「四国地方」『日本陶磁の源流』柏耆房。

(註) 1) 調査関係者の一部には、人工的溝ではないかという指摘もある。2) 龜田氏が指摘する木製の無文当て具の可能性を、東山と出作の盡はもっている。3) 3点とも、色調は緑色が強いものである。また、胴部最大部に指顎状の凹みが1個体に2～3ヶ所見られることも共通点としてあげられる。4) 東山古墳群4次調査の9号墳周溝内からは、非陶邑系須恵器の高环1点、壺2点が出土している。5) 市内峰ヶ台に立地する客谷古墳B地区2号墳には、墳丘に須恵器の大旗2点と壺1点が埋められていた。6) 非陶邑系須恵器は、單独で出土する例は基本的にはない。7) 平成6年7月瀬戸内海考古学研究会にて講論された。例えば鉄製作や遺構内出土遺物の時期をどう考えるかなど。8) 近年の調査で、伊予市内教育委員会による出作遺跡の南北約2.5kmの地点にある片山太郎丸遺跡の調査が実施され、出土物中に非陶邑系須恵器が管見でき、出作遺跡とは違う(狹義)集落の存在が想定される。森光晴 1993 「下三谷片山・太郎丸埋蔵文化財調査報告書」伊予市教育委員会。9) 綏石山古墳や三島神社古墳という5世紀末～6世紀中頃に比定される前方後円墳がある。10) 燐成時に陶器では15～16%、磁器では18～20%の収縮があり、個体差は必ず生ずるという。伊予郡砥部町砥部焼伝統産業会館武小林長氏の御教示による。11) 筆者は、今回対象とする壺と同形態を有するものが、6世紀代に平野の内外で出土しないため、退出というよりは同化したものとして考えている。12) 松本敏三 1986 「四国地方の須恵器窯」『考古学ジャーナル』。龜田修一 1989 「中国・四国地域」『陶器土器の国際交流』柏耆房。定森秀夫 1993 「出作遺跡の非陶邑系須恵器・陶質土器」『出作遺跡Ⅰ』松前町教育委員会。

本稿は、松山市考古館平成4年度企画展記念講演会「弥生・古墳時代の集落変遷」において、筆者が発表した要旨を加筆・修正したものである。資料の実見に際しては、愛媛県教育委員会、松前町教育委員会、松山市考古館には配慮をいただいた。記して感謝申し上げるしだいである。

写 真 図 版

1. 造構の撮影

使用機材：

カメラ アサヒペンタックス67
ニコンニューFM2 他
レンズ ペンタックス67 75mmF4.5 他
ズームニッコール28~85mm 他
フィルム プラス×パン・E.P.P
ネオンパンSS・カラーネガ

2. 遺物の撮影

使用機材：

カメラ トヨ／ビューア45G
レンズ ジンマーS240mmF5.6 他
ストロボ コメット／CA-322灯・CB2400 2灯（バンク使用）
スタンド他 トヨ／無影撮影台・ウェイトスタンド101
フィルム 白黒 プラスXパン4×5 カラー E.P.P 4×5
一部赤外線写真（ハイスピードインフラレッドフィルム）使用

3. 遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付け

（白黒に限る。）

使用機材：

引伸機 ラッキー-450MD
ラッキー-90MS
レンズ エル・ニッコール135mmF5.6A
エル・ニッコール50mmF2.8N
印画紙 イルフォードマルチグレードIRC

4. 製版 150 線

印刷 オフセット印刷
用紙 マットカラー110kg



1. 9号墳調査前（南西より）



2. 9号墳周溝検出状況（北より）



1. 9号・13号墳周溝検出状況（南より）



2. 9号墳N.E区周溝内遺物出土状況（南西より）



1. 9号墳周溝内遺物出土状況（南より）



2. 9号墳主体部・SK 3〔左上〕・SK 4〔中央下〕（北より）

東山古墳群4次調査

図版四



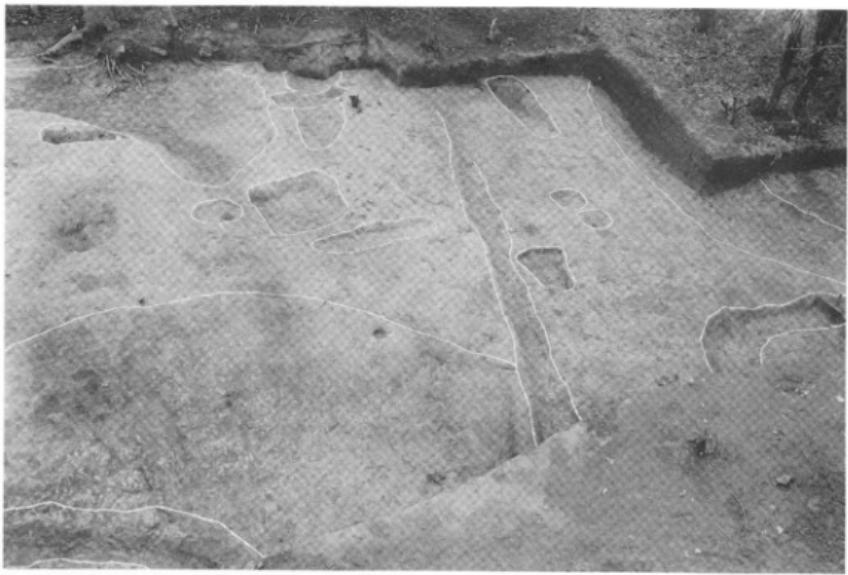
1. 9号墳主体部・SK3〔中央下〕・SK4〔右上〕(東より)



2. 9号墳主体部・13号墳周溝〔下〕(南より)



1. 15号墳SE区遺物出土状況（西より）



2. 9号墳周溝〔左上〕・13号墳周溝〔下〕・15号墳周溝〔右〕（南西より）



1. 16号墳NW区遺物出土状況（北東より）



2. 16号墳NW区遺物出土状況（南より）



1. 16号墳主体部・周溝（南より）



2. 16号・18号墳周溝（東より）



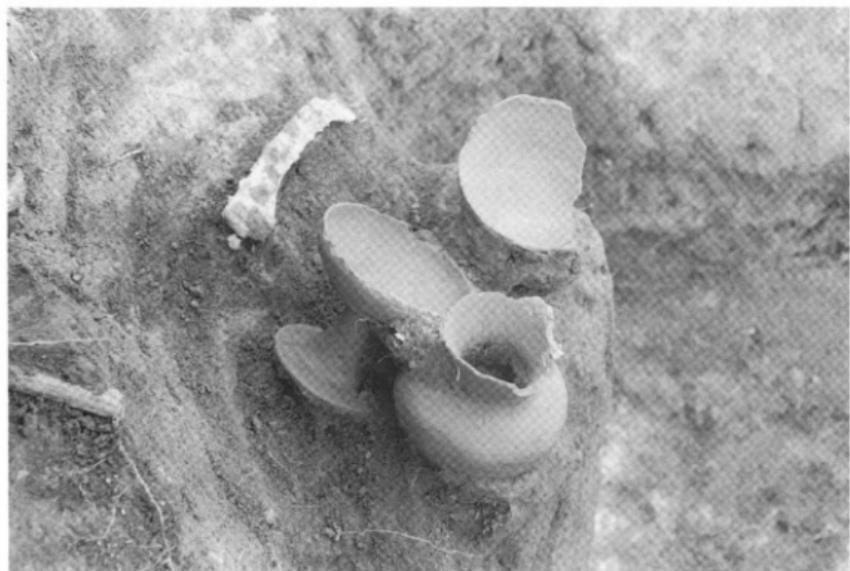
1. SK 3 (東より)



2. SK 4 (東より)



1. SK 6 遺物出土状況（西より）



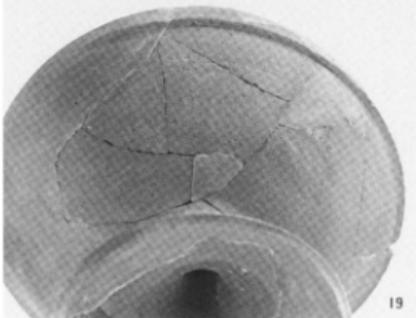
2. SK 6 遺物出土状況（東より）



1. SD 1 遺物出土状況（南より）



2. SD 1 遺物出土状況（南より）



1. 9号墳周溝内出土遺物①



20



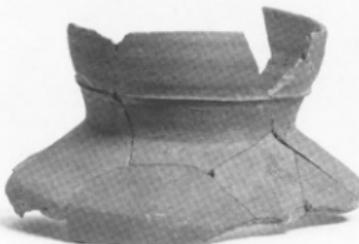
21



22



24



25



26

1. 9号墳周溝内出土遺物②



27



28

1. 9号墳周溝内出土遺物③



32



33



34

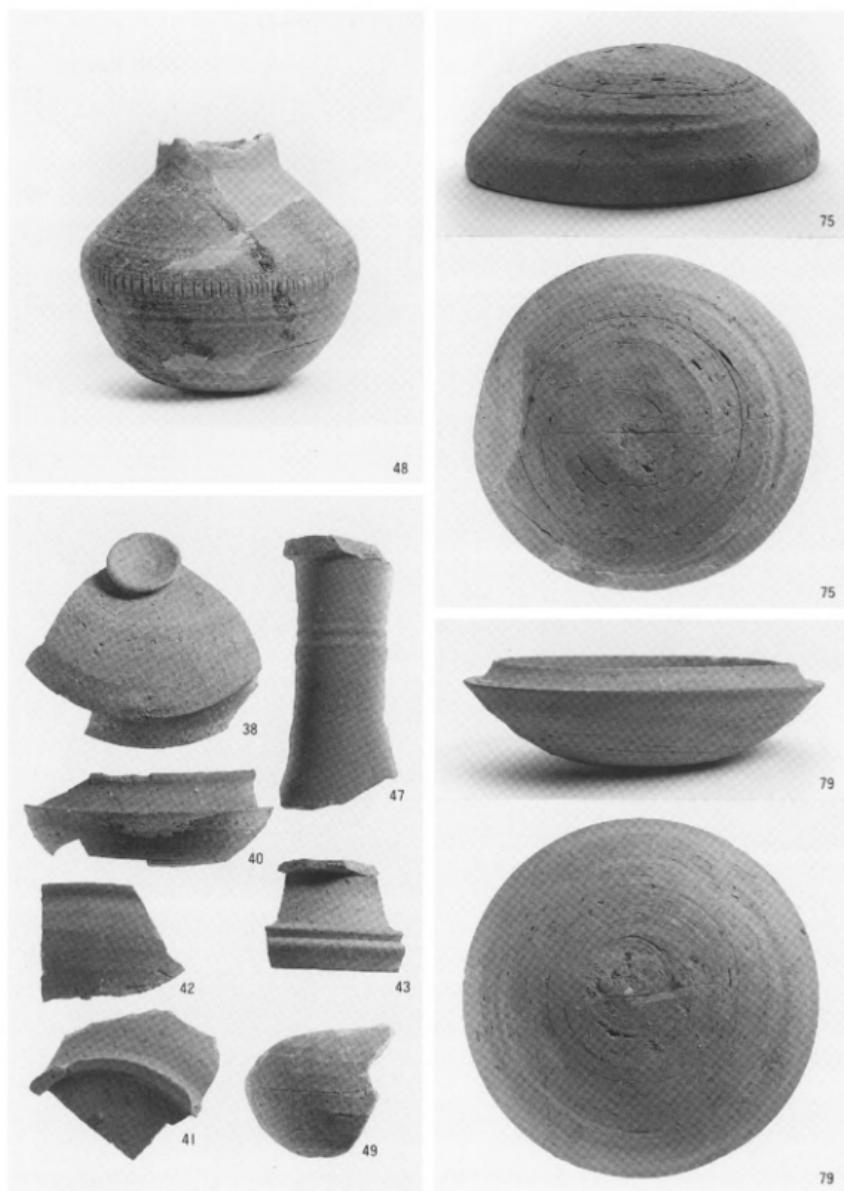


35



36

1. 9号墳周溝内出土遺物④



1. 13号・16号墳周溝内出土遺物

図版一六



76



80



77



81



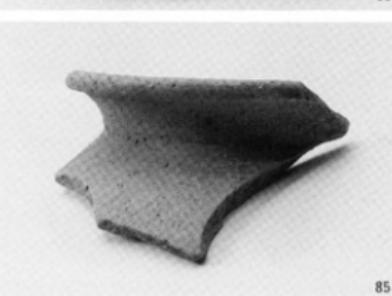
78



82



84

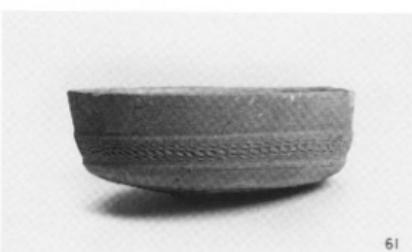


85

1. 16号墳周溝内出土遺物



50



61



54



58



64



66

1. 15号墳周溝内出土遺物①



69



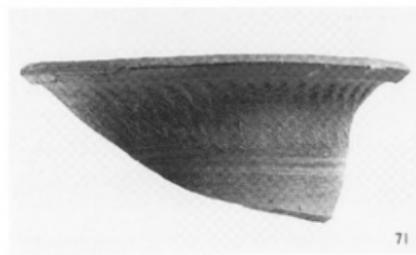
72



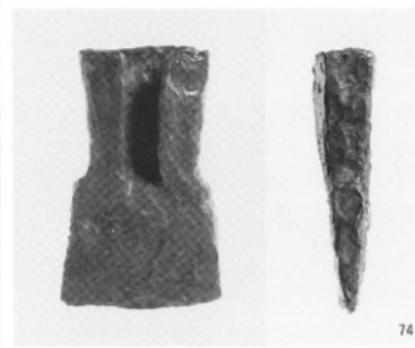
70



73

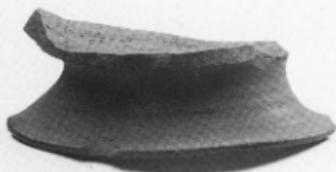


71



74

1. 15号墳周溝内出土遺物②



92



94



95



96



97



98

1. 18号墳周溝内・SD1・SK6出土遺物